

DIOSA/XTP V3.1

環境定義リファレンス

輸出する際の注意事項

本製品(ソフトウェア)は、外国為替及び外国貿易法で規制される規制貨物(または役務)に該当することがあります。

その場合、日本国外へ輸出する場合には日本政府の輸出許可が必要です。

なお、輸出許可申請手続きにあたり資料等が必要な場合には、お買い上げの販売店またはお近くの当社営業拠点にご相談下さい。

はしがき

本書は、業務システムの構築を支援する DIOSA/XTP 製品群の環境定義リファレンスです。

本書の読者としては、業務アプリケーション開発を担当し、OS、TPBASE、TAM、Oracle、その他関連 PP の使用法を一通り心得ているシステム技術者を想定しています。

2023 年 6 月 2 版

本書の関連説明書としては次のものがあります。

- DIOSA/XTP 利用の手引き
- DIOSA/XTP 導入の手引き
- DIOSA/XTP メモリキャッシュ 利用の手引き
- DIOSA/XTP データストア 利用の手引き
- DIOSA/XTP データ変換・通信オプション 導入の手引き
- DIOSA/XTP データ変換・通信オプション 利用の手引き
- DIOSA/XTP コマンドリファレンス
- DIOSA/XTP API リファレンス
- DIOSA/XTP メッセージリファレンス

備考

- (1) Microsoft、Windows は、米国あるいはその他の国における米国 Microsoft Corporation の商標または登録商標です。
- (2) UNIX は、X/Open カンパニーリミテッドが独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。
- (3) HP、HP-UX は、Hewlett-Packard 社の商標または登録商標です。
- (4) Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
- (5) Red Hat は、米国およびその他の国における Red Hat, Inc. の商標または登録商標です。
- (6) Oracle と Java は、Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の米国およびその他の国における登録商標です。
- (7) PostgreSQL は、PostgreSQL の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
- (8) This product includes software developed by the Apache Group for use in the Apache HTTP server project (<http://www.apache.org/>).
- (9) その他、記載されている会社名、製品名は、各社の登録商標または商標です。

目次

第 I 編 環境変数	1
第 1 章 環境変数の説明形式	2
1.1 環境変数の説明形式	2
1.1.1 説明の記述項目	2
1.1.2 環境変数の表記法	3
第 2 章 環境変数	4
2.1 アプリケーション実行制御	4
2.1.1 環境変数一覧	4
2.1.2 DIOSA_APE_FILEMAXSIZE (テーブル型ファイル最大サイズ)	8
2.1.3 DIOSA_APPTRCFFILEOUTPUTMODE (APP トレース (直接) ファイルモード)	9
2.1.4 DIOSA_APPTRCFFILESIZE (APP トレース (直接) ファイル最大サイズ)	10
2.1.5 DIOSA_APPTRCFFLUSHMODE (APP トレース (直接) 強制フラッシュモード)	11
2.1.6 DIOSA_APPTRCFFMAXNUM (APP トレース (直接) 最大ファイル数)	12
2.1.7 DIOSA_APPTRCFLEVEL (APP トレース (直接) ファイル出力レベル)	13
2.1.8 DIOSA_APPTRCFOUTUSERDATA (APP トレース (直接) ユーザデータ有無)	14
2.1.9 DIOSA_APPTRCFOVERWRITE (APP トレース (直接) ファイル上書き可否)	15
2.1.10 DIOSA_APPTRCFPATH (APP トレース (直接) ファイルパス)	16
2.1.11 DIOSA_APPTRCFSAVEDIR (APP トレース (直接) 退避先ディレクトリ名)	17
2.1.12 DIOSA_APPTRCMFILESIZE (APP トレース (メモリ) ファイル最大サイズ)	18
2.1.13 DIOSA_APPTRCMFMAXNUM (APP トレース (メモリ) ファイル最大数)	19
2.1.14 DIOSA_APPTRCMIDNUM (APP トレース (メモリ) トレース識別 ID)	20
2.1.15 DIOSA_APPTRCMLEVEL (APP トレース保存領域出力レベル)	21
2.1.16 DIOSA_APPTRCMOUTUSERDATA (APP トレース保存領域ユーザデータ有無)	22
2.1.17 DIOSA_APPTRCMOVERWRITE (APP トレース (メモリ) ファイル上書き可否)	23
2.1.18 DIOSA_APPTRCMPAGE (APP トレース保存領域数)	24
2.1.19 DIOSA_APPTRCMPATH (APP トレース (メモリ) ファイルパス)	25
2.1.20 DIOSA_APPTRCMSIZE (APP トレース保存領域サイズ)	26
2.1.21 DIOSA_BACFILENAME (バッチ AP 制御パラメータファイル名)	27
2.1.22 DIOSA_BACRETRYNUM (バッチ AP 制御ロールバックリトライ最大回数)	28
2.1.23 DIOSA_CDDAPITIMEOUT (コマンド配信応答待合せ時間)	29
2.1.24 DIOSA_CDDEXECTIMEOUT (コマンド配信実行応答待ち合わせ時間)	30
2.1.25 DIOSA_CDDPORT (コマンド配信デーモン用ポート番号)	31
2.1.26 DIOSA_CDDRTRYCNT (コマンド配信接続リトライ回数)	32
2.1.27 DIOSA_CDDRTRYINTVL (コマンド配信接続リトライ間隔)	33
2.1.28 DIOSA_CDDSLEEPINTVL (コマンド配信コマンド終了確認間隔)	34
2.1.29 DIOSA_CDDTMPDIR (コマンド配信一時ファイル作成ディレクトリ名)	35
2.1.30 DIOSA_COCCOMMITOPS (CO 制御コミット処理稼働統計情報採取)	36

2. 1. 31	DIOSA_DAM_BASEINVL (デーモン死活監視ベース間隔).....	37
2. 1. 32	DIOSA_DAM_DOWNCNT (デーモン死活監視再起動時間内ダウン回数).....	38
2. 1. 33	DIOSA_DAM_MONINVL (デーモン死活監視間隔).....	39
2. 1. 34	DIOSA_DAM_RESINVL (デーモン死活監視再起動監視間隔).....	40
2. 1. 35	DIOSA_DAM_RTYCNT (デーモン死活監視再起動リトライ回数).....	41
2. 1. 36	DIOSA_DAM_RTYINVL (デーモン死活監視再起動リトライ間隔).....	42
2. 1. 37	DIOSA_DBGERRFILESIZE (障害ログ情報出力ファイル最大サイズ).....	43
2. 1. 38	DIOSA_DBGERRFMAXNUM (障害ログ情報出力ファイル最大ファイル数).....	44
2. 1. 39	DIOSA_DBGERRPAGE (障害ログ情報保存領域数).....	45
2. 1. 40	DIOSA_DBGERRPATH (障害ログ情報出力ファイルパス).....	46
2. 1. 41	DIOSA_DBGERRSIZE (障害ログ情報保存領域サイズ).....	47
2. 1. 42	DIOSA_DBGFFLUSHMODE (デバッグトレース強制フラッシュモード).....	48
2. 1. 43	DIOSA_DBGFUNC (デバッグトレース関数情報収集フラグ).....	49
2. 1. 44	DIOSA_DBGLEVEL (デバッグトレース情報出力レベル).....	50
2. 1. 45	DIOSA_DBGLOGFILESIZE (運行ログ情報出力ファイル最大サイズ).....	51
2. 1. 46	DIOSA_DBGLOGFMAXNUM (運行ログ情報出力ファイル最大ファイル数).....	52
2. 1. 47	DIOSA_DBGLOGLEVEL (運行ログ情報出力レベル).....	53
2. 1. 48	DIOSA_DBGLOGPAGE (運行ログ情報保存領域数).....	54
2. 1. 49	DIOSA_DBGLOGPATH (運行ログ情報出力ファイルパス).....	55
2. 1. 50	DIOSA_DBGLOGSIZE (運行ログ情報保存領域サイズ).....	56
2. 1. 51	DIOSA_DBGPATH (運行ログ情報出力ファイル(直接出力)パス).....	57
2. 1. 52	DIOSA_DBGMASK (デバッグトレース情報出力マスク値).....	58
2. 1. 53	DIOSA_DBGOUTUSERDATA (ユーザデータ出力有無).....	59
2. 1. 54	DIOSA_DBGPERF (デバッグトレース性能情報収集フラグ).....	60
2. 1. 55	DIOSA_DBGTFMAXNUM (デバッグトレース出力ファイル最大ファイル数).....	61
2. 1. 56	DIOSA_DBGTFSIZE (デバッグトレース出力ファイル最大サイズ).....	62
2. 1. 57	DIOSA_DBGTPATH (デバッグトレース出力ファイルパス).....	63
2. 1. 58	DIOSA_EDLSRCDIR (EDL ソースファイル格納ディレクトリ).....	64
2. 1. 59	DIOSA_ETGMAXENTRY (経過時間監視最大数).....	65
2. 1. 60	DIOSA_IPCKEY (共有メモリ IPC キー).....	66
2. 1. 61	DIOSA_IRMROOT (SG オブジェクト格納ディレクトリ).....	67
2. 1. 62	DIOSA_LIBNAME (AP 動的置換ライブラリ定義).....	68
2. 1. 63	DIOSA_LIBNAME_NODR (AP 動的置換なしライブラリ定義).....	69
2. 1. 64	DIOSA_LIBUNLOAD (AP 動的置換ライブラリアンロードタイミング).....	70
2. 1. 65	DIOSA_LNODENAME (DIOSA/XTP 論理ノード名).....	71
2. 1. 66	DIOSA_MEMUBUF (プロセスメモリ(初期値、最大値、拡張値)サイズ).....	72
2. 1. 67	DIOSA_MEMUDIR (メモリアポートダンプ出力ディレクトリ).....	74
2. 1. 68	DIOSA_MEMUDMP (メモリアポートダンプ出力可否).....	75
2. 1. 69	DIOSA_MSG_BACKLOG (メッセージ出力機能ソケット接続キュー数).....	76
2. 1. 70	DIOSA_MSG_CMD (メッセージログファイルローテート時実行コマンド).....	77

2.1.71	DIOSA_MSG_ERR_ROTATE(エラー出力ファイルローテート定義).....	78
2.1.72	DIOSA_MSG_FORM_FILEPATH(ユーザ用原型メッセージファイル名).....	79
2.1.73	DIOSA_MSG_LEVEL(メッセージ出力レベル基準値).....	80
2.1.74	DIOSA_MSG_LOCALE(メッセージ出力機能ロケール設定).....	81
2.1.75	DIOSA_MSG_LOG_PATH(メッセージログファイル格納ディレクトリ).....	82
2.1.76	DIOSA_MSG_LOG_ROTATE(メッセージログファイルローテート定義).....	83
2.1.77	DIOSA_MSG_MAX_POOLS(メッセージ出力デーモン制御スレッド数).....	84
2.1.78	DIOSA_MSG_OMIT_INF(同一メッセージ出力抑止定義).....	85
2.1.79	DIOSA_MSG_QUEUE_SIZE(メッセージ出力機能キューサイズ).....	86
2.1.80	DIOSA_MSG_RETRY(メッセージ出力リトライ定義).....	87
2.1.81	DIOSA_MSG_TIMEOUT(メッセージ出力通信タイムアウト時間).....	88
2.1.82	DIOSA_OPSSNDBUF(稼動統計送信バッファサイズ).....	89
2.1.83	DIOSA_PERFENTRYNUM(稼動統計任意区間情報蓄積エントリ数).....	90
2.1.84	DIOSA_PRIVATEIPC_MAX(資源管理テーブルエントリ数).....	91
2.1.85	DIOSA_ROOT(DIOSA/XTP インストールディレクトリ名).....	92
2.1.86	DIOSA_TMCDIPROC(タイマ制御 DIOSA タイマ実行プロセス最大数).....	93
2.1.87	DIOSA_TMCDITBLMAX(タイマ制御 DIOSA タイマ最大登録数).....	94
2.1.88	DIOSA_TMCLENMAX(タイマ制御メッセージ・コマンド最大長).....	95
2.1.89	DIOSA_TMCOVER(タイマ制御実行監視時間).....	96
2.1.90	DIOSA_TMCPROC(タイマ制御ユーザタイマ実行プロセス最大数).....	97
2.1.91	DIOSA_TMCTBLMAX(タイマ制御ユーザタイマ最大登録数).....	98
2.1.92	DIOSA_TMCWAITLIMIT(タイマ制御実行プロセス停止時間).....	99
2.1.93	DIOSA_TMP(DIOSA/XTP 作業用ディレクトリ名).....	100
2.2	通信制御	101
2.2.1	環境変数一覧.....	101
2.2.2	DIOSA_DBBLOCK_RETRY(DB ヘルスチェック自動閉塞リトライ回数).....	102
2.2.3	DIOSA_DBINTEGRATE_AUTO(DB 復旧時自動組み込み指定).....	103
2.2.4	DIOSA_NCM_DBEXIT(データベース接続出口関数名).....	104
2.2.5	DIOSA_SHDBACTIVE(全体 DB 状態活性時実行シェルスクリプト).....	105
2.3	メモリキャッシュ	106
2.3.1	環境変数一覧.....	106
2.3.2	DIOSA_IIC_HASHEXIT(ハッシュ関数名).....	107
2.3.3	DIOSA_IIC_IMSRV_TIMEOUT(IM サーバ制御共通タイムアウト値).....	108
2.4	データストア基盤	109
2.4.1	環境変数一覧.....	109
2.4.2	DIOSA_DELAYED_CONNECTTIMEOUT(ソケット接続タイムアウト値).....	110
2.4.3	DIOSA_DELAYED_DATADBGINVL(ログデータ電文ログ出力通番間隔).....	111
2.4.4	DIOSA_DELAYED_EXECCVRYINVL(障害時リトライ間隔(ログリーダ)).....	112
2.4.5	DIOSA_DELAYED_SELECTTIMEOUT(ソケット監視タイムアウト値).....	113
2.4.6	DIOSA_DELAYED_SENDRCVRYINVL(障害時リトライ間隔(センダ)).....	114

2.4.7	DIOSA_DELAYED_SENDTIMEOUT(電文送信タイムアウト値).....	115
2.4.8	DIOSA_DELAYED_SLMLOCKID(ストリーム所在管理 DBMS ロック ID)	116
2.4.9	DIOSA_DTDMSGSIZE(ディレード転送最小送信電文長).....	117
2.5	データ変換・通信オプション	118
2.5.1	環境変数一覧.....	118
2.5.2	DIATC_CENTER_ID(拠点識別情報).....	119
2.5.3	DIATC_DATE_FORMAT(DB アクセス用日付書式)	120
2.5.4	DIATC_DATE_NLSPARAM(DB アクセス用 NLS パラメータ)	121
2.5.5	DIATC_DELETE_ROWNUM(全件削除時 DB レコード削除件数).....	122
2.5.6	DIATC_EXTEND_LOG_SIZE(ログデータ生成時拡張領域サイズ).....	123
2.5.7	DIATC_INIT_LOG_SIZE(ログデータ生成時初期領域サイズ).....	124
2.5.8	DIATC_RECORDCHK_ENABLE(レコードサイズチェック無効化).....	125
2.5.9	DIATC_SQLLOG_NORECORD_CHECK (Oracle 更新ログレコード有無チェック)	126
2.5.10	DIATC_STREAM_PARTEXIT(ストリーム分割内通番決定利用者出口).....	127
2.5.11	DIATC_STREAM_PARTNUM(MAP 内ストリーム分割数)	128
2.5.12	DIATC_MULTIPLE_NUMBER_HASH(TAM 再配置処理多重度)	129
2.5.13	DIATC_MULTIPLE_NUMBER_SLU(セーブロード処理多重度).....	130

第 II 編 環境定義 131

第 1 章	環境定義言語の構成と記述方法	132
1.1	定義言語の構成	132
1.2	定義言語の記述方法	135
第 2 章	環境定義	137
2.1	APENV(アプリケーション共通情報管理機能)	137
2.1.1	APENV 節	137
2.1.2	ITEM 項	138
2.1.3	TBLENT 項	139
2.1.4	TABLE 項	140
2.2	APLIB(アプリケーション動的置換機能)	141
2.2.1	APLIB 節	141
2.2.2	DFLTLLIB 項	142
2.2.3	LLIB 項	143
2.2.4	LIBRARY 項	144
2.2.5	FUNC 項	145
2.2.6	LM 項	146
2.3	APMGRNT(電文保証機能)	147
2.3.1	APMGRNT 節	147
2.3.2	MSGGNT 項	148
2.3.3	OVERSEND 項	150
2.4	CMDSEND(コマンド配信機能)	151

2.4.1	CMDSEND 節	151
2.4.2	CMDSENDINFO 項	153
2.4.3	ENV 項	155
2.4.4	LNODECMD 項	156
2.4.5	SRVGRP 項	157
2.4.6	LNODESRV 項	158
2.4.7	CMDRT 項	159
2.4.8	CMDPERM 項	161
2.4.9	CMDGRP 項	162
2.4.10	CMDTEXT 項	163
2.4.11	EXPERM 項	164
2.4.12	CMD 項	165
2.5	COCENV (CO 制御機能)	166
2.5.1	COCENV 節	166
2.5.2	COMMON 項	168
2.5.3	EXIT 項	170
2.5.4	DEF_CLASS 項	171
2.5.5	DEF_TRNS 項	172
2.5.6	COGROUP 項	174
2.5.7	CO 項	175
2.5.8	NODETYPE 項	176
2.5.9	SHARE_CLASS 項	177
2.5.10	SHARE_TRNS 項	178
2.5.11	NODE 項	180
2.5.12	TPM 項	181
2.5.13	CLASS 項	182
2.5.14	TRNS 項	183
2.6	DACENV (DB アクセス制御機能)	185
2.6.1	DACENV 節	185
2.6.2	TABLESET 項	186
2.6.3	TABLE 項	187
2.6.4	COLUMN 項	189
2.6.5	INDEX 項	191
2.6.6	SQLTEMPLATE 項	192
2.6.7	SQL 雛形	193
2.7	DBCTRL (DB 接続管理機能)	200
2.7.1	DBCTRL 節	200
2.7.2	CONTROL 項	201
2.7.3	INSTANCE 項	203
2.7.4	RGSET 項	204

2.7.5	RGIDSET 項	205
2.7.6	INSTANCEGRP 項	207
2.8	DELAYED(ディレード転送機能)	208
2.8.1	DELAYED 節	208
2.8.2	COMMON 項	211
2.8.3	PATHCTRL 項	212
2.8.4	LOCATIONCTRL 項	213
2.8.5	DSAM 項	214
2.8.6	SENDER 項	216
2.8.7	RECEIVER 項	218
2.8.8	LOGREADER 項	219
2.8.9	UNITGROUP 項	222
2.8.10	SNDUNIT 項	223
2.8.11	RCVUNIT 項	225
2.8.12	LRDUNIT 項	227
2.8.13	SUPERSTREAM 項	231
2.9	DIOSAMAP(論理ノード構成定義)	233
2.9.1	DIOSAMAP 節	233
2.9.2	DEFAULT 項	234
2.9.3	LOGSYSTEM 項	235
2.9.4	LNODE 項	236
2.9.5	TPM 項	239
2.10	IMENV(インメモリキャッシュ機能)	240
2.10.1	IMENV 節	240
2.10.2	COMMON 項	243
2.10.3	NODEFAULT 項	244
2.10.4	SERVERFAULT 項	246
2.10.5	BRIDGEFAULT 項	247
2.10.6	TAMFAULT 項	248
2.10.7	DEF_MAP 項	249
2.10.8	REPGROUP 項	250
2.10.9	MAP 項	251
2.10.10	HASHRANGE 項	253
2.10.11	MASTER 項	254
2.10.12	SLAVE 項	255
2.10.13	BRIDGE 項	256
2.10.14	USERAP 項	257
2.10.15	GROUPCOMMIT 項	258
2.10.16	ACCESSLOG 項	259
2.11	IMTABLECONF(インメモリキャッシュ機能 表定義)	260

2. 11. 1	IMTABLECONF 節	260
2. 11. 2	LTABLE 項	262
2. 11. 3	RECORDCONF 項	263
2. 11. 4	PRIMARYKEY 項	264
2. 11. 5	SECONDARYKEY 項	265
2. 11. 6	KEYDEF 項	266
2. 11. 7	PTABLE 項	267
2. 12	MMG(メモリ管理機能)	268
2. 12. 1	MMG 節	268
2. 12. 2	UAP 項	270
2. 12. 3	SHM 項	271
2. 12. 4	PRC 項	272
2. 12. 5	THR 項	273
2. 12. 6	SVC 項	274
2. 12. 7	UDMP 項	275
2. 12. 8	UDIR 項	276
2. 12. 9	DDMP 項	277
2. 13	OPSENV(稼動統計機能)	278
2. 13. 1	OPSENV 節	278
2. 13. 2	OPSPARAM 項	279
2. 14	OTCENV(都度接続管理機能)	281
2. 14. 1	OTCENV 節	281
2. 14. 2	COMMON 項	282
2. 14. 3	DEF_MSGCTRL 項	284
2. 14. 4	MSGCTRL 項	285
2. 15	SYSMAP(論理システム構成定義)	287
2. 15. 1	SYSMAP 節	287
2. 15. 2	DEFAULT 項	289
2. 15. 3	LOGSYSTEM 項	291
2. 15. 4	ROUTE 項	293
2. 15. 5	ACCESSPOINT 項	294
2. 15. 6	LISTENER 項	296
2. 15. 7	PROTOCOL 項	297
2. 16	TMCENV(タイマ制御機能)	298
2. 16. 1	TMCENV 節	298
2. 16. 2	TIMERSET 項	299

第I編 環境変数

第1章 環境変数の説明形式

DIOSA/XTP は、導入に当たって動作環境を定義するため、独自の環境変数を提供する。環境変数は、DIOSA/XTP が動作する前にあらかじめ設定しておく必要がある。

本節では、環境変数の記述方法について述べ、次節以降で詳細を説明する。

1.1 環境変数の説明形式

各環境変数の詳細は「2章 環境変数」で説明する。

ここでは、説明の記述項目と構文表記法について述べる。

1.1.1 説明の記述項目

形式

この環境変数の構成、すなわち構成する設定値とその記述順、繰り返し等について構文表記法を用いて説明する。

<code>setenv 環境変数名 指定値... (※)</code>

※ 本マニュアルでは、全て `csch/tcsch` を使用した場合の記述となっている。

`sh/bash` 等、異なるシェルを使用する場合は、適宜環境に合わせた設定方法に読み替えること。

説明

形式で示した設定値ごとに、その意味を概説し、省略や繰り返し等のコマンド内での記述規則について説明する。

設定値の説明

この環境変数全体に関わる指定規則や効果について記述する。

環境変数固有の指定規則の説明などが含まれる。

注意

この環境変数を利用する際に注意すべき点がある場合に、その説明を記述する。

関連

この環境変数を利用する際に参照あるいは使用する項目(ファイル、コマンド、環境変数など)がある場合にその説明を記述する。

1.1.2 環境変数の表記法

(1) 構成要素

コマンド構文は次の構成要素からなる。

構文表記文字

次の文字は構文の記述方法を指示するための文字で、構文の記述時にこれらの文字を指定するわけではない。

文字の意味については 次項の表記方法で説明する。

一例 [] { } | .

空白

構文を読み易くするために空白を用いることがある。必ずしも空白が指定できることを意味しない。

空白が記述できる箇所については、各環境変数の説明を参照されたい。

日本語を含む語

その語が示す適切な文字列に置き換えて指定する。基本的に設定値の名前として用いる。

一例 外部ファイル名 VD 名 タイマ値 等

その他の文字・文字列

上記以外の文字・文字列については、構文の記述時にそのままの文字・文字列を指定する。

(2) 表記方法

省略の表現

[] でくくられた文字列は省略することができる。

一例 [XYZ]

選択の表現

{ } または [] でくくられた複数の指定要素のうち、1つを選んで指定するための表現で、次の書き方がある。なお、[] でくくられた選択表現は、何も選ばず全体を省略できる。

・ 指定要素を | で区切り 1 行に列挙する。おもに設定値の選択で用いる。

論理和記号” | ” の代わりに行分けで表現する場合もある。

・ 指定要素の行を分け、頭をそろえて列挙する。おもに設定値どうしの選択で用いる。

一例 KEY= {X | Y | Z}

FNAME=ファイル名

FID=ファイル ID

既定値の表現

[] でくくられたなかに選択表現がある場合、下線付きの指定要素は省略時の既定値である。

一例 [LOCK= {YES | NO}]

繰り返しの表現

繰り返しは、” ... ” で表現する。直前の [] または { } 部を繰り返し指定することができる。

一例 KEY=ARG1 [, ARG2] ...

第2章 環境変数

2.1 アプリケーション実行制御

2.1.1 環境変数一覧

(1) APPトレース

DIOSA_APPTRCFPATH	APPトレース情報ファイル(直接出力)のパスを指定する。
DIOSA_APPTRCFFILESIZE	APPトレース情報ファイル(直接出力)の最大サイズを指定する。
DIOSA_APPTRCFFILEOUTPUTMODE	APPトレース情報ファイル(直接出力)のサイズが設定値に達した時の動作を指定する。
DIOSA_APPTRCFSAVEDIR	APPトレース情報ファイル(直接出力)の退避先となるディレクトリの名前を指定する。
DIOSA_APPTRCFFMAXNUM	APPトレース情報ファイル(直接出力)のローテーション出力時の最大ファイル数を指定する。
DIOSA_APPTRCFOVERWRITE	APPトレース情報ファイル(直接出力)のローテーション時に既存のファイルがある場合に上書きするかどうかを指定する。
DIOSA_APPTRCFFLUSHMODE	APPトレース情報ファイル(直接出力)へのトレース情報出力時に強制的にフラッシュするかどうかを指定する。
DIOSA_APPTRCFLEVEL	APPトレース情報ファイル(直接出力)に出力するトレース情報の出力レベルを指定する。
DIOSA_APPTRCFOUTUSERDATA	APPトレース情報ファイル(直接出力)に出力するトレース情報にユーザデータを含めるかどうかを指定する。
DIOSA_APPTRCMPATH	APPトレース情報ファイル(メモリ経由出力)のパスを指定する。
DIOSA_APPTRCMFILESIZE	APPトレース情報ファイル(メモリ経由出力)の最大サイズを指定する。
DIOSA_APPTRCMFMAXNUM	APPトレース情報ファイル(メモリ経由出力)の最大数を指定する。
DIOSA_APPTRCMSIZE	APPトレース情報を格納する保存領域(共有メモリ)のサイズを指定する。
DIOSA_APPTRCMPAGE	APPトレース情報保存領域の数を指定する。
DIOSA_APPTRCMOVERWRITE	APPトレース情報保存領域やトレース情報ファイル(メモリ経由出力)のローテーション時、ローテーション先がファイル未出力の領域や既存のファイルだった場合に上書きするかどうかを指定する。
DIOSA_APPTRCMLEVEL	APPトレース情報保存領域へ格納するトレース情報の出力レベルを指定する。
DIOSA_APPTRCMOUTUSERDATA	保存領域に格納するAPPトレース情報にユーザデータを含めるかどうかを指定する。
DIOSA_APPTRCMIDNUM	APPトレース(メモリ経由)トレース識別ID数を指定する。

(2) デバッグトレース機能

DIOSA_DBGERRFILESIZE	障害情報ファイル出力デーモンから出力する障害ログ情報出力ファイルの最大サイズを指定する。
----------------------	--

DIOSA_DBGERRFMAXNUM	障害情報ファイル出力デーモンから出力する 障害ログ情報出力ファイルの最大ファイル数を指定する。
DIOSA_DBGERRPAGE	障害情報ファイル出力デーモンから出力する障害ログ情報の保存領域数を指定する。
DIOSA_DBGERRPATH	障害情報ファイル出力デーモンから出力する 障害ログ情報出力ファイルのパスを指定する。
DIOSA_DBGERRSIZE	障害情報ファイル出力デーモンから出力する障害ログ情報を保存する共有メモリのサイズを指定する。
DIOSA_DBGFFLUSHMODE	デバッグ情報出力時及びログ情報出力ファイル(直接出力)出力時に強制的にフラッシュするかどうかを指定する。
DIOSA_DBGFUNC	デバッグトレース関数情報収集フラグを指定する。
DIOSA_DBGLEVEL	デバッグトレース情報出力レベルを指定する。
DIOSA_DBGLOGFILESIZE	ログ情報ファイル出力デーモンから出力する運行ログ情報出力ファイルの最大サイズを指定する。
DIOSA_DBGLOGFMAXNUM	ログ情報ファイル出力デーモンから出力する運行ログ情報出力ファイルの最大ファイル数を指定する。
DIOSA_DBGLOGLEVEL	運行ログ情報出力レベルを指定する。
DIOSA_DBGLOGPAGE	ログ情報ファイル出力デーモン経由で出力する運行ログ情報の保存領域数を指定する。
DIOSA_DBGLOGPATH	ログ情報ファイル出力デーモンから出力する運行ログ情報出力ファイルのパスを指定する。
DIOSA_DBGLOGSIZE	ログ情報ファイル出力デーモンから出力する運行ログ情報を保存する共有メモリのサイズを指定する。
DIOSA_DBGLPATH	運行ログ情報出力ファイル(直接出力)のパスを指定する。
DIOSA_DBGMASK	デバッグトレース情報出力マスク値を指定する。
DIOSA_DBGOUTUSERDATA	ユーザデータ出力モードを指定する。
DIOSA_DBGPERF	デバッグトレース性能情報収集フラグを指定する。
DIOSA_DBGTFMAXNUM	デバッグトレース情報出力ファイルの最大ファイル数を指定する。
DIOSA_DBGTFSIZE	デバッグトレース情報出力ファイルの最大サイズを指定する。
DIOSA_DBGTPATH	デバッグトレース情報出力ファイルのパスを指定する。
(3) メモリ管理機能	
DIOSA_MEMUBUF	プロセスメモリのサイズを指定する。
DIOSA_MEMUDIR	アボートダンプの出力ディレクトリを指定する。
DIOSA_MEMUDMP	アボートダンプの出力可否を指定する。
(4) 環境定義機能	
DIOSA_EDLSRCDIR	EDL ソースファイルを検索するディレクトリを指定する。
DIOSA_IRMROOT	システム起動時に参照する SG オブジェクトの格納ディレクトリを指定する。
(5) バッチアプリケーション制御機能	
DIOSA_BACFILENAME	バッチ AP 制御パラメータファイル名を指定する。

	DIOSA_BACRETRYNUM	ロールバックリトライ最大回数を指定する。
(6)	コマンド配信機能	
	DIOSA_CDDAPITIMEOUT	コマンド配信 API (あるいはコマンド) のコマンド配信応答待ち合わせ時間を指定する。
	DIOSA_CDDEXECTIMEOUT	コマンド配信のノード間の応答待ち合わせ時間を指定する。
	DIOSA_CDDPORT	コマンド配信デーモンが使用するポート番号を指定する。
	DIOSA_CDDRTRYCNT	配信先ノードへの接続失敗した際にリトライする回数を指定する。
	DIOSA_CDDRTRYINTVL	配信先ノードへの接続に失敗した際にリトライするまでの時間間隔を指定する。
	DIOSA_CDDSLEEPINTVL	コマンド配信デーモンが、コマンド配信処理においてコマンドの終了状態を確認する際のスリープ間隔を指定する。
	DIOSA_CDDTMPDIR	コマンド実行結果を一時的に格納するディレクトリ名を指定する。
(7)	デーモン死活監視機能	
	DIOSA_DAM_BASEINVL	デーモンを死活監視するベース間隔を指定する。
	DIOSA_DAM_DOWNCNT	再起動時間内にダウンしても再起動を行う回数を指定する。
	DIOSA_DAM_MONINVL	デーモンを死活監視する監視間隔を指定する。
	DIOSA_DAM_RESINVL	再起動した後、正常に起動したと判定する時間を指定する。
	DIOSA_DAM_RTYCNT	デーモン再起動のリトライ回数を指定する。
	DIOSA_DAM_RTYINVL	デーモン再起動に失敗後、再び再起動するまでの間隔を指定する。
(8)	経過時間監視機能	
	DIOSA_ETGMAXENTRY	同時に監視できるプロセスの最大数を指定する。
(9)	AP 動的置換機能	
	DIOSA_LIBNAME	環境変数版の AP 動的置換機能で呼び出すライブラリを指定する。 (AP 動的置換対象ライブラリ)
	DIOSA_LIBNAME_NODR	環境変数版の AP 動的置換機能で呼び出すライブラリを指定する。 (AP 動的置換なしライブラリ)
	DIOSA_LIBUNLOAD	環境変数版の AP 動的置換機能でロードしたライブラリをアンロードするタイミングを指定する。
(10)	稼動統計機能	
	DIOSA_OPSSNDBUF	稼動統計デーモンとのソケット通信にて使用する送信バッファサイズを指定する。
	DIOSA_PERFENTRYNUM	稼動統計任意区間情報を蓄積するためのエントリ数を指定する。
(11)	タイマ制御機能	
	DIOSA_TMCDIPROC	DIOSA 内部用タイマ情報を実行するプロセスを同時に起動できる最大数を指定する。
	DIOSA_TMCDITBLMAX	同時に登録できる DIOSA 内部用タイマ情報の最大数を指定する。
	DIOSA_TMCLENMAX	タイマ登録で設定できる送信メッセージまたはコマンド名の最大長を指定する。
	DIOSA_TMCOVER	タイマを実行してから完了するまでの監視時間を指定する。
	DIOSA_TMCPROC	タイマ情報を実行するプロセスを同時に起動できる最大数を指定する。

	DIOSA_TMCTBLMAX	同時に登録できるユーザ用タイマ情報の最大数を指定する。
	DIOSA_TMCWAITLIMIT	タイマ情報を実行するプロセスが待機状態のまま存在した場合に、停止するまでの時間を指定する。
(12)	起動／停止機能	
	DIOSA_IPCKEY	IPCKEY を指定する。
	DIOSA_LNODENAME	論理ノード名を指定する。
	DIOSA_ROOT	DIOSA/XTP をインストールしたディレクトリを指定する。
	DIOSA_TMP	作業用のルートディレクトリを指定する。
	DIOSA_PRIVATEIPC_MAX	資源管理テーブルのエントリ数を指定する。
(13)	メッセージ出力機能	
	DIOSA_MSG_BACKLOG	ソケット通信時の接続キュー数を指定する。
	DIOSA_MSG_CMD	メッセージログファイルのローテート時実行コマンドを指定する。
	DIOSA_MSG_ERR_ROTATE	エラー出力ファイルの最大ファイルサイズ、保存ファイル数を指定する。
	DIOSA_MSG_FORM_FILEPATH	ユーザ用原型メッセージファイル名を指定する。
	DIOSA_MSG_LEVEL	メッセージの出力レベル基準値を指定する。
	DIOSA_MSG_LOCALE	原型メッセージ取得時のロケールを指定する。
	DIOSA_MSG_LOG_PATH	メッセージログファイル及びエラー出力ファイルの格納ディレクトリを指定する。
	DIOSA_MSG_LOG_ROTATE	メッセージログファイルの最大ファイルサイズ、保存ファイル数を指定する。
	DIOSA_MSG_MAX_POOLS	メッセージ出力デーモンで使用するラッシュチェックスレッド数を指定する。
	DIOSA_MSG_OMIT_INF	同一メッセージの出力を抑止する制限時間とチェック数を指定する。
	DIOSA_MSG_QUEUE_SIZE	メッセージ出力情報を保持するメッセージキューサイズを指定する。
	DIOSA_MSG_RETRY	メッセージ出力 API がメッセージ出力に失敗した場合の、再出力を試みる回数と間隔を指定する。
	DIOSA_MSG_TIMEOUT	メッセージ出力 API とメッセージ出力デーモンの通信のタイムアウト時間を指定する。
(14)	アプリケーション共通情報管理機能	
	DIOSA_APE_FILEMAXSIZE	テーブル型ファイルの最大サイズを指定する。

2.1.2 DIOSA_APE_FILEMAXSIZE（テーブル型ファイル最大サイズ）

形式

setenv DIOSA_APE_FILEMAXSIZE ファイル最大サイズ
--

説明

アプリケーション共通情報管理機能が使用するテーブル型ファイルの最大サイズ（バイト）を指定する。

設定値の説明

ファイル最大サイズ

テーブル型ファイルの1ファイルの最大サイズ（バイト）を指定する。（数字：1～2147483647）

省略した場合は、最大サイズの2147483647バイトとなる。

2. 1. 3 DIOSA_APPTRCFFILEOUTPUTMODE (APP トレース (直接) ファイルモード)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCFFILEOUTPUTMODE { MOVE | ROTATE }
```

説明

APP トレース情報ファイル(直接出力)のサイズが設定値に達した時の動作を指定する。ここでいう設定値とは環境変数 **DIOSA_APPTRCFFILESIZE** に設定されている値である。

設定値の説明

MOVE

APP トレース情報ファイル(直接出力)を環境変数 **DIOSA_APPTRCFSAVEDIR** で指定された退避先ディレクトリに移動させ、ファイル名にタイムスタンプを付加する。

以降のトレース情報は、新しく生成されたトレース情報ファイル(直接出力)に出力される。(省略時の既定値)

ROTATE

新たなトレース情報ファイル(直接出力)を生成し、以降のトレース情報の出力先に設定する。トレース情報ファイル(直接出力)の数が上限に達していた場合は環境変数 **DIOSA_APPTRCFOVERWRITE** の設定に従う。

関連項目

DIOSA_APPTRCFFILESIZE, **DIOSA_APPTRCFSAVEDIR**, **DIOSA_APPTRCFOVERWRITE**

2. 1. 4 DIOSA_APPTRCFFILESIZE (APP トレース (直接) ファイル最大サイズ)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCFFILESIZE traceffilesize
```

説明

APP トレース情報ファイル(直接出力)の最大サイズを指定する。

設定値の説明

traceffilesize

APP トレース情報ファイル(直接出力)の最大サイズを指定する。(数字、10MB～4096MB、省略可)

数字のみを指定した場合の単位は byte、数字の後ろに KB を付加した場合の単位は Kbyte、MB を付加した場合の単位は Mbyte となる。なお、1Kbyte は 1024byte、1MB は 1024Kbyte に相当する。

省略時及び不正な値を指定した場合は 50MB、10Mbyte 未満の値を指定した場合は 10MB、4096MB を超える値を指定した場合は 4096MB を指定したものとする。

2.1.5 DIOSA_APPTRCFFLUSHMODE (APP トレース (直接) 強制フラッシュモード)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCFFLUSHMODE { ON | OFF }
```

説明

APP トレース情報ファイル(直接出力)へのトレース情報出力時に強制的にフラッシュするかどうかを指定する。

設定値の説明

ON

強制的にフラッシュする。

OFF

強制的にフラッシュしない。(省略時の既定値)

2.1.6 DIOSA_APPTRCFFMAXNUM (APP トレース (直接) 最大ファイル数)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCFFMAXNUM traceffilemaxnum
```

説明

APP トレース情報ファイル(直接出力)のローテーション出力時の最大ファイル数を指定する。環境変数 DIOSA_APPTRCFFILEOUTPUTMODE の値が MOVE の場合、本環境変数は無視される。

設定値の説明

traceffilemaxnum

APP トレース情報ファイル(直接出力)の最大数を 3～9 の整数値で指定する。

省略時、3 未満及び不正な値を指定した場合は 3、9 を超える値が指定された場合は 9 を指定したものと
する。

関連項目

DIOSA_APPTRCFFILEOUTPUTMODE

2.1.7 DIOSA_APPTRCFLEVEL (APP トレース (直接) ファイル出力レベル)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCFLEVEL traceflevel
```

説明

APP トレース情報ファイル (直接出力) に出力するトレース情報の出力レベルを指定する。

設定値の説明

traceflevel

APP トレース情報出力レベルを 0～9 の整数値で指定する。ここで指定したレベル以下のトレース情報がファイルに出力される。0 を指定した場合、トレース情報のファイルへの出力はされなくなる。

省略時、0 未満及び不正な値を指定した場合は 0、9 を超える値を指定した場合は 9 を指定したものとする。

2. 1. 8 DIOSA_APPTRCFOUTUSERDATA (APP トレース (直接) ユーザデータ 有無)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCFOUTUSERDATA { ON | OFF }
```

説明

APP トレース情報ファイル(直接出力)に出力するトレース情報にユーザデータを含めるどうかを指定する。
ユーザデータとは **diosaapptrcf()** 関数の第 2 引数で指定されるデータを指す。

設定値の説明

ON

トレース情報にユーザデータを含める。

OFF

トレース情報にユーザデータを含めない。(省略時の既定値)

2.1.9 DIOSA_APPTRCFOVERWRITE (APP トレース (直接) ファイル上書き可否)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCFOVERWRITE { ON | OFF }
```

説明

APP トレース情報ファイル(直接出力)のローテーション時に既存のファイルがある場合に上書きするかどうかを指定する。環境変数 **DIOSA_APPTRCFFILEOUTPUTMODE** の値が **MOVE** の場合、本環境変数は無視される。

設定値の説明

ON

上書きする。(省略時の既定値)

OFF

上書きしない。

関連項目

DIOSA_APPTRCFFILEOUTPUTMODE

2. 1. 10 DIOSA_APPTRCFPATH (APP トレース (直接) ファイルパス)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCFPATH tracelogfpath
```

説明

APP トレース情報ファイル(直接出力)のパスを指定する。

設定値の説明

tracelogfpath

APP トレース情報ファイル(直接出力)の出力先ディレクトリの絶対パスを半角英数字、1～255 文字で指定する。

省略した場合は、“{DIOSA_TMP の設定値}/{DIOSA_LNODENAME の設定値}/apt” を既定値とする。

関連

DIOSA_TMP, DIOSA_LNODENAME

2.1.11 DIOSA_APPTRCFSAVEDIR (APP トレース (直接) 退避先ディレクトリ名)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCFSAVEDIR tracefsavedir
```

説明

APP トレース情報ファイル(直接出力)の退避先となるディレクトリの名前を指定する。このディレクトリは、環境変数 `DIOSA_APPTRCFPATH` で指定されたパスの直下に作成される。環境変数 `DIOSA_APPTRCFFILEOUTPUTMODE` の値が `ROTATE` の場合、本環境変数は無視される。

設定値の説明

`tracefsavedir`

APP トレース情報ファイル(直接出力)の退避先となるディレクトリの名前を半角英数字、1～127 文字で指定する。

省略時は、”save”を指定したものとする。

注意

- 退避によるパフォーマンスへの影響を抑えるため、本環境変数で指定した名前のディレクトリと環境変数 `DIOSA_APPTRCFPATH` で示す出力先は同じファイルシステム上に存在することが望ましい。

関連項目

`DIOSA_APPTRCFPATH`, `DIOSA_APPTRCFFILEOUTPUTMODE`

2. 1. 12 DIOSA_APPTRCMFILESIZE (APP トレース (メモリ) ファイル最大サイズ)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCMFILESIZE tracemfilesize
setenv DIOSA_APPTRCMFILESIZE_1 tracemfilesize
setenv DIOSA_APPTRCMFILESIZE_2 tracemfilesize
setenv DIOSA_APPTRCMFILESIZE_3 tracemfilesize
```

説明

APP トレース情報ファイル(メモリ経由出力)の最大サイズを指定する。

DIOSA_APPTRCMFILESIZE_1～DIOSA_APPTRCMFILESIZE_3 は、トレース識別 ID(1～3)毎にトレース情報ファイルサイズの設定を行いたい場合に指定する。

設定値の説明

tracemfilesize

APP トレース情報ファイル(メモリ経由出力)の最大サイズを指定する。(数字、10MB～4096MB、省略可)

数字のみを指定した場合の単位は byte、数字の後ろに KB を付加した場合の単位は Kbyte、MB を付加した場合の単位は Mbyte となる。なお、1Kbyte は 1024byte、1MB は 1024Kbyte に相当する。

省略時及び不正な値を指定した場合は 50MB、10Mbyte 未満の値を指定した場合は 10MB、4096MB を超える値を指定した場合は 4096MB を指定したものとする。

DIOSA_APPTRCMFILESIZE_1 ～ DIOSA_APPTRCMFILESIZE_3 が省略及び不正な値が指定された場合、DIOSA_APPTRCMFILESIZE の設定値が使用される。10Mbyte 未満の値を指定した場合は 10MB、4096MB を超える値を指定した場合は 4096MB を指定したものとする。

2. 1. 13 DIOSA_APPTRCMFMAXNUM (APP トレース (メモリ) ファイル最大数)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCMFMAXNUM tracemfilemaxnum
setenv DIOSA_APPTRCMFMAXNUM_1 tracemfilemaxnum
setenv DIOSA_APPTRCMFMAXNUM_2 tracemfilemaxnum
setenv DIOSA_APPTRCMFMAXNUM_3 tracemfilemaxnum
```

説明

APP トレース情報ファイル(メモリ経由出力)の最大数を指定する。

DIOSA_APPTRCMFMAXNUM_1～DIOSA_APPTRCMFMAXNUM_3 は、トレース識別 ID(1～3)毎にトレース情報ファイル数の設定を行いたい場合に指定する。

設定値の説明

tracemfilemaxnum

APP トレース情報ファイル(メモリ経由出力)の最大数を 3～9 の整数値で指定する。

省略時、3 未満及び不正な値を指定した場合は 3、9 を超える値が指定された場合は 9 を指定したものと
する。

DIOSA_APPTRCMFMAXNUM_1～DIOSA_APPTRCMFMAXNUM_3 の省略時は、DIOSA_APPTRCMFMAXNUM の設定値が使用
される。3 未満及び不正な値を指定した場合は 3、9 を超える値が指定された場合は 9 を指定したものと
する。

2. 1. 14 DIOSA_APPTRCMIDNUM (APP トレース (メモリ) トレース識別 ID)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCMIDNUM tracemfileidnum
```

説明

APP トレース情報ファイル(メモリ経由出力)のトレースファイル識別 ID 数を指定する。

設定値の説明

tracemfileidnum

APP トレース情報ファイル(メモリ経由出力)の識別 ID 数を 1～3 の整数値で指定する。

省略時、1 未満及び不正な値を指定した場合は 1、3 を超える値が指定された場合は 3 を指定したものと
する。

2. 1. 15 DIOSA_APPTRCMLEVEL (APP トレース保存領域出力レベル)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCMLEVEL tracemlevel
setenv DIOSA_APPTRCMLEVEL_1 tracemlevel
setenv DIOSA_APPTRCMLEVEL_2 tracemlevel
setenv DIOSA_APPTRCMLEVEL_3 tracemlevel
```

説明

APP トレース情報保存領域へ格納するトレース情報の出力レベルを指定する。

DIOSA_APPTRCMLEVEL_1～DIOSA_APPTRCMLEVEL_3 は、トレース識別 ID(1～3) 毎にトレース情報出力レベルの設定を行いたい場合に指定する。

設定値の説明

tracemlevel

APP トレース情報出力レベルを 0～9 の整数値で指定する。ここで指定したレベル以下のトレース情報が保存領域に格納される。0 を指定した場合、トレース情報は保存領域へ格納されなくなる。

省略時、0 未満及び不正な値を指定した場合は 0、9 を超える値を指定した場合は 9 を指定したものとする。

DIOSA_APPTRCMLEVEL_1～DIOSA_APPTRCMLEVEL_3 の省略時は、DIOSA_APPTRCMLEVEL の設定値が使用される。0 未満及び不正な値を指定した場合は 0、9 を超える値を指定した場合は 9 を指定したものとする。

2. 1. 16 DIOSA_APPTRCMOUTUSERDATA (APP トレース保存領域ユーザデータ有無)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCMOUTUSERDATA { ON | OFF }  
setenv DIOSA_APPTRCMOUTUSERDATA_1 { ON | OFF }  
setenv DIOSA_APPTRCMOUTUSERDATA_2 { ON | OFF }  
setenv DIOSA_APPTRCMOUTUSERDATA_3 { ON | OFF }
```

説明

保存領域に格納する APP トレース情報にユーザデータを含めるどうかを指定する。ユーザデータとは **diosaapptrcm()** 関数の第 2 引数で指定されるデータを指す。

DIOSA_APPTRCMOUTUSERDATA_1～DIOSA_APPTRCMOUTUSERDATA_3 は、トレース識別 ID(1～3)毎にトレース情報にユーザデータを含めるどうかを指定したい場合に指定する。

設定値の説明

ON

トレース情報にユーザデータを含める。

OFF

トレース情報にユーザデータを含めない。(省略時の既定値)

DIOSA_APPTRCMOUTUSERDATA_1～DIOSA_APPTRCMOUTUSERDATA_3 の省略時は、DIOSA_APPTRCMOUTUSERDATA の設定値が使用される。ON/OFF 以外が設定された場合は OFF を指定したものとする。

2. 1. 17 DIOSA_APPTRCMOVERWRITE (APP トレース (メモリ) ファイル上書き可否)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCMOVERWRITE { ON | OFF }  
setenv DIOSA_APPTRCMOVERWRITE_1 { ON | OFF }  
setenv DIOSA_APPTRCMOVERWRITE_2 { ON | OFF }  
setenv DIOSA_APPTRCMOVERWRITE_3 { ON | OFF }
```

説明

APP トレース情報保存領域やトレース情報ファイル(メモリ経由出力)のローテーション時、ローテーション先がファイル未出力の領域や既存のファイルだった場合に上書きするかどうかを指定する。

DIOSA_APPTRCMOVERWRITE_1～DIOSA_APPTRCMOVERWRITE_3 は、トレース識別 ID(1～3)毎にローテーション時の上書き指定の設定を行いたい場合に指定する。

設定値の説明

ON

上書きする。(省略時の既定値)

OFF

上書きしない。

DIOSA_APPTRCMOVERWRITE_1～DIOSA_APPTRCMOVERWRITE_3 の省略時は、DIOSA_APPTRCMOVERWRITE の設定値が使用される。ON/OFF 以外が設定された場合は ON を指定したものとする

2. 1. 18 DIOSA_APPTRCMPAGE (APP トレース保存領域数)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCMPAGE tracempage
setenv DIOSA_APPTRCMPAGE_1 tracempage
setenv DIOSA_APPTRCMPAGE_2 tracempage
setenv DIOSA_APPTRCMPAGE_3 tracempage
```

説明

APP トレース情報保存領域の数を指定する。

DIOSA_APPTRCMPAGE_1～DIOSA_APPTRCMPAGE_3 は、トレース識別 ID (1～3) 毎にトレース情報保存領域の数の設定を行いたい場合に指定する。

設定値の説明

tracempage

保存領域の数を 2～5 の整数値で指定する。

省略時、2 未満及び不正な値を指定した場合は 2、5 を超える値を指定した場合は 5 を指定したものとする。

DIOSA_APPTRCMPAGE_1～DIOSA_APPTRCMPAGE_3 の省略時は、DIOSA_APPTRCMPAGE の設定値が使用される。2 未満及び不正な値を指定した場合は 2、5 を超える値を指定した場合は 5 を指定したものとする。

2. 1. 19 DIOSA_APPTRCMPATH (APP トレース (メモリ) ファイルパス)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCMPATH tracelogmpath
setenv DIOSA_APPTRCMPATH_1 tracelogmpath
setenv DIOSA_APPTRCMPATH_2 tracelogmpath
setenv DIOSA_APPTRCMPATH_3 tracelogmpath
```

説明

APP トレース情報ファイル(メモリ経由出力)のパスを指定する。

DIOSA_APPTRCMPATH_1～DIOSA_APPTRCMPATH_3 は、トレース識別 ID (1～3) 毎にトレース情報ファイルパスの設定を行いたい場合にを指定する。

設定値の説明

tracelogmpath

APP トレース情報ファイル(メモリ経由出力)の出力先ディレクトリの絶対パスを半角英数字、1～255 文字で指定する。

省略した場合や、指定したパスが存在しない場合は、“{DIOSA_TMP の設定値}/{DIOSA_LNODENAME の設定値}/apt”を既定値とする。

DIOSA_APPTRCMPATH_1～DIOSA_APPTRCMPATH_3 の省略時及び指定したパスが存在しない場合は、DIOSA_APPTRCMPATH の設定値が使用される。

関連

DIOSA_TMP, DIOSA_LNODENAME

2. 1. 20 DIOSA_APPTRCMSIZE (APP トレース保存領域サイズ)

形式

```
setenv DIOSA_APPTRCMSIZE traceshmsize
setenv DIOSA_APPTRCMSIZE_1 traceshmsize
setenv DIOSA_APPTRCMSIZE_2 traceshmsize
setenv DIOSA_APPTRCMSIZE_3 traceshmsize
```

説明

APP トレース情報を格納する保存領域(共有メモリ)のサイズを指定する。

DIOSA_APPTRCMSIZE_1～DIOSA_APPTRCMSIZE_3 は、トレース識別 ID(1～3)毎にトレース情報保存領域のサイズを設定したい場合に指定する。

設定値の説明

traceshmsize

保存領域のサイズを指定する。(数字、512KB～4096MB、省略可)

数字のみを指定した場合の単位は byte、数字の後ろに KB を付加した場合の単位は Kbyte、MB を付加した場合の単位は MByte となる。なお、1Kbyte は 1024byte、1MB は 1024Kbyte に相当する。

省略時及び不正な値を指定した場合は 1MB、512Kbyte 未満の値を指定した場合は 512KB、4096MB を超える値を指定した場合は 4096MB を指定したものとする。

DIOSA_APPTRCMSIZE_1 ～ DIOSA_APPTRCMSIZE_3 の省略時及び不正な値を指定した場合は、DIOSA_APPTRCMSIZE の設定値が使用される。512Kbyte 未満の値を指定した場合は 512KB、4096MB を超える値を指定した場合は 4096MB を指定したものとする。

2. 1. 21 DIOSA_BACFILENAME (バッチ AP 制御パラメータファイル名)

形式

<code>setenv</code> <code>DIOSA_BACFILENAME</code> バッチ AP 制御パラメータファイル名
--

説明

バッチ AP 制御パラメータファイル名を指定する。

設定値の説明

バッチ AP 制御パラメータファイル名

バッチ AP 制御パラメータファイル名を指定する。(英数字：1～255 文字)

省略時は、バッチ AP 制御パラメータファイルを使用しない。

注意

- 本環境変数と起動パラメータの両方が指定された場合は、起動パラメータを優先とする。

2. 1. 22 DIOSA_BACRETRYNUM (バッチ AP 制御ロールバックリトライ最大回数)

形式

setenv DIOSA_BACRETRYNUM ロールバックリトライ最大回数

説明

バッチ AP 制御機能におけるロールバックリトライ最大回数を指定する。

設定値の説明

ロールバックリトライ最大回数

ロールバックリトライを行う最大回数を指定する。(数字 : 0～9999)

省略時は、ロールバックリトライを行わない。

注意

- 最大回数を超えるリトライが発生した時には、異常終了処理が行われる。
- 本環境変数と起動パラメータの両方が指定された場合は、起動パラメータを優先とする。

2. 1. 23 DIOSA_CDDAPITIMEOUT (コマンド配信応答待合せ時間)

形式

setenv DIOSA_CDDAPITIMEOUT コマンド配信応答待合せ時間
--

説明

コマンド配信 API (あるいはコマンド) の、コマンド配信応答待ち合わせ時間を指定する。

設定値の説明

コマンド配信応答待合せ時間

コマンド配信 API (あるいはコマンド) のコマンド配信応答待ち合わせ時間を秒単位で指定する。(数字 : 1 ~ 86400)

省略時は、環境定義の値を使用する。

環境変数を指定した場合は、環境定義より環境変数が優先する。

2. 1. 24 DIOSA_CDDEXEETIMEOUT (コマンド配信実行応答待ち合わせ時間)

形式

<code>setenv DIOSA_CDDEXEETIMEOUT コマンド実行応答待ち合わせ時間</code>
--

説明

コマンド実行のノード間の応答待ち合わせ時間を指定する。

設定値の説明

コマンド実行応答待ち合わせ時間

コマンド配信を実行した際のノード間の応答待ち合わせ時間を秒単位で指定する。(数字：1～86400)

省略時は、環境定義の値を使用する。

環境変数を指定した場合は、環境定義より環境変数が優先する。

2. 1. 25 DIOSA_CDDPORT (コマンド配信デーモン用ポート番号)

形式

<code>setenv</code> <code>DIOSA_CDDPORT</code> コマンド配信デーモン用ポート番号

説明

コマンド配信デーモンが使用するポート番号、またはサービス名を指定する。

設定値の説明

コマンド配信デーモン用ポート番号

コマンド配信デーモンが使用するポート番号、またはサービス名を指定する。

(数字：1025～65535、文字列：1～31 バイト)

省略時は、環境定義の値を使用する。

環境変数を指定した場合は、環境定義より環境変数が優先する。

設定する場合は、配信する全てのノードに同じ値を設定すること。

2. 1. 26 DIOSA_CDDRTRYCNT (コマンド配信接続リトライ回数)

形式

setenv DIOSA_CDDRTRYCNT 接続リトライ回数

説明

配信先ノードへの接続処理に失敗した際にリトライする回数を指定する。

設定値の説明

接続リトライ回数

接続リトライ回数を指定する。(数字：0～100)

0 を指定した場合は、リトライしない。

省略時は、環境定義の値を使用する。

環境変数を指定した場合は、環境定義より環境変数が優先する。

2. 1. 27 DIOSA_CDDRTRYINTVL (コマンド配信接続リトライ間隔)

形式

setenv	DIOSA_CDDRTRYINTVL	接続リトライ処理の待合せ時間
--------	--------------------	----------------

説明

配信先ノードへの接続に失敗した際にリトライするまでの時間間隔を指定する。

設定値の説明

接続リトライ処理の待合せ時間

接続リトライ処理の待合せ時間を秒単位で指定する。(数字：1～3600)

省略時は、環境定義の値を使用する。

環境変数を指定した場合は、環境定義より環境変数が優先する。

2. 1. 28 DIOSA_CDDSLEEPINTVL (コマンド配信コマンド終了確認間隔)

形式

setenv	DIOSA_CDDSLEEPINTVL	コマンド終了状態確認スリープ間隔
--------	---------------------	------------------

説明

コマンド配信デーモンが、コマンド配信処理においてコマンドの終了状態を確認する際のスリープ間隔を指定する。

設定値の説明

コマンド終了状態確認スリープ間隔

コマンド配信デーモンが、コマンド配信処理においてコマンドの終了状態を確認する際のスリープ間隔をミリ秒単位で指定する。(数字：10～999)
省略時は、100 ミリ秒となる。

2. 1. 29 DIOSA_CDDTMPDIR (コマンド配信一時ファイル作成ディレクトリ名)

形式

setenv DIOSA_CDDTMPDIR 一時ファイル作成ディレクトリ名
--

説明

コマンド実行結果を一時的に格納する際に使用するディレクトリ名を指定する。

設定値の説明

一時ファイル作成ディレクトリ名

コマンド配信の一時ファイルを格納するディレクトリ名を指定する。(文字列：1～127 バイト)

省略時は、環境定義の値を使用する。

環境変数を指定した場合は、環境定義より環境変数が優先する。

2. 1. 30 DIOSA_COCCOMMITOPS (CO 制御コミット処理稼働統計情報採取)

形式

```
setenv DIOSA_COCCOMMITOPS ON
```

説明

CO 制御 TPP 上で実行されたコミット処理の情報(コミットに要した TAT、CPU 等)を稼働統計情報として採取する。

設定値の説明

ON

コミットの稼働統計情報を採取する。

ON 以外、または環境変数未定義はコミットの稼働情報を採取しない。

2. 1. 31 DIOSA_DAM_BASEINVL (デーモン死活監視ベース間隔)

形式

<code>setenv DIOSA_DAM_BASEINVL 死活監視間隔</code>

説明

デーモンを死活監視するベース間隔を指定する。

設定値の説明

死活監視間隔

死活監視を行うベースとなる周期間隔を秒単位で指定する。(数字：1～5)
省略時は、5 秒となる。

注意

- 本環境変数を有効にする場合は、死活監視デーモンの再起動が必要である。

2. 1. 32 DIOSA_DAM_DOWNCNT (デーモン死活監視再起動時間内ダウン回数)

形式

setenv	DIOSA_DAM_DOWNCNT	再起動監視時間内のダウン回数
--------	-------------------	----------------

説明

再起動時間内に死活監視しているデーモンがダウンしても再起動を行う回数を指定する。

設定値の説明

再起動監視時間内のダウン回数

再起動時間内に死活監視しているデーモンがダウンしても再起動を行う回数を指定する。(数字：1～32767)

省略時は、3 回となる。

一定時間内にあるデーモンのダウン回数が、ここで定義されるダウン回数以上発生した場合、デーモン死活監視はそのデーモンの監視を停止する。

注意

- 本環境変数を有効にする場合は、死活監視デーモンの再起動が必要である。
- 監視機能を実現するため、本環境変数で定義されるダウン回数分だけ「起動時刻」を管理する。ダウン回数を多くすることによって必要なメモリが増加する。

関連

DIOSA_DAM_MONINVL, DIOSA_DAM_RESINVL

2. 1. 33 DIOSA_DAM_MONINVL (デーモン死活監視間隔)

形式

setenv DIOSA_DAM_MONINVL 監視間隔

説明

デーモンを死活監視する監視間隔を指定する。

設定値の説明

監視間隔

死活監視実行間隔を秒単位で指定する。(数字：1～32767)
省略時は、30 秒となる。

注意

- 本環境変数を有効にする場合は、死活監視デーモンの再起動が必要である。
- 死活監視は 5 秒周期でデーモンの監視を行う。このため、監視間隔が 5 秒単位で指定されていない場合は、誤差(最大 4 秒)が発生する。
(5 秒周期で死活監視を行う間隔を DIOSA_DAM_BASEINVL で変更すると誤差範囲は上記の限りではない)

関連

DIOSA_DAM_DOWNCNT, DIOSA_DAM_RESINVL

2. 1. 34 DIOSA_DAM_RESINVL (デーモン死活監視再起動監視間隔)

形式

setenv DIOSA_DAM_RESINVL 再起動監視間隔
--

説明

死活監視していたデーモンがダウンし、再起動したあと正常に起動したと判定するまでの間隔を指定する。

設定値の説明

再起動監視間隔

再起動監視間隔を秒単位で指定する。(数字：1～32767)

省略時は、1800 秒(30 分)となる。

サブコンデーモン死活監視において、一定時間内に、ある回数デーモンダウンをした場合、デーモンの再起動を行わない(不安定でありデーモン不具合によるものか否かの判断がつかない為)機能を持つが、この時の一定時間内にあたるのが、本環境変数で定義される再起動監視間隔である。

注意

- 本環境変数を有効にする場合は、死活監視デーモンの再起動が必要である。
- 死活監視は 5 秒周期でデーモンの監視を行う。このため、再起動監視間隔が 5 秒単位で指定されていない場合は、誤差(最大 4 秒)が発生する。
(5 秒周期で死活監視を行う間隔を DIOSA_DAM_BASEINVL で変更すると誤差範囲は上記の限りではない)
- 監視間隔(DIOSA_DAM_MONINVL)×再起動監視時間内のダウン回数(DIOSA_DAM_DOWNCNT)より大きい値を指定する必要がある。

関連

DIOSA_DAM_DOWNCNT, DIOSA_DAM_MONINVL

2. 1. 35 DIOSA_DAM_RTYCNT (デーモン死活監視再起動リトライ回数)

形式

setenv DIOSA_DAM_RTYCNT リトライ回数

説明

死活監視していたデーモンがダウンし、そのデーモンの再起動に失敗した場合、再び再起動を試みる回数を指定する。

設定値の説明

リトライ回数

サブコンデーモンの再起動に失敗した場合に、再起動を試みる回数を指定する。(数字：1～32767)
省略時は、1 回となる。

注意

- 本環境変数を有効にする場合は、死活監視デーモンの再起動が必要である。

2. 1. 36 DIOSA_DAM_RTYINVL (デーモン死活監視再起動リトライ間隔)

形式

setenv DIOSA_DAM_RTYINVL リトライ間隔

説明

死活監視していたデーモンがダウンし、そのデーモンの再起動に失敗した場合、再び再起動を試みるまでの間隔を指定する。

設定値の説明

リトライ間隔

サブコンデーモンの再起動に失敗した場合に、再起動を試みるまでの間隔を秒単位で指定する。(数字 : 1～32767)
省略時は、5 秒となる。

注意

- 本環境変数を有効にする場合は、死活監視デーモンの再起動が必要である。
- 死活監視は 5 秒周期でデーモンの監視を行う。このため、リトライ間隔が 5 秒単位で指定されていない場合は、誤差(最大 4 秒)が発生する。
(5 秒周期で死活監視を行う間隔を DIOSA_DAM_BASEINVL で変更すると誤差範囲は上記の限りではない)

2. 1. 37 DIOSA_DBGERRFILESIZE (障害ログ情報出力ファイル最大サイズ)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGERRFILESIZE 障害ログ情報出力ファイル最大サイズ</code>
--

説明

障害情報ファイル出力デーモンから出力する 障害ログ情報出力ファイルの最大サイズを指定する。

設定値の説明

障害ログ情報出力ファイル最大サイズ

障害ログ情報出力ファイル最大サイズを指定する。（数字、10MB～、省略可）

数字だけを指定した場合の単位は byte、数字の後ろに KB を指定した場合の単位は Kbyte、MB を指定した場合の単位は Mbyte。1Kbyte は 1024byte、1Mbyte は 1024Kbyte となる。

省略した場合は、50MB、最小値より小さい値を指定された場合は、最小値：10MB とする。

注意

- DIOSA_DBGERRPAGE が 1 の場合、本環境変数は意味を持たない。
- DIOSA_DBGERRSIZE より大きい値を設定することを推奨する。

関連

DIOSA_DBGERRPAGE, DIOSA_DBGERRSIZE

2. 1. 38 DIOSA_DBGERRFMAXNUM (障害ログ情報出力ファイル最大ファイル数)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGERRFMAXNUM</code> 障害ログ情報出力ファイル最大ファイル数

説明

障害情報ファイル出力デーモンから出力する 障害ログ情報出力ファイルの最大ファイル数を指定する。

設定値の説明

障害ログ情報出力ファイル最大ファイル数

障害ログ情報出力ファイル最大ファイル数を指定する。（数字、3～9、省略可）

省略した場合は、3 を既定値とする。

最大値より大きい値を指定された場合は、最大値：9 とする。

最小値より小さい値を指定された場合は、最小値：3 とする。

2. 1. 39 DIOSA_DBGERRPAGE (障害ログ情報保存領域数)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGERRPAGE 障害ログ情報保存領域数</code>
--

説明

障害情報ファイル出力デーモンから出力する障害ログ情報の保存領域数を指定する。

設定値の説明

障害情報保存領域数

障害情報保存領域数を指定する。（数字、1～5、省略可）

省略した場合は、1 を既定値とする。

最大値より大きい値を指定された場合は、最大値：5 とする。

注意

- 本環境変数の値が 1 の場合は、障害情報のファイルへの出力は行われない。

2. 1. 40 DIOSA_DBGERRPATH (障害ログ情報出力ファイルパス)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGERRPATH</code> 障害ログ情報出力ファイルのパス
--

説明

障害情報ファイル出力デーモンから出力する 障害ログ情報出力ファイルのパスを指定する。

設定値の説明

障害ログ情報出力ファイルのパス

障害ログ情報出力ファイルの絶対パスを指定する。（英数字、1～128 文字、省略可）

省略した場合は、“{DIOSA_TMP の設定値}/{DIOSA_LNODENAME の設定値}/dbg”を既定値とする。

関連

DIOSA_TMP, DIOSA_LNODENAME

2. 1. 41 DIOSA_DBGERRSIZE (障害ログ情報保存領域サイズ)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGERRSIZE 障害ログ情報保存領域サイズ</code>
--

説明

障害情報ファイル出力デーモンから出力する障害ログ情報を保存する共有メモリのサイズを指定する。

設定値の説明

障害情報保存用共有メモリサイズ

障害情報を保存する共有メモリのサイズを指定する。（数字、512KB～、省略可）

数字だけを指定した場合の単位は byte、数字の後ろに KB を指定した場合の単位は Kbyte、MB を指定した場合の単位は Mbyte。1Kbyte は 1024byte、1Mbyte は 1024Kbyte となる。

省略した場合は 1MB、最小値より小さい値を指定された場合は最小値：512KB とする。

2. 1. 42 DIOSA_DBGFFLUSHMODE (デバッグトレース強制フラッシュモード)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGFFLUSHMODE {ON OFF}</code>
--

説明

デバッグ情報出力時及び運行ログ情報出力ファイル(直接出力)出力時に強制的にフラッシュするかどうかを指定する。

設定値の説明

ON

デバッグ情報出力時、強制書き込みを行う。

OFF

デバッグ情報出力時、強制書き込みを行わない。(省略時の既定値)

2. 1. 43 DIOSA_DBGFUNC (デバッグトレース関数情報収集フラグ)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGFUNC {ON <u>OFF</u>}</code>

説明

デバッグトレース関数情報収集フラグを指定する。

設定値の説明

ON

関数情報の収集を行う。

OFF

関数情報の収集を行わない。(省略時の既定値)

2. 1. 44 DIOSA_DBGLEVEL (デバッグトレース情報出力レベル)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGLEVEL デバッグトレース情報出力レベル</code>
--

説明

デバッグトレース情報出力レベルを指定する。

設定値の説明

デバッグトレース情報出力レベル

デバッグトレース情報出力レベルを指定する。（数字、0～9、省略可）

省略した場合は、0 を既定値とする。

2. 1. 45 DIOSA_DBGLOGFILESIZE (運行ログ情報出力ファイル最大サイズ)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGLOGFILESIZE 運行ログ情報出力ファイル最大サイズ</code>
--

説明

ログ情報ファイル出力デーモンから出力する運行ログ情報出力ファイルの最大サイズを指定する。

設定値の説明

運行ログ情報出力ファイル最大サイズ

運行ログ情報出力ファイル最大サイズを指定する。（数字、10MB～、省略可）

数字だけを指定した場合の単位は byte、数字の後ろに KB を指定した場合の単位は Kbyte、MB を指定した場合の単位は Mbyte。1Kbyte は 1024byte、1Mbyte は 1024Kbyte となる。

省略した場合は 50MB、最小値より小さい値を指定された場合は、最小値：10MB とする。

注意

- DIOSA_DBGLOGPAGE = 1 の場合、本環境変数は意味を持たない。
- DIOSA_DBGLOGSIZE より大きい値を設定することを推奨する。

関連

DIOSA_DBGLOGPAGE, DIOSA_DBGLOGSIZE

2. 1. 46 DIOSA_DBGLOGFMAXNUM (運行ログ情報出力ファイル最大ファイル数)

形式

setenv DIOSA_DBGLOGFMAXNUM 運行ログ情報出力ファイル最大ファイル数
--

説明

ログ情報ファイル出力デーモンから出力する運行ログ情報出力ファイルの最大ファイル数を指定する。

設定値の説明

運行ログ情報ファイル出力ファイル最大ファイル数

運行ログ情報出力ファイル最大ファイル数を指定する。（数字、3～9、省略可）

省略した場合は、3 を既定値とする。

最大値より大きい値を指定された場合は、最大値：9 とする。

最小値より小さい値を指定された場合は、最小値：3 とする。

2. 1. 47 DIOSA_DBGLOGLEVEL (運行ログ情報出力レベル)

形式

<code>setenv</code> <code>DIOSA_DBGLOGLEVEL</code> 運行ログ情報出力レベル
--

説明

運行ログ情報出力レベルを指定する。

設定値の説明

運行ログ情報出力レベル

運行ログ情報出力レベルを指定する。（数字、0～9、省略可）

省略した場合は、0 を既定値とする。

2. 1. 48 DIOSA_DBGLOGPAGE (運行ログ情報保存領域数)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGLOGPAGE 運行ログ情報保存領域数</code>
--

説明

ログ情報ファイル出力デーモン経由で出力する運行ログ情報の保存領域数を指定する。

設定値の説明

運行ログ情報保存領域数

運行ログ情報保存領域数を指定する。(数字、1～5、省略可)

省略した場合は、1 を既定値とする。

最大値より大きい値を指定された場合は、最大値：5 とする。

注意

- 本環境変数の値が 1 の場合は、運行ログ情報のファイルへの出力は行われない。

2. 1. 49 DIOSA_DBGLOGPATH(運行ログ情報出力ファイルパス)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGLOGPATH 運行ログ情報出力ファイルのパス</code>
--

説明

ログ情報ファイル出力デーモンから出力する運行ログ情報出力ファイルのパスを指定する。

設定値の説明

運行ログ情報出力ファイルのパス

運行ログ情報出力ファイルの絶対パスを指定する。（英数字、1～128 文字、省略可）

省略した場合は、“{DIOSA_TMP の設定値}/{DIOSA_LNODENAME の設定値}/dbg”を既定値とする。

関連

DIOSA_TMP, DIOSA_LNODENAME

2. 1. 50 DIOSA_DBGLOGSIZE (運行ログ情報保存領域サイズ)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGLOGSIZE 運行ログ情報保存領域サイズ</code>
--

説明

ログ情報ファイル出力デーモンから出力する運行ログ情報を保存する共有メモリのサイズを指定する。

設定値の説明

運行ログ情報保存領域サイズ

運行ログ情報を保存する共有メモリのサイズを指定する。（数字、512KB～、省略可）

数字だけを指定した場合の単位は byte、数字の後ろに KB を指定した場合の単位は Kbyte、MB を指定した場合の単位は Mbyte。1Kbyte は 1024byte、1Mbyte は 1024Kbyte となる。

省略した場合は 1MB、最小値より小さい値を指定された場合は最小値：512KB とする

2. 1. 51 DIOSA_DBGLPATH(運行ログ情報出力ファイル(直接出力)パス)

形式

setenv DIOSA_DBGLPATH 運行ログ情報出力ファイル(直接出力)のパス

説明

運行ログ情報出力ファイル(直接出力)のパスを指定する。

設定値の説明

運行ログ情報出力ファイル(直接出力)のパス

運行ログ情報出力ファイル(直接出力)の絶対パスを指定する。（英数字、1～128 文字、省略可）
省略した場合は、“{DIOSA_TMP の設定値}/{DIOSA_LNODENAME の設定値}/dbg”を既定値とする。

関連

DIOSA_TMP, DIOSA_LNODENAME

2. 1. 52 DIOSA_DBGMASK (デバッグトレース情報出力マスク値)

形式

setenv DIOSA_DBGMASK デバッグトレース情報出力マスク値

説明

デバッグトレース情報出力マスク値を指定する。

設定値の説明

デバッグトレース情報出力マスク値

デバッグトレース情報出力のマスク値を指定する。（0x00000000～0xFFFFFFFF、省略可）
省略した場合は、0x00000000 を既定値とする。

2. 1. 53 DIOSA_DBGOUTUSERDATA (ユーザデータ出力有無)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGOUTUSERDATA {ON <u>OFF</u>}</code>
--

説明

ユーザデータ出力モードを指定する。

設定値の説明

ON

ユーザデータを出力する。

OFF

ユーザデータを出力しない。(省略時の既定値)

2. 1. 54 DIOSA_DBGPERF (デバッグトレース性能情報収集フラグ)

形式

<code>setenv DIOSA_DBGPERF {ON <u>OFF</u>}</code>

説明

デバッグトレース性能情報測定フラグを指定する。

設定値の説明

ON

性能情報の測定を行う。

OFF

性能情報の測定を行わない。(省略時の既定値)

2. 1. 55 DIOSA_DBGTFMAXNUM (デバッグトレース出力ファイル最大ファイル数)

形式

setenv DIOSA_DBGTFMAXNUM デバッグトレース情報出力ファイル最大ファイル数
--

説明

デバッグトレース情報出力ファイルの最大ファイル数を指定する。

設定値の説明

デバッグトレース情報出力ファイル最大ファイル数

デバッグトレース情報出力ファイル最大ファイル数を指定する。（数字、3～9、省略可）

省略した場合は、1 を既定値とする。

最大値より大きい値を指定された場合は、最大値：9 とする。

最小値より小さい値を指定された場合は(1 を除く)、最小値：3 とする。

2. 1. 56 DIOSA_DBGTFSSIZE (デバッグトレース出力ファイル最大サイズ)

形式

setenv DIOSA_DBGTFSSIZE デバッグトレース情報出力ファイル最大サイズ

説明

デバッグトレース情報出力ファイルの最大サイズを指定する。

設定値の説明

デバッグトレース情報出力ファイル最大サイズ

デバッグトレース情報出力ファイルの最大サイズを指定する。（数字、10MB～、省略可）
数字だけを指定した場合の単位は byte、数字の後ろに KB を指定した場合の単位は Kbyte、MB を指定した場合の単位は Mbyte。1Kbyte は 1024byte、1Mbyte は 1024Kbyte となる。
省略した場合は 50MB、最小値より小さい値を指定された場合は最小値：10MB とする。

注意

- DIOSA_DBGTFMAXNUM = 1 の場合、本環境変数は意味を持たない。（ファイル最大サイズは無制限となる。）

関連

DIOSA_DBGTFMAXNUM

2. 1. 57 DIOSA_DBGTPATH(デバッグトレース出力ファイルパス)

形式

setenv DIOSA_DBGTPATH デバッグトレース情報出力ファイルのパス

説明

デバッグトレース情報出力ファイルのパスを指定する。

設定値の説明

デバッグトレース情報出力ファイルのパス

デバッグトレース情報出力ファイルの絶対パスを指定する。（英数字、1～128 文字、省略可）
省略した場合は、“{DIOSA_TMP の設定値}/{DIOSA_LNODENAME の設定値}/dbg”を既定値とする。

関連

DIOSA_TMP, DIOSA_LNODENAME

2. 1. 58 DIOSA_EDLSRCDIR (EDL ソースファイル格納ディレクトリ)

形式

<code>setenv</code> DIOSA_EDLSRCDIR ディレクトリ名

説明

EDL ソースファイルを検索するディレクトリを指定する。

SG オブジェクト生成/更新コマンドにおいて、EDL ソースファイルをファイル名指定で実行した場合、本環境変数で指定したディレクトリ、コマンド実行時のカレントディレクトリの順に読み込む EDL ソースファイルを検索する。

本環境変数を省略した場合、直接コマンド実行時のカレントディレクトリのみを検索する。

設定値の説明

ディレクトリ名

SG オブジェクト生成/更新時に読み込む EDL ソースファイルを検索するディレクトリの絶対パスを設定する。(1～256 バイト、省略可)

2. 1. 59 DIOSA_ETGMAXENTRY (経過時間監視最大数)

形式

setenv DIOSA_ETGMAXENTRY 同時監視最大数
--

説明

同時に経過時間を監視できるプロセス(スレッド)の最大数を指定する。

設定値の説明

同時監視最大数

経過時間の同時監視最大数を指定する。(数字：1～2147483647)
省略時は、1024 を指定したものとする。

2. 1. 60 DIOSA_IPCKEY (共有メモリ IPC キー)

形式

```
setenv DIOSA_IPCKEY ipckey
```

説明

DIOSA/XTP で使用する IPCKEY を定義する。

設定値の説明

ipckey

DIOSA/XTP で使用する共有メモリの IPC キーの先頭 2 バイトを 16 進表記の英数字 4 桁で指定する。
(省略不可 0001~FFFF)

同ホスト上で動作する他のプログラムが使用している IPC キーと重複しない値を設定する必要がある。
例) 0x4711 の場合、” 4711” 、0x0FFF の場合、” 0FFF” 、0x0001 の場合、” 0001”

2. 1. 61 DIOSA_IRMROOT (SG オブジェクト格納ディレクトリ)

形式

setenv DIOSA_IRMROOT ディレクトリ名

説明

システム起動時に参照する SG オブジェクトの格納ディレクトリを指定する。

設定値の説明

ディレクトリ名

システム起動時に参照する SG オブジェクトの格納ディレクトリの絶対パスを指定する。(1～127 バイト、必須)

2. 1. 62 DIOSA_LIBNAME (AP 動的置換ライブラリ定義)

形式

`[setenv DIOSA_LIBNAME {ライブラリ名決定ルール[:ライブラリ名決定ルール]...}]`

説明

呼び出し指定された関数が定義済みライブラリ中に見つからない場合に、追加でロード対象とするライブラリを決定するための命名規則を指定する。

指定文字列内に、呼び出し関数名を入れたい場合は、%F で入れることが可能である。

ルールはコロン(:)で区切ることで、DIOSA_LIBNAME、DIOSA_LIBNAME_NODR の合計で 100 個まで指定可能とする。ライブラリ名決定ルールを相対パスで指定した場合、LD_LIBRARY_PATH の指定に従って、ライブラリファイルの検索がおこなわれる。

ロード、関数検索は DIOSA_LIBNAME_NODR、DIOSA_LIBNAME の順番で、先頭のライブラリから順番におこなわれる。

ロードされたライブラリは、DIOSA_LIBUNLOAD の指定や、AP 動的置換コマンドの指定にしたがってアンロードされる。

設定例

DIOSA_LIBNAME = "/home/user/lib/lib%F.so"

FUNCTION_A /home/usr/lib/libFUNCTION_A.so をロードして FUNCTION_A を呼び出す。

FUNCTION_B /home/usr/lib/libFUNCTION_B.so をロードして FUNCTION_B を呼び出す。

DIOSA_LIBNAME = "/home/user/lib/lib%F.so:/home/user/lib/libcom.so"

FUNCTION_A /home/usr/lib/libFUNCTION_A.so をロードして FUNCTION_A を呼び出す。

シンボルが見つからなかった場合、/home/user/lib/libcom.so をロードして FUNCTION_A を呼び出す。

FUNCTION_B /home/usr/lib/libFUNCTION_B.so をロードして FUNCTION_B を呼び出す。

シンボルが見つからなかった場合、/home/user/lib/libcom.so をロードして FUNCTION_B を呼び出す。

関連

DIOSA_LIBNAME_NODR, DIOSA_LIBUNLOAD

2. 1. 63 DIOSA_LIBNAME_NODR (AP 動的置換なしライブラリ定義)

形式

[setenv DIOSA_LIBNAME_NODR {ライブラリ名決定ルール[:ライブラリ名決定ルール]...}]

説明

呼び出し指定された関数が定義済みライブラリ中に見つからない場合に、追加でロード対象とするライブラリを決定するための命名規則を指定する。

指定文字列内に、呼び出し関数名を入りたい場合は、%F で入れることが可能である。

ルールはコロン(:)で区切ることで、DIOSA_LIBNAME、DIOSA_LIBNAME_NODR の合計で 100 個まで指定可能とする。ライブラリ名決定ルールを相対パスで指定した場合、LD_LIBRARY_PATH の指定に従って、ライブラリファイルの検索がおこなわれる。

%F 指定なしで記載されたライブラリ群は、プロセス起動時にロードされる。

ロード、関数検索は DIOSA_LIBNAME_NODR、DIOSA_LIBNAME の順番で、先頭のライブラリから順番におこなわれる。

ロードされたライブラリは、プロセス終了時までアンロードされない。

設定例

DIOSA_LIBNAME_NODR = "/home/user/lib/lib%F.so"

FUNCTION_A /home/usr/lib/libFUNCTION_A.so をロードして FUNCTION_A を呼び出す。

FUNCTION_B /home/usr/lib/libFUNCTION_B.so をロードして FUNCTION_B を呼び出す。

DIOSA_LIBNAME_NODR = "/home/user/lib/lib%F.so:/home/user/lib/libcom.so"

/home/user/lib/libcom.so はプロセス起動時にロードされる。

FUNCTION_A /home/usr/lib/libFUNCTION_A.so をロードして FUNCTION_A を呼び出す。

シンボルが見つからなかった場合、/home/user/lib/libcom.so 内で FUNCTION_A を検索して呼び出す。

FUNCTION_B /home/usr/lib/libFUNCTION_B.so をロードして FUNCTION_B を呼び出す。

シンボルが見つからなかった場合、/home/user/lib/libcom.so 内で FUNCTION_B を検索して呼び出す。

関連

DIOSA_LIBNAME

2. 1. 64 DIOSA_LIBUNLOAD (AP 動的置換ライブラリアンロードタイミング)

形式

```
[setenv DIOSA_LIBUNLOAD { NO | TRNS }]
```

説明

環境変数 DIOSA_LIBNAME を指定してロードしたライブラリをアンロードするタイミングを指定する。

設定値の説明

NO

ロードしたライブラリは、プロセス終了するまでアンロードしない。

TRNS

ロードしたライブラリは、トランザクション終了のタイミングでアンロードされる。(環境変数省略時の既定値)

関連

DIOSA_LIBNAME

2. 1. 65 DIOSA_LNODENAME (DIOSA/XTP 論理ノード名)

形式

setenv DIOSA_LNODENAME 論理ノード名

説明

論理ノード名を指定する。

設定値の説明

論理ノード名

ノード構成情報 (DIOSAMAP 節) で定義した論理ノード名を指定する。(英数字、1～15 文字、省略不可)

注意

- 下記の文字列は予約語となるため使用することはできない。
 all

2. 1. 66 DIOSA_MEMUBUF (プロセスメモリ (初期値、最大値、拡張値) サイズ)

形式

```
setenv DIOSA_MEMUBUF [プロセス内メモリ初期サイズ]:[プロセス内メモリ最大サイズ]  
:[プロセス内メモリ拡張サイズ]:[スレッド内メモリ初期サイズ]  
:[スレッド内メモリ最大サイズ]:[スレッド内メモリ拡張サイズ]  
:[サービス内メモリ初期サイズ]:[サービス内メモリ最大サイズ]  
:[サービス内メモリ拡張サイズ]
```

説明

プロセスメモリのサイズ（初期値、最大値、拡張値）を指定する。
本環境変数は環境定義（MMG 節 - UAP 項）とマッピングしている。
各プロセス起動時に本環境変数が設定されている場合、環境定義の設定より優先される。
各サイズは、10 進数の数値表現形式でキロバイト単位で設定する。
区切り文字（:）は省略できない。

設定値の説明

プロセス内メモリ初期サイズ

プロセス内メモリ初期サイズを指定する。（数字、0～2000000、省略可）
省略した場合、0 が指定される。

プロセス内メモリ最大サイズ

プロセス内メモリ最大サイズを指定する。（数字、0～2000000、省略可）
省略した場合、2000000 が指定される。

プロセス内メモリ拡張サイズ

プロセス内メモリ拡張サイズを指定する。（数字、0～2000000、省略可）
省略した場合、10000 が指定される。

スレッド内メモリ初期サイズ

スレッド内メモリ初期サイズを指定する。（数字、0～2000000、省略可）
省略した場合、0 が指定される。

スレッド内メモリ最大サイズ

スレッド内メモリ最大サイズを指定する。（数字、0～2000000、省略可）
省略した場合、2000000 が指定される。

スレッド内メモリ拡張サイズ

スレッドメモリ拡張サイズを指定する。（数字、0～2000000、省略可）
省略した場合、10000 が指定される。

サービス内メモリ初期サイズ

サービス内メモリ初期サイズを指定する。（数字、0～2000000、省略可）
省略した場合、0 が指定される。

サービス内メモリ最大サイズ

サービス内メモリ最大サイズを指定する。（数字、0～2000000、省略可）
省略した場合、2000000 が指定される。

サービス内メモリ拡張サイズ

サービス内メモリ拡張サイズを指定する。（数字、0～2000000、省略可）

省略した場合、10000 が指定される。

注意

- 各メモリサイズ下記の組み合わせでは指定できない。
初期サイズ+拡張サイズ>最大サイズ
拡張サイズ=0 かつ 初期サイズ≠最大サイズ
- 下記の組み合わせではメモリ管理機能を使用できない。
初期サイズ=0, 拡張サイズ=0, 最大サイズ=0

2. 1. 67 DIOSA_MEMUDIR (メモリアポートダンプ出力ディレクトリ)

形式

<code>setenv DIOSA_MEMUDIR 出力ディレクトリ</code>
--

説明

アポートダンプの出力ディレクトリを指定する。

本環境変数は起動（distart_com）実行時と各プロセスの開始時に読み込み、各プロセスで指定された環境変数を優先する。

本環境変数は環境定義（MMG 節 - UDIR 項）とマッピングしており、本環境変数を省略した場合、環境定義の値を適用する。

設定値の説明

出力ディレクトリ

アポートダンプを出力するディレクトリを絶対パスで指定する。（英数字、1～128 文字、省略不可）

注意

- 本環境変数で指定するディレクトリのパーミッションは、メモリ管理の使用有無関わらず、プロセス実行ユーザの書き込み権を付与する必要がある。書き込み権がない場合、プロセス起動に失敗する。

2.1.68 DIOSA_MEMUDMP (メモリアポートダンプ出力可否)

形式

```
setenv  DIOSA_MEMUDMP  [更新可共有メモリ]:[保護属性共有メモリ]
                                :[一括解放対象外プロセス内メモリ]:[一括解放対象外スレッド内メモリ]
                                :[一括解放対象サービス内メモリ]
```

説明

アボートダンプの出力可否を指定する。

本環境変数は起動（distart_com）実行時と各プロセスの開始時に読み込み、各プロセスで指定された環境変数を優先する。

本環境変数は環境定義(MMG 節 - UDMP 項)とマッピングしており、本環境変数を省略した場合、環境定義の値を適用する。

区切り文字 (:) は省略できない。

設定値の説明

更新可共有メモリ

更新可共有メモリのアボートダンプの出力指示を指定する。(数字、省略可)

省略した場合、更新可共有メモリのアボートダンプを出力する。

設定値	説明
0	アボートダンプを出力しない
0 以外	アボートダンプを出力する

保護属性共有メモリ

保護属性共有メモリのアボートダンプの出力指示を指定する。(数字、省略可)

省略した場合、保護属性共有メモリのアボートダンプを出力する。

設定値	説明
0	アボートダンプを出力しない
0 以外	アボートダンプを出力する

一括解放対象外プロセス内メモリ

一括解放対象外プロセス内メモリのアボートダンプの出力指示を指定する。(数字、省略可)

省略した場合、一括解放対象外プロセス内メモリのアボートダンプを出力する。

設定値	説明
0	アボートダンプを出力しない
0 以外	アボートダンプを出力する

一括解放対象外スレッド内メモリ

一括解放対象外スレッド内メモリのアボートダンプの出力指示を指定する。(数字、省略可)

省略した場合、一括解放対象外スレッド内メモリのアボートダンプを出力する。

設定値	説明
0	アボートダンプを出力しない
0 以外	アボートダンプを出力する

一括解放対象サービス内メモリ

一括解放対象サービス内メモリのアボートダンプの出力指示を指定する。(数字、省略可)

省略した場合、一括解放対象サービス内メモリのアボートダンプを出力する。

設定値	説明
0	アボートダンプを出力しない
0 以外	アボートダンプを出力する

2. 1. 69 DIOSA_MSG_BACKLOG (メッセージ出力機能ソケット接続キュー数)

形式

<code>setenv DIOSA_MSG_BACKLOG 接続キュー数</code>
--

説明

ソケット通信時の接続キュー数を指定する。

設定値の説明

接続キュー数

ソケット通信時の接続キュー数を指定する。(0～4096、省略時 5)
数値以外、範囲外の値が指定された場合は 5 に設定される。

2. 1. 70 DIOSA_MSG_CMD (メッセージログファイルローテート時実行コマンド)

形式

<code>setenv DIOSA_MSG_CMD ローテート時実行コマンド</code>
--

説明

メッセージログファイルのローテート時実行コマンドを指定する。

設定値の説明

ローテート時実行コマンド

メッセージログファイルのローテート時に実行するコマンドを設定する。(1024 バイト未満、省略可)

注意

- コマンド内に@file と記述すると、ローテート前のファイルパス(フルパス)に置換してからコマンドが実行される。なお、@file をファイルパス(フルパス)に置換した後のコマンドの文字列長が 1024 バイト未満であること。
- コマンドが最大長を超える場合や省略時は実行されない。

関連

DIOSA_MSG_LOG_PATH, DIOSA_MSG_LOG_ROTATE

2. 1. 71 DIOSA_MSG_ERR_ROTATE (エラー出力ファイルローテート定義)

形式

<code>setenv DIOSA_MSG_ERR_ROTATE 最大ファイルサイズ:保存ファイル数</code>
--

説明

エラー出力ファイルの最大ファイルサイズ、保存ファイル数を指定する。

設定値の説明

最大ファイルサイズ

エラー出力ファイルの最大サイズをメガバイト単位で設定する。(1～100、省略時 5)
数値以外、範囲外の値が指定された場合は 5 に設定される。

保存ファイル数

エラー出力ファイルのローテートファイル数を設定する。(2～10、省略時 2)
数値以外、範囲外の値が指定された場合は 2 に設定される。

注意

- エラー出力ファイルのサイズが最大ファイルサイズに達した場合は、次のファイルに出力先を切り替える。
- ファイルの切り替えが保存ファイル数に達した場合は、最も古いファイルが次の出力先となり上書きされる。

関連

DIOSA_MSG_LOG_PATH, DIOSA_MSG_LOG_ROTATE

2. 1. 72 DIOSA_MSG_FORM_FILEPATH(ユーザ用原型メッセージファイル名)

形式

<code>setenv DIOSA_MSG_FORM_FILEPATH ユーザ用原型メッセージファイル名</code>
--

説明

ユーザ用原型メッセージファイル名を指定する。

設定値の説明

ユーザ用原型メッセージファイル名

ユーザ用原型メッセージファイル名（dbm 形式）をフルパスで指定する。
（拡張子につけない、省略可）

注意

- メッセージ出力デーモンは、ユーザ用原型メッセージファイルを次のように特定する。
 `${DIOSA_MSG_FORM_FILEPATH} . {dir|pag}`
- ユーザ用原型メッセージファイルを作成する場合は当環境変数を設定後、原型メッセージファイル・メンテナンスコマンド(dimsgmntn)を使用し作成する。
- 当環境変数が省略された場合、ユーザメッセージのメッセージはフォーマットなしで出力される。

2. 1. 73 DIOSA_MSG_LEVEL (メッセージ出力レベル基準値)

形式

<code>setenv DIOSA_MSG_LEVEL 出力レベル基準値</code>
--

説明

メッセージの出力レベル基準値を指定する。

設定値の説明

出力レベル基準値

メッセージの出力レベル基準値を数値で指定する。(1～5、省略時 5)

注意

- 指定した数値以下のレベルを持つメッセージが出力される。
- メッセージ出力デーモン起動時にこの値が設定される。起動中に設定を変更したい場合は、メッセージ出力レベル変更コマンド(dimsglvlmod)を使用する。

2. 1. 74 DIOSA_MSG_LOCALE (メッセージ出力機能ロケール設定)

形式

<code>setenv DIOSA_MSG_LOCALE ロケール</code>

説明

原型メッセージ取得時のロケールを指定する。

設定値の説明

ロケール

原型メッセージ取得時のロケールを指定する。(省略可)

注意

- 指定したロケールの原型メッセージ本文で出力メッセージが作成される。
- 本環境変数が指定されていない場合は、環境変数 LC_MESSAGES、LANG の順にチェックを行い、指定された言語で出力メッセージが作成される。
- 本環境変数の有効範囲は C 言語メッセージのみであり、他の表示(環境定義メッセージ、トレースメッセージ、Java メッセージやコマンドの使用法表示など)には適用されない。
- 本環境変数は、環境変数 LC_MESSAGES、あるいは LANG と同期することを推奨する。

関連

LANG, LC_MESSAGES

2. 1. 75 DIOSA_MSG_LOG_PATH(メッセージログファイル格納ディレクトリ)

形式

<code>setenv DIOSA_MSG_LOG_PATH メッセージログファイル格納ディレクトリ</code>
--

説明

メッセージログファイル及びエラー出力ファイルの格納ディレクトリを指定する。

設定値の説明

メッセージログファイル格納ディレクトリ

メッセージログファイル格納ディレクトリをフルパスで指定する。(省略不可)

注意

- メッセージ出力デーモンは、出力先のメッセージログファイルを次のように特定する。
`${DIOSA_MSG_LOG_PATH}/diosa_${DIOSA_LNODENAME}_msg_log_{連番}`
(`{連番}`は `0~$DIOSA_MSG_LOG_ROTATE` の保存数-1)
- メッセージ出力 API は、出力先のエラー出力ファイルを次のように特定する。
`${DIOSA_MSG_LOG_PATH}/diosa_${DIOSA_LNODENAME}_err_log_{連番}`
(`{連番}`は `0~$DIOSA_MSG_ERR_ROTATE` の保存数-1)
- 本環境変数が設定されていない場合、メッセージ出力デーモンは起動しない。

関連

DIOSA_LNODENAME, DIOSA_MSG_LOG_ROTATE, DIOSA_MSG_ERR_ROTATE

2. 1. 76 DIOSA_MSG_LOG_ROTATE (メッセージログファイルローテート定義)

形式

<code>setenv DIOSA_MSG_LOG_ROTATE 最大ファイルサイズ:保存ファイル数</code>
--

説明

メッセージログファイルの最大ファイルサイズ、保存ファイル数を指定する。

設定値の説明

最大ファイルサイズ

メッセージログファイルの最大サイズをメガバイト単位で設定する。(1~100、省略時 5)
数値以外、範囲外の値が指定された場合は 5 に設定される。

保存ファイル数

メッセージログファイルのローテートファイル数を設定する。(2~10、省略時 2)
数値以外、範囲外の値が指定された場合は 2 に設定される。

注意

- メッセージログファイルのサイズが最大ファイルサイズに達した場合は、次のファイルに出力先を切り替える。
- 出力先を切り替えるとき、ログローテート時の実行コマンド(DIOSA_MSG_CMD)が実行される。
- ファイルの切り替えが保存ファイル数に達した場合は、最も古いファイルが次の出力先となり上書きされる。

関連

DIOSA_MSG_CMD, DIOSA_MSG_LOG_PATH, DIOSA_MSG_ERR_ROTATE

2. 1. 77 DIOSA_MSG_MAX_POOLS (メッセージ出力デーモン制御スレッド数)

形式

<code>setenv DIOSA_MSG_MAX_POOLS</code> ラッシュチェックスレッド数

説明

メッセージ出力デーモンで使用するラッシュチェックスレッド数を指定する。

設定値の説明

ラッシュチェックスレッド数

メッセージ出力デーモンで使用するラッシュチェックスレッド数を指定する。(1～10、省略時 1)
数値以外、範囲外の値が指定された場合は 1 に設定される。

注意

- 2 以上に設定した場合、メッセージの出力順が前後する可能性がある。

2. 1. 78 DIOSA_MSG_OMIT_INF (同一メッセージ出力抑止定義)

形式

setenv DIOSA_MSG_OMIT_INF 同一メッセージ出力抑止時間:同時抑止可能メッセージ ID 数
--

説明

同一メッセージの出力を抑止する制限時間とチェック数を指定する。

設定値の説明

同一メッセージ出力抑止時間

同一メッセージの出力を抑止する秒数を設定する。(0～3600、省略時 0)
数値以外、範囲外の値が指定された場合は 0 に設定される。
0 を指定した場合は同一メッセージの抑止は行わない。

同時抑止可能メッセージ ID 数

抑止中 ID を保持する配列の要素数を設定する。(0～32、省略時 0)
数値以外、範囲外の値が指定された場合は 0 に設定される。
0 を指定した場合は同一メッセージの抑止は行わない。

注意

- 抑止時間、チェック数ともに 0 以外に設定したとき、抑止時間中に同一メッセージの出力があった場合、2 つ目以降のメッセージの出力は抑止される。
- 同時に抑止できるメッセージの種類は、チェック数で指定した数までとなる。
- メッセージ出力デーモン起動時にこの値が設定される。起動中に設定を変更したい場合は、メッセージ出力レベル変更コマンド(dimsglvlmod)を使用する。

2. 1. 79 DIOSA_MSG_QUEUE_SIZE (メッセージ出力機能キューサイズ)

形式

<code>setenv DIOSA_MSG_QUEUE_SIZE メッセージキューサイズ</code>
--

説明

メッセージ出力情報を保持するメッセージキューサイズを指定する。

設定値の説明

メッセージキューサイズ

メッセージ出力情報を保持するメッセージキューのサイズをキロバイト単位で指定する。(8～1024)

数値以外、範囲外の値が指定された場合は 64 に設定される。

省略時はカーネルパラメータの設定に従う。

2. 1. 80 DIOSA_MSG_RETRY (メッセージ出力リトライ定義)

形式

<code>setenv DIOSA_MSG_RETRY 回数：間隔</code>

説明

メッセージ出力 API がメッセージ出力に失敗した場合の、再出力を試みる回数と間隔を指定する。

設定値の説明

回数

再出力を試みる回数を指定する。(0～10、省略時 3)

数値以外、範囲外の値が指定された場合は 3 に設定される。

間隔

再出力を行うまでの秒数を指定する。(0～60、省略時 1)

数値以外、範囲外の値が指定された場合は 1 に設定される。

関連

DIOSA_MSG_TIMEOUT

2. 1. 81 DIOSA_MSG_TIMEOUT (メッセージ出力通信タイムアウト時間)

形式

<code>setenv DIOSA_MSG_TIMEOUT タイムアウト時間</code>
--

説明

メッセージ出力 API とメッセージ出力デーモンの通信のタイムアウト時間を指定する。

設定値の説明

タイムアウト時間

メッセージ出力 API とメッセージ出力デーモン間の通信時のタイムアウト秒数を指定する。(0～60、省略時 3)

0 を指定した場合はタイムアウトしない。

関連

DIOSA_MSG_RETRY

2. 1. 82 DIOSA_OPSSNDBUF (稼動統計送信バッファサイズ)

形式

setenv DIOSA_OPSSNDBUF バッファサイズ

説明

稼動統計デーモンとのソケット通信にて使用する送信バッファサイズを指定する。

設定値の説明

バッファサイズ

送信バッファサイズをキロバイト単位で指定する。(数字 : 1～2097151)

省略時は、128 キロバイトを指定したものとする。

注意

- 環境変数に範囲外の値や数字以外の値が指定された場合、128キロバイトで動作する。
- 指定した値がシステム上の最大送信バッファサイズを超えた場合は、システム既定値で動作する。

2. 1. 83 DIOSA_PERFENTRYNUM (稼動統計任意区間情報蓄積エントリ数)

形式

setenv DIOSA_PERFENTRYNUM エントリ数

説明

稼動統計任意区間情報を蓄積するためのエントリ数を指定する。
CO 制御 TPP、バッチ AP 制御、ユーザ AP では、プロセス(スレッド)毎に本環境変数で指定したエントリ数分のメモリを確保する。

設定値の説明

エントリ数

確保するエントリ数を指定する。(数字：0～9999999)
省略時は、30 を指定したものとする。
0 を指定した場合、稼動統計任意区間情報は採取不可となる。

注意

稼動統計任意区間情報は 1 トランザクション分の情報をプロセス(スレッド)単位に確保されるメモリ領域に保持し、トランザクション終了時に出力する。稼動統計任意区間情報を採取する場合は、1 トランザクション内で採取する区間数の最大値を考慮し、本環境変数に指定すること。

関連

diosaperfstart(),diosaperfend()

2. 1. 84 DIOSA_PRIVATEIPC_MAX(資源管理テーブルエントリ数)

形式

setenv DIOSA_PRIVATEIPC_MAX 資源管理テーブルエントリ数

説明

資源管理テーブルのエントリ数を指定する。

設定値の説明

資源管理テーブルのエントリ数

指定可能範囲	:	1000～99999
既定値	:	10000

注意

- 範囲外の値が設定された場合以下の値となる
1000 未満の数値を指定 : 1000
100000 以上の値を指定 : 99999

2. 1. 85 DIOSA_ROOT (DIOSA/XTP インストールディレクトリ名)

形式

<code>setenv DIOSA_ROOT DIOSA/XTP インストールディレクトリ名</code>
--

説明

DIOSA/XTP をインストールしたディレクトリを指定する。

設定値の説明

DIOSA/XTP インストールディレクトリ名

DIOSA/XTP インストールディレクトリ名を絶対パスで指定する。(英数字、1～127 文字、省略可、最後に ‘/’ は不要)

注意

- 省略時は、”/opt/diosa_xtp”が DIOSA_ROOT となる。

2. 1. 86 **DIOSA_TMCDIPROC (タイマ制御 DIOSA タイマ実行プロセス最大数)**

形式

setenv	DIOSA_TMCDIPROC	起動数
--------	-----------------	-----

説明

DIOSA 内部用タイマ情報を実行するプロセスを同時に起動できる最大数を指定する。

設定値の説明

起動数

DIOSA 内部用タイマ情報を実行するプロセスを同時に起動できる最大数を指定する。(数字：3～128)
省略時は、5 を指定したものとする。

2. 1. 87 DIOSA_TMCDITBLMAX (タイマ制御 DIOSA タイマ最大登録数)

形式

setenv DIOSA_TMCDITBLMAX 最大数

説明

同時に登録できる DIOSA 内部用タイマ情報の最大数を指定する。

設定値の説明

最大数

同時に登録できる DIOSA 内部用タイマ情報の最大数を指定する。(数字：1～2048)
省略時は、64 を指定したものとする。

2. 1. 88 DIOSA_TMCLNMAX (タイマ制御メッセージ・コマンド最大長)

形式

setenv DIOSA_TMCLNMAX 最大長

説明

タイマ登録で設定できる送信メッセージ(C0 タイマ登録)、送信データ(TPBASE タイマ登録)またはコマンド名(コマンドタイマ登録)の最大長を指定する。

設定値の説明

最大長

タイマ登録で設定できる送信メッセージ、送信データまたはコマンド名の最大長をバイト単位で指定する。
(数字：200～10240)
省略時は、200 バイトを指定したものとする。

2. 1. 89 DIOSA_TMCOVER (タイマ制御実行監視時間)

形式

setenv DIOSA_TMCOVER 監視時間

説明

タイマ情報を実行した時、要求した処理が完了せずにタイムアウトとみなし、警告メッセージを表示するまでの監視時間を指定する。

設定値の説明

監視時間

タイムアウトの監視時間を秒単位で指定する。(数字：0～86400)
省略時は、30 秒を指定したものとする。
0 を指定した場合は、監視を行わない。

注意

- 警告対象のタイマ情報は処理されたとみなし、実行回数から減算される。(残り 1 回の場合は、テーブルから削除される。)
- タイムアウトの検出までの時間は、最長で DIOSA_TMCOVER+デーモンの監視間隔となる。

2. 1. 90 DIOSA_TMCPROC (タイマ制御ユーザタイマ実行プロセス最大数)

形式

setenv DIOSA_TMCPROC 起動数

説明

ユーザ用タイマ情報を実行するプロセスを同時に起動できる最大数を指定する。

設定値の説明

起動数

ユーザ用タイマ情報を実行するプロセスを同時に起動できる最大数を指定する。(数字：3～128)
省略時は、10 を指定したものとする。

2. 1. 91 DIOSA_TMCTBLMAX (タイマ制御ユーザタイマ最大登録数)

形式

setenv DIOSA_TMCTBLMAX 最大数

説明

同時に登録できるユーザ用タイマ情報の最大数を指定する。

設定値の説明

最大数

同時に登録できるユーザ用タイマ情報の最大数を指定する。(数字：1～2048)

省略時は、512 を指定したものとする。

2. 1. 92 DIOSA_TMCWAITLIMIT (タイマ制御実行プロセス停止時間)

形式

setenv DIOSA_TMCWAITLIMIT 停止までの時間

説明

タイマ情報を実行するプロセスが待機状態のまま存在した場合に、停止するまでの時間を指定する。

設定値の説明

停止までの時間

タイマ情報を実行するプロセスが待機状態のまま存在した場合に、停止するまでの時間を分単位で指定する。(数字：10～1440)
省略時は、60 分を指定したものとする。

注意

- 待機状態の実行プロセスを停止するまでの時間は、最長で DIOSA_TMCWAITLIMIT+デーモンの監視間隔となる。

2. 1. 93 DIOSA_TMP (DIOSA/XTP 作業用ディレクトリ名)

形式

<code>setenv DIOSA_TMP 作業用ディレクトリ名</code>
--

説明

作業用のルートディレクトリを指定する。

設定値の説明

作業用ディレクトリ名

DIOSA/XTP 作業用ディレクトリ名を絶対パスで指定する。(英数字、1～40 文字、省略可、最後に ‘/’ は不要)

注意

- 作業ディレクトリは共有ディスク上のパスを指定してはならない。
- 省略された場合はデフォルトの作業用ディレクトリ (/tmp) が使用される。

2.2 通信制御

2.2.1 環境変数一覧

(1) ノード間通信パス管理機能

DIOSA_DBBLOCK_RETRY	自動閉塞処理のリトライ回数を指定する。
DIOSA_DBINTEGRATE_AUTO	DB 障害から復帰した DB ノードの自動組み込み可否を指定する。
DIOSA_NCM_DBEXIT	データベース接続利用者出口の関数名を指定する。
DIOSA_SHDBACTIVE	インスタンスグループの全体 DB 状態が非活性から活性に変化した場合に実行するシェルスクリプトのパスを指定する。

2. 2. 2 DIOSA_DBBLOCK_RETRY (DB ヘルスチェック自動閉塞リトライ回数)

形式

setenv DIOSA_DBBLOCK_RETRY リトライ回数

説明

データベース監視機能において、データベース障害時に DB ノードを自動閉塞する機能で、閉塞処理が失敗した場合のリトライ回数を指定する。

設定値の説明

リトライ回数

自動閉塞処理のリトライ回数を指定する。（数字:0～999、省略可）

省略した場合、および指定値が不正な値の場合は、10 回までリトライを行う。

注意

- 本環境変数は全 AP ノード、OLTP ノードで同一の値を指定しなければならない。

2. 2. 3 DIOSA_DBINTEGRATE_AUTO (DB 復旧時自動組み込み指定)

形式

```
setenv DIOSA_DBINTEGRATE_AUTO { YES | NO }
```

説明

データベース監視機能において、データベース障害から復旧した DB ノードを自動的にシステムに組み込むかどうかを指定する。

設定値の説明

YES

DB 復旧時、復旧した DB ノードを自動的にシステムに組み込む(既定値)。

NO

DB 復旧時、復旧した DB ノードを自動的にシステムに組み込まない。

データベース障害時、障害となった DB ノードを閉塞することで復旧時の組み込みを抑止している。復旧時に閉塞解除をすることで組み込める。

注意

- 本環境変数は全 AP ノード、OLTP ノードで同一の値を指定しなければならない。

2. 2. 4 DIOSA_NCM_DBEXIT (データベース接続出口関数名)

形式

setenv DIOSA_NCM_DBEXIT データベース接続出口関数名

説明

データベース監視機能におけるデータベース接続出口の関数を指定する。

設定値の説明

データベース接続出口関数名

データベース接続利用者出口の関数名を指定する。（省略可）
本環境変数を指定した場合は、通信制御機能の環境定義 (DBCTRL 節) で指定するデータベース接続利用者出口の関数名指定より優先される。
本環境変数は省略することが可能であり、その場合は、通信制御機能の環境定義 (DBCTRL 節) に基づき、データベースの接続が行われる。

注意

- 本環境変数で指定する関数を含むライブラリについては、予め、AP 制御機能の APLIB 節にて定義されていなければならない。
- データベース・インスタンス毎にアカウントを変更したい場合、データベース接続利用者出口の接続先ネット・サービス名を元に、アカウントを切り替えること。

2. 2. 5 DIOSA_SHDBACTIVE (全体 DB 状態活性時実行シェルスクリプト)

形式

`setenv DIOSA_SHDBACTIVE 実行するシェルスクリプトのパス`

説明

インスタンスグループの全体 DB 状態が非活性 (ABNORMAL) から活性 (NORMAL) に変化した場合に実行するシェルスクリプトのパスを指定する。ただし、AP/OLTP ノード起動直後の初回ヘルスチェック時に限り、全体 DB 状態が非活性から活性に変化してもシェルスクリプトは実行しない。

設定値の説明

実行するシェルスクリプトのパス

インスタンスグループの全体 DB 状態が非活性 (ABNORMAL) から活性 (NORMAL) に変化した場合に実行するシェルスクリプトの絶対パスを指定する。(1~255 バイト、省略可)

省略した場合、シェルスクリプトは実行しない。

本環境変数で指定するシェルスクリプトは AP/OLTP ノード上の DB ヘルスチェックデーモンから実行されるが、シェルスクリプトの実行結果は確認しない。

本環境変数で指定するシェルスクリプトを実行する際、第一引数として自論理ノード名、第二引数として自論理ノード種別、第三引数として当該インスタンスグループ名が付与される。

[DIOSA_SHDBACTIVE で指定するシェルスクリプト] [自論理ノード名] [自論理ノード種別] [当該インスタンスグループ名]

ここで、自論理ノード種別には、下記の値に対応する数字が 10 進数表記で付与される。

DIOSA_LNODETYPE_AP (1)	AP ノード
DIOSA_LNODETYPE_DB (2)	DB ノード
DIOSA_LNODETYPE_OLTP (4)	OLTP ノード

注意

- DB ノード上の DB ヘルスチェックデーモンは本環境変数で指定したシェルスクリプトを実行しないため、本環境変数を使用する場合は AP/OLTP ノードに定義すること。
- シェルスクリプトの実行完了まで待つため、長時間実行するシェルスクリプトは指定しないこと。

関連

dincmdbstat (DB 状態照会コマンド)

2.3 メモリキャッシュ

2.3.1 環境変数一覧

(1) インメモリサーバ所在管理

DIOSA_IIC_HASHEXIT

メインキーをハッシュ値に変換するためのハッシュ関数名を指定する。

DIOSA_IIC_IMSRV_TIMEOUT

インメモリサーバ制御処理の待ち合わせタイムアウト値を指定する。

2. 3. 2 DIOSA_IIC_HASHEXIT (ハッシュ関数名)

形式

setenv DIOSA_IIC_HASHEXIT ハッシュ関数名

説明

メインキーをハッシュ値に変換するためのハッシュ関数名を指定する。

設定値の説明

ハッシュ関数名

メインキーをハッシュ値に変換するためのハッシュ関数名を指定する。(英数字：1～30 文字)
本環境変数を指定した場合は、環境定義 IMENV 節-USERAP 項- HASHEXIT で指定するハッシュ関数名より優先される。また、本環境変数を指定した場合、メモリキャッシュ機能が未起動の場合でも、ハッシュ値取得関数 (diosagethash)は利用可能となる。
省略した場合は、環境定義で指定するハッシュ関数名が利用される。

注意

本環境変数で指定する関数を含むライブラリについては、予め、AP 制御機能の APLIB 節にて定義されていなければならない。

2.3.3 DIOSA_IIC_IMSRV_TIMEOUT (IM サーバ制御共通タイムアウト値)

形式

setenv DIOSA_IIC_IMSRV_TIMEOUT インメモリサーバ制御共通タイムアウト値
--

説明

インメモリサーバ制御共通タイムアウト値（秒）を指定する。

設定値の説明

インメモリサーバ制御共通タイムアウト値

インメモリサーバの起動・停止等の処理待ち合わせに利用するタイムアウト値（秒）を指定する。

（数字：1～65535、省略可）

省略した場合、および指定値が不正な値の場合は、10（秒）が指定されたものとする。

2.4 データストア基盤

2.4.1 環境変数一覧

(1) ディレード

DIOSA_DELAYED_CONNECTTIMEOUT	電文送信時のソケット接続タイムアウト値(秒)を指定する。
DIOSA_DELAYED_SELECTTIMEOUT	電文送受信時のソケット監視タイムアウト値(秒)を指定する。
DIOSA_DELAYED_SENDDTIMEOUT	電文送信時の送信タイムアウト値(秒)を指定する。
DIOSA_DELAYED_SLMLOCKID	ストリーム所在管理の DBMS ロック ID を指定する。
DIOSA_DTDMSGSIZE	センダが転送するログデータ電文の最大電文長(バイト)を指定する。

(2) センダ

DIOSA_DELAYED_DATADBGINVL	センダが転送するログデータ電文の運行ログを出力する通番の間隔(件数)を指定する。
DIOSA_DELAYED_SENDRCVRYINVL	センダ実行デーモンが DB アクセス障害発生時にリトライする間隔(秒)を指定する。

(3) ログリーダー

DIOSA_DELAYED_EXECCVRYINVL	ログリーダー実行デーモンが DB アクセス障害発生時にリトライする間隔(秒)を指定する。
----------------------------	--

2. 4. 2 DIOSA_DELAYED_CONNECTTIMEOUT (ソケット接続タイムアウト値)

形式

<code>setenv DIOSA_DELAYED_CONNECTTIMEOUT ソケット接続タイムアウト値</code>
--

説明

電文送信時のソケット接続タイムアウト値(秒)を指定する。

設定値の説明

ソケット接続タイムアウト値

電文送信時のソケット接続タイムアウト値(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。
省略した場合は、5 が指定されたものとする。

2. 4. 3 DIOSA_DELAYED_DATADBGINVL (ログデータ電文ログ出力通番間隔)

形式

setenv DIOSA_DELAYED_DATADBGINVL ログデータ電文ログ出力通番間隔
--

説明

センダが転送するログデータ電文の運行ログを出力する通番の間隔(件数)を指定する。

設定値の説明

ログデータ電文ログ出力通番間隔

ログデータ電文の運行ログを出力する通番の間隔(件数)を 1 から 2147483647 までの整数で指定する。
省略した場合は、5000 が指定されたものとする。

2. 4. 4 DIOSA_DELAYED_EXECRCVRYINVL (障害時リトライ間隔(ログリーダー))

形式

setenv DIOSA_DELAYED_EXECRCVRYINVL 障害時リトライ間隔(ログリーダー)
--

説明

ログリーダー実行デーモンが DB アクセス障害発生時にリトライする間隔(秒)を指定する

設定値の説明

障害時リトライ間隔(ログリーダー)

DB アクセス障害発生時のリトライ間隔(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。
省略した場合は、5 が指定されたものとする。

2. 4. 5 DIOSA_DELAYED_SELECTTIMEOUT (ソケット監視タイムアウト値)

形式

<code>setenv DIOSA_DELAYED_SELECTTIMEOUT ソケット監視タイムアウト値</code>

説明

電文送受信時のソケット監視タイムアウト値(秒)を指定する。

設定値の説明

ソケット監視タイムアウト値

電文送受信時のソケット監視タイムアウト値(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。

省略した場合は、90 が指定されたものとする。

環境定義における DELAYED 節 SENDER 項および RECEIVER 項の CRTYINVL、RTYINVL より大きい値を設定する。

2. 4. 6 DIOSA_DELAYED_SENDRCVRYINVL (障害時リトライ間隔(センダ))

形式

<code>setenv DIOSA_DELAYED_SENDRCVRYINVL 障害時リトライ間隔(センダ)</code>
--

説明

センダ実行デーモンが DB アクセス障害発生時にリトライする間隔(秒)を指定する

設定値の説明

障害時リトライ間隔(センダ)

DB アクセス障害発生時のリトライ間隔(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。
省略した場合は、5 が指定されたものとする。

2. 4. 7 DIOSA_DELAYED_SENDTIMEOUT (電文送信タイムアウト値)

形式

<code>setenv</code>	<code>DIOSA_DELAYED_SENDTIMEOUT</code>	電文送信タイムアウト値
---------------------	--	-------------

説明

電文送信時の送信タイムアウト値(秒)を指定する。

設定値の説明

電文送信タイムアウト値

電文送信時の送信タイムアウト値(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。
省略した場合は、5 が指定されたものとする。

2. 4. 8 DIOSA_DELAYED_SLMLOCKID (ストリーム所在管理 DBMS ロック ID)

形式

setenv DIOSA_DELAYED_SLMLOCKID ストリーム所在管理 DBMS ロック ID
--

説明

ストリーム所在管理機能にて使用する DBMS ロックのロック ID を指定する。
同一 Oracle インスタンスで複数の論理システムを動作させる場合、必ず指定する必要がある。

設定値の説明

ストリーム所在管理 DBMS ロック ID

DBMS ロック ID を 0 から 63 までの整数で指定する。
省略した場合は、0 が指定されたものとする。

注意

- 本環境変数は、デフォルト RGSET を含むインスタンスグループ配下の DB ノードで有効である。
- 同一論理システム内の DB ノードには必ず同一の値を指定する必要がある。

2. 4. 9 DIOSA_DTDMSGSIZE (ディレード転送最小送信電文長)

形式

setenv	DIOSA_DTDMSGSIZE	最小送信電文長
--------	------------------	---------

説明

センダが送信するログデータ電文の最小電文長(バイト)を指定する。

設定値の説明

最小送信電文長

ログデータ電文の最小電文長(バイト)の既定値を 1024 から 524288 までの整数で指定する。
省略した場合は、16384 が指定されたものとする。
本環境変数は、Java アプリケーションからのログデータ登録時にデータ分割サイズとして使用される。

2.5 データ変換・通信オプション

2.5.1 環境変数一覧

(1) TAM再配置機能

DIATC_MULTIPLE_NUMBER_HASH 1 プロセスで並列に行う処理の多重度を指定する。

(2) DBアクセス制御機能

DIATC_DATE_FORMAT TO_DATE 関数および TO_CHAR 関数で使用する日付書式を指定する。

DIATC_DATE_NLSPARAM TO_DATE 関数および TO_CHAR 関数で使用する NLS パラメータを指定する。

DIATC_DELETE_ROWNUM DB のレコード全件削除を行う際、一度の DELETE 文で削除するレコードの最大件数を指定する。

DIATC_RECORDCHK_ENABLE レコードサイズの矛盾チェック機能を有効にする。

DIATC_SQLLOG_NORECORD_CHECK Oracle 更新ログの反映処理で、更新ログ (UPDATE 文) が対象とするレコードがなかった場合の動作を指定する。

(3) データ同期制御機能

DIATC_CENTER_ID 拠点識別情報を設定する。

DIATC_EXTEND_LOG_SIZE ログデータ生成時の格納領域のメモリが不足した際に、追加で動的に確保する単位メモリサイズを指定する。

DIATC_INIT_LOG_SIZE ログデータ生成時に格納領域プロセスメモリの初期領域サイズを指定する。

DIATC_STREAM_PARTEXTIT ストリーム分割内通番決定利用者出口名を指定する。

DIATC_STREAM_PARTNUM MAPID 内をいくつのストリームに分割するか指定する。

(4) セーブロード機能

DIATC_MULTIPLE_NUMBER_SLU 1 プロセスで並列に行う処理の多重度を指定する。

2. 5. 2 DIATC_CENTER_ID (拠点識別情報)

形式

setenv DIATC_CENTER_ID {1|2} 拠点識別情報

説明

拠点識別情報を設定する。
本設定値により(スーパー)ストリーム名を決定する。

設定値の説明

- 1
- フロント-バックアップ構成の、初期フロント側システムまたはそのシステムの代替で動作する場合に設定する。
バックアップシステムがない場合にも 1 を指定すること。
- 2
- フロント-バックアップ構成の、初期バックアップシステムまたはそのシステムの代替で動作する場合に設定する。

注意

環境変数を設定しなかった場合、該当ノードでは更新ログの出力がおこなわれない。

2. 5. 3 DIATC_DATE_FORMAT (DB アクセス用日付書式)

形式

setenv DIATC_DATE_FORMAT 日付書式

説明

インメモリ DB アクセスユーティリティは、IM レコード上の日付文字列と DB レコード上の DATE 型の項目の相互変換に DB の TO_DATE 関数と TO_CHAR 関数を利用する。本環境変数を定義すると、TO_DATE 関数と TO_CHAR 関数の第 2 パラメータに本環境変数の値を指定する。

ただし、環境定義 DACENV 節-TABLE 項の DATEFORMAT パラメータで日付書式が定義されているテーブルについては、本環境変数の定義に依らず、環境定義の日付書式を TO_DATE 関数および TO_CHAR 関数に指定する。本環境変数が省略されている、かつ環境定義 DACENV 節-TABLE 項の DATEFORMAT パラメータが省略されている場合は、DB の仕様によって日付書式が決定される。

設定値の説明

DB の TO_DATE 関数および TO_CHAR 関数で使用する日付書式文字列を指定する。

注意

- 本環境変数または環境定義 DACENV 節-TABLE 項の DATEFORMAT パラメータで日付書式を指定しない場合は、DB の設定変更によってアプリケーションが扱う日付書式とインメモリ DB アクセスユーティリティが扱う日付書式が一致なくなると DB への非同期更新処理などが失敗する可能性がある。そのため、環境定義 DACENV 節-COLUMN 項の TYPE パラメータで"DATE"を設定する項目がある場合は、本環境変数または環境定義 DACENV 節-TABLE 項の DATEFORMAT パラメータで日付書式を指定することを推奨する。なお、環境定義 DACENV 節については、本リファレンス「第 II 編 環境定義」を参照のこと。

2. 5. 4 DIATC_DATE_NLSPARAM(DB アクセス用 NLS パラメータ)

形式

setenv DIATC_DATE_NLSPARAM NLS パラメータ

説明

インメモリ DB アクセスユーティリティは、IM レコード上の日付文字列と DB レコード上の DATE 型の項目の相互変換に DB の TO_DATE 関数と TO_CHAR 関数を利用する。本環境変数を定義すると、TO_DATE 関数と TO_CHAR 関数の第 3 パラメータに本環境変数の値を指定する。

ただし、環境定義 DACENV 節-TABLE 項の DATENLSPARAM パラメータで NLS パラメータが定義されているテーブルについては、本環境変数の定義に依らず、環境定義の NLS パラメータを TO_DATE 関数および TO_CHAR 関数に指定する。

本環境変数が省略されている、かつ環境定義 DACENV 節-TABLE 項の DATENLSPARAM パラメータが省略されている場合は、DB の仕様によって NLS パラメータが決定される。

設定値の説明

DB の TO_DATE 関数および TO_CHAR 関数で使用する NLS パラメータを指定する。

注意

- 本環境変数または環境定義 DACENV 節-TABLE 項の DATENLSPARAM パラメータで NLS パラメータを指定しない場合は、アプリケーションとインメモリ DB アクセスユーティリティの NLS パラメータの不一致により DB への非同期更新処理などが失敗する可能性がある。そのため、環境定義 DACENV 節-COLUMN 項の TYPE パラメータで“DATE”を設定する項目があり、日付書式に月名や曜日名や元号などを含む場合は、本環境変数または環境定義 DACENV 節-TABLE 項の DATENLSPARAM パラメータで NLS パラメータを指定することを推奨する。なお、環境定義 DACENV 節については、本リファレンス「第 II 編 環境定義」を参照のこと。

2. 5. 5 DIATC_DELETE_ROWNUM(全件削除時 DB レコード削除件数)

形式

setenv DIATC_DELETE_ROWNUM 最大削除件数

説明

DB から DELETE 文を用いたレコードの全件削除を行う際、一度の DELETE 文で削除するレコードの最大件数を指定する。

DELETE 文を用いた全件削除処理では、条件にハッシュ値範囲を指定することで削除対象 MAP に該当するレコードのみを全件削除する。ここで本環境変数が定義されていた場合は、設定値を用いて一度に削除する件数を制限した上で、削除対象のレコードが無くなるまで繰り返し DELETE 文を実行する。

本環境変数の省略時は、DELETE 文で一度に削除する件数を制限しない。

設定値の説明

最大削除件数

一度の DELETE 文で削除するレコードの最大件数を指定する。(数字 1～10,000,000)

注意

- 本環境変数は、環境定義 DACENV 節-TABLE 項の TRUNCATETYPE パラメータに DELETE を指定していた場合、または省略していた場合のみ有効となる。

2. 5. 6 DIATC_EXTEND_LOG_SIZE (ログデータ生成時拡張領域サイズ)

形式

setenv DIATC_EXTEND_LOG_SIZE 拡張領域サイズ

説明

ログデータ生成時の格納領域のメモリが不足した際に、このパラメータで示すメモリサイズ単位で動的にメモリ追加をおこなう。

設定値の説明

拡張領域サイズ

ログデータ格納用の拡張メモリ領域サイズを KB(キロバイト)単位の数値で指定する。
指定がない場合、1024 が指定されたものとする。

注意

- 本値が十分な領域サイズで設定されていない場合、領域の拡張処理が複数回実行され処理速度に影響を与える恐れがあるため、可能な限りの適切なサイズを検討すること。
- 指定できる上限値は 2, 097, 151KB であるが、ログデータ格納用メモリは DIOSA/XTP メモリ管理機能のスレッド内メモリで定義された範囲内で確保が可能となる。

関連

DIATC_INIT_LOG_SIZE

2.5.7 DIATC_INIT_LOG_SIZE (ログデータ生成時初期領域サイズ)

形式

<code>setenv DIATC_INIT_LOG_SIZE 初期領域サイズ</code>

説明

ログデータ生成時に格納領域とするプロセスメモリの初期領域サイズを指定する。

設定値の説明

初期領域サイズ

ログデータ格納用の初期メモリ領域サイズを KB(キロバイト)単位の数値で指定する。
指定がない場合、1024 が指定されたものとする。

注意

- 本値が十分な領域サイズで設定されていない場合、領域の拡張処理が複数回実行され処理速度に影響を与える恐れがあるため、可能な限りの適切なサイズを検討すること。
- 指定できる上限値は 2,097,151KB である。

関連

DIATC_EXTEND_LOG_SIZE

2. 5. 8 DIATC_RECORDCHK_ENABLE (レコードサイズチェック無効化)

形式

<code>setenv DIATC_RECORDCHK_ENABLE 0</code>
--

説明

ユーザアプリケーションが指定したレコードサイズと、環境定義 DACENV 節に定義した IM のレコード構造から求めたレコードサイズを比較して矛盾を検出する機能を無効にする。本機能は、API を呼び出してレコードの追加や更新を行う時や、IM から DB へのデータレプリケーション時にレコードサイズの矛盾を検出するとエラーを発生する。

具体的には、以下の 2 つの値を比較して矛盾を検出する。

- (1) ユーザアプリケーションが `diatcdbwrite`、`diatcdbrewrite`、`diatcdbdelete` 関数の呼び出し時にパラメータで指定した `t_diatc_recinfo` 構造体のメンバー `RecordSize` の値。
- (2) 更新対象のレコードに対する環境定義 DACENV 節の COLUMN 項の SIZE パラメータの値の合計。また、更新対象のレコードに可変長項目を含む場合は、`VARIABLE_SIZE` の項目に格納されている可変長項目の長さも加算する。

設定値の説明

本環境変数に “0” を設定すると本機能が無効になる。本環境変数に “0” 以外を設定した時や、本環境変数を省略した時は、本機能は有効となる。

注意

- 本機能が有効の場合、無効の場合と比較して処理性能に影響を与える恐れがある。

2.5.9 DIATC_SQLLOG_NORECORD_CHECK (Oracle 更新ログレコード有無チェック)

形式

```
setenv DIATC_SQLLOG_NORECORD_CHECK {OFF|ON}
```

説明

Oracle 更新ログの反映時に、更新ログ (UPDATE 文) が対象とするレコードが存在しない場合をエラーにするかを指定する。本環境変数は、Oracle 更新ログの反映処理をするログリーダーが動作するノードで設定する。

設定値の説明

OFF

対象レコードが無い場合でも正常終了する。本環境変数を省略した場合は OFF の扱いとなる。

ON

対象レコードが無い場合に、DADAC111 を出力し、該当スーパーストリームのログリーダーを処理停止する。

2. 5. 10 DIATC_STREAM_PARTEXTIT (ストリーム分割内通番決定利用者出口)

形式

<code>setenv DIATC_STREAM_PARTEXTIT</code> ストリーム分割内通番決定利用者出口
--

説明

同一の MAPID に対して、複数のストリームが割り当てられている場合に、何番目のストリームに更新ログを出力するかを決定するための出口関数名を 30 文字以内の英数字で指定する。

注意

- 更新ログが出力されるストリームは、MAPID と利用者出口から返却されたストリーム分割内通番の値から命名規則で決定する。
- 指定がない場合、関数は呼び出さず環境変数 (DIATC_STREAM_PARTNUM) の値に従ってストリーム分割内通番を決定する。

関連

ストリーム分割内通番決定利用者出口、DIATC_STREAM_PARTNUM

2. 5. 11 DIATC_STREAM_PARTNUM (MAP 内ストリーム分割数)

形式

setenv DIATC_STREAM_PARTNUM MAP 内ストリーム分割数指定

説明

MAPID に対して、いくつのストリームを割り当てるかを指定する。
指定は、MAPID:分割数[, MAPID:分割数]... の形式で指定する。分割数には 0～100 までを指定可能である。
MAPID は“xxx-xxx”の形式で範囲指定も可能とする。
MAPID に“*”を指定した場合、指定のなかった MAPID 全てが該当する。
[例]
“1:3, 2:5, 3:10” MAPID=1 は 3 分割、MAPID=2 は 5 分割、MAPID=3 は 10 分割する。
上記以外の MAPID は 1 分割する。
“500:1, *:10” MAPID=500 は 1 分割、それ以外の MAPID は 10 分割する。
“1-100:10, 200:1, *:5” MAPID=1～100 は 10 分割、MAPID=200 は 1 分割、それ以外の MAPID は 5 分割する。
“*:5” 全ての MAPID を 5 分割する。

分割数とハッシュ値から分割通番を求め、更新ログ出力先のストリーム名は以下のように決定される。
[分割数が 1～100] TAM{MAPID(0 埋め 7 桁)}_{分割通番(0 埋め 2 桁)}_{拠点識別情報}
[分割数が 0] TAM{MAPID(0 埋め 10 桁)}_{拠点識別情報}

注意

- *が指定されず、該当する MAPID が見つからなかった場合、分割数に 1 が指定されたものとする。
- 環境変数(DIATC_STREAM_PARTEXTIT)が指定された場合、分割数は出口関数によって決定され、本環境変数の値は無視される。
- 環境変数の指定がない場合、分割数に 0 が指定されたものとする。

2. 5. 12 DIATC_MULTIPLE_NUMBER_HASH (TAM 再配置処理多重度)

形式

setenv DIATC_MULTIPLE_NUMBER_HASH 処理多重度

説明

ハッシュ値更新コマンドで 1 プロセスで並列に処理を行うハッシュ値更新処理の多重度を指定する。ハッシュ値更新の対象が本値より多い場合、対象を複数プロセスに割り当てハッシュ値更新処理を行う。省略した場合は 1 プロセスあたり 48 の多重度で処理する。

設定値の説明

処理多重度

ハッシュ値更新コマンドで 1 プロセスで並列に処理を行うハッシュ値更新処理の多重度を指定する。(数字 1～128)

注意

- 1 プロセスで作成可能なスレッド数の上限に達した場合、スレッドの作成ができずコマンドが失敗する。この場合は本値を小さくする。

2. 5. 13 DIATC_MULTIPLE_NUMBER_SLU(セーブロード処理多重度)

形式

setenv DIATC_MULTIPLE_NUMBER_SLU 処理多重度
--

説明

セーブロード機能の TAM セーブコマンド、TAM ロードコマンドで 1 プロセスで並列に行う処理の多重度を指定する。並列処理の対象が本値より多い場合、対象を複数プロセスに割り当て処理を行う。省略した場合は 1 プロセスあたり 48 の多重度で処理する。

設定値の説明

処理多重度

セーブロード機能の TAM セーブコマンド、TAM ロードコマンドで 1 プロセスで並列に行う処理の多重度を指定する。(数字 1～128)

注意

- 1 プロセスで作成可能なスレッド数の上限に達した場合、スレッドの作成ができずコマンドが失敗する。この場合は本値を小さくする。

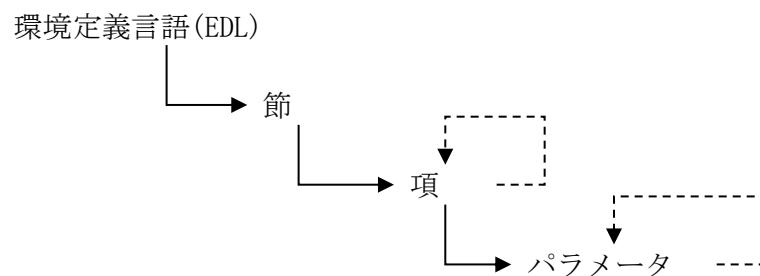
第II編 環境定義

第1章 環境定義言語の構成と記述方法

1.1 定義言語の構成

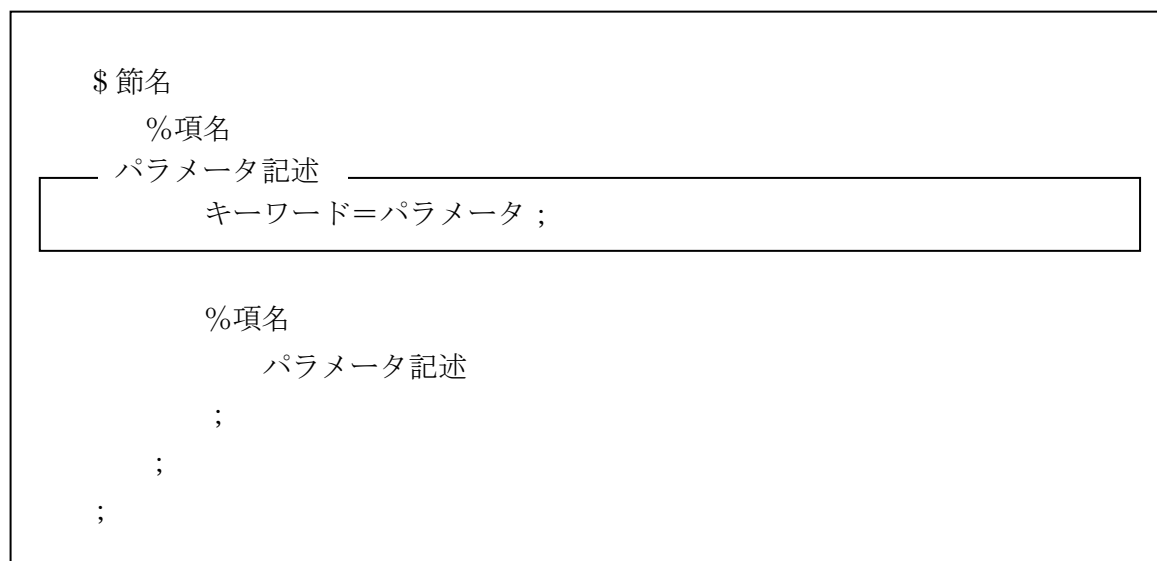
DIOSA/XTP の提供する環境定義言語(EDL:Environment Definition Language)は、DIOSA/XTP の導入にあたって、各機能の動作環境・動作条件を定義するための言語である。この項では、EDL の概要を述べ、「2. 環境定義」で詳細を説明する。

環境定義言語(EDL)は、次のように、節、項、パラメータからなる3階層の構成を持つ。



環境定義言語には、機能ごとの定義である節が複数種存在する。各節は最小の翻訳単位として基本的には独立であり、内部は複数の項から構成される。項は、直接の定義を行うパラメータから構成されるが、項の種類によっては下位の項を持つといった、項どうしの階層が存在する。同様に特定のパラメータでは、下位パラメータを含む形式のものがある。

記述形式の概要を以下に示す。



(1) 節(セクション)

節は、DIOSA/XTP の1つの機能(範囲)に関する定義のかたまりで、EDL の翻訳の最小単位である。節の翻訳時には、節を記述したテキスト形式のファイル(EDL ソースファイル)を指定する必要がある。

(a) 節の形式

\$ 節名 節内容記述 ;

- ・ \$ と節名の間には、空白等の何らかの文字列を置いてはならない
- ・ 節名は、英数字からなる12文字以内の文字列である
- ・ 節内容記述は、何種類かの項およびその繰り返しである

(2) 項

項は、機能環境の定義中に現れる論理的な構成要素、概念、集まりに対応して設定されるもので、構成要素や概念等に階層関係があるように、項どうしても階層関係をもつものがある。構成要素、概念等の識別名や属性は、直属のパラメータあるいは、下位の項を用いて記述される。

(a) 項の形式

%項名 項内容記述 ；

- ・ %と項名の間には、空白等の何らかの文字列を置いてはならない
- ・ 項名は、英数字からなる 12 文字以内の文字列である
- ・ 項内容記述は、何種類かのパラメータおよび下位の項とそれらの繰り返しである

(3) パラメータ

パラメータは、機能環境に関する直接的な定義を行うものである。形式に示すようにパラメータはすべてキーワード形式であり、右辺のパラメータ値によって名前、値、選択等、具体的な指定を行う。

複数のパラメータを指定する場合は、‘，’で区切って指定する。

(a) パラメータの形式

キーワード = パラメータ値

- ・ キーワードは、英数字および“_”からなる 12 文字以内の文字列である

(b) 選択形式

いくつかの固定の文字列から、1つを選択して指定する。

(c) 英数字

英数字と、利用者指定可能文字からなる文字列を指定する。

(d) 10 進数値

数字と、ハイフン(負の値を指定する場合)からなる 10 進整数値を指定する。

(e) 8 進数値

0～7 までの数字で指定する。

(f) 全ての文字

パラメータ値を、二重引用符” ”で囲んだ文字列で指定する。 ” ”を除いたすべての文字を指定することができる。

(4) コメント

コメントは、利用者が定義の意味等を記述しておくためのもので直接定義には反映されない。形式に示すように“/*”と“*/”とに囲まれた文字列がコメントとなる。コメントは、次の文字列中を除く任意の位置に指定でき、複数行にわたっても良い。

(5) 構成文字と記述規則

環境定義言語を構成する文字は、英大文字、数字、特殊文字で、いずれも 1 バイト系の文字である。

(a) 構文用特殊文字

次の特殊文字(列)は、環境定義言語の構成上固有の意味を持つ。

\$	… 節の開始
%	… 項の開始
;	… 節または項の終了
=	… キーワードとパラメータ値の区切り

”	… テキスト型パラメータの開始・終了
,	… パラメータ/パラメータ値どうしの区切り
空白	… パラメータ/パラメータ値どうしの区切り
/*	… コメントの開始
*/	… コメントの終了

(b) 空白の書ける箇所

構文用特殊文字の前後には、任意個の空白文字を記述できる。ただし、“\$”および“%”の直後には空白を記述できない。この場合以外で空白を記述できるのは、テキスト型パラメータ値およびコメント文中に限定される。

(c) 改行可能な箇所

空白文字が記述できる箇所で改行可能である。すなわち“\$”と“%”の直後、節名、項名、キーワード、パラメータ値の途中で改行することはできない。空白記述できる箇所以外で改行できるのは、テキスト型パラメータ値およびコメント文中に限定される。

(d) 利用者指定可能文字

パラメータ値の部分では、英大文字、数字に加えて、次の特殊文字(1 バイト文字に限る)のみ利用することができる。テキスト型パラメータ値の中では、“”を除いて全ての文字を利用できる。コメント文中では、“/*”および“*/”を除き、全ての文字が利用できる。

—	… 下線(アンダーバー)
—	… ハイフン
.	… ピリオド(ドット)
*	… アスタリスク
/	… スラッシュ
&	… アンパーサント

1.2 定義言語の記述方法

各環境定義の詳細は「2 章 環境定義」で説明する。ここではこの説明の記述方法・形式について述べる。

(1) 説明の形式(節の説明)

形式

この節の構成、つまり節を構成する項とその記述順・繰り返し・包含関係について形式記法(構文表記法)を用いて説明する。最下位の項まで全ての項を示し、パラメータが書ける部分は「パラメータ記述」で示す。なお、節・項の包含関係を見やすくするため、字下げ(インデント)による対応付けが行われている。

説明

この節の機能、つまり定義の意味や何をどのように定義するかを概説する。

項の説明

形式で示した各項の意味を概説し、省略や繰り返し等の節内での記述規則について説明する。

(2) 説明の形式(項の説明)

形式

この項の構成、つまり項を構成するパラメータとその記述順・繰り返し等について形式記法(構文表記法)を用いて説明する。下位の項を含む場合は、直属の項のみを示す。

説明

この項の機能、つまり定義の意味や何をどのように定義するかを概説する。

パラメータの説明

形式で示したパラメータごとに、その意味を概説し、省略や繰り返し等の項内での記述規則およびパラメータ値の記述規則について説明する。

(3) 構文表記法

(a) 構成要素

構文表記文字

次の文字は構文の記述方法を指示するための文字で、構文の記述時にこれらの文字を指定するわけではない。文字の意味については「表記法」で説明する。

—例 [] { } | •

空白

構文を読みやすくするために空白を用いることがある。必ずしも空白が指定できることを意味しない。空白が記述できる箇所については「1.1 定義言語の構成」で確認されたい。

日本語を含む語

その語が示す適切な文字列に置き換えて指定する。基本的にパラメータ値の名前として用いる。

—例 NODENAME = ノード名

その他の文字・文字列

上記以外の文字・文字列については、構文の記述時にそのままの文字・文字列をしてする。

(b) 表記法

省略の表現

[]でくくられた文字列は省略することができる。

—例 [TIMEOUT = コマンド応答タイムアウト値]

選択の表現

{ }で囲まれた複数の指定要素のうち、1つを選んで指定するための表現である。各指定要素は、|で区切り、1行に列挙されている。

—例 INITSTS = { ACT | BLK }

既定値の表現

[]でくくられたなかに選択表現がある場合、下線付きの指定要素は省略時の既定値である。

—例 [INITSTS = { ACT | BLK }]

繰り返しの表現

繰り返しは、”...”で表現する。直前の [] または { } 部を必要なだけ繰り返し指定することができる。

[~]...は、繰り返し可能であるとともに、~部分を省略できることを示している。

{~}...は、繰り返し可能であるとともに、~部分が省略できないことを示している。

—例 [%ITEM

パラメータ記述

;]...

{%NODE

パラメータ記述

;}...

[KEY = 収集データキー値]...

{ NODENAME = ノード名 }...

第2章 環境定義

2.1 APENV(アプリケーション共通情報管理機能)

2.1.1 APENV 節

形式

```
$APENV
  [%ITEM
    パラメータ記述
  ;] ...
  [%TBLENT
    パラメータ記述
    [%TABLE
      パラメータ記述
    ;] ...
  ;] ...;
```

説明

アプリケーション共通情報機能に関する定義を行う。(論理ノード単位、省略可)

項の説明

ITEM 項

アイテム型共通情報の定義を行う。(省略可、最大 1024 個)

TBLENT 項

テーブル型エントリ情報の定義を行う。(省略可、最大 64 個)

TABLE 項

テーブル型共通情報の定義を行う。(省略可、最大 256 個)

2. 1. 2 ITEM 項

形式

%ITEM
 ID = アイテム識別子
 [, VALUE = アイテム値]
;

説明

アイテム型 AP 共通情報の定義を行う。

パラメータの説明

ID

アイテム識別子を指定する。(英数字:1～16 文字、必須)
なお、本識別子は APENV 節内で一意とする。

VALUE

アイテム値を指定する。(英数字：1～256 文字、省略可)
省略した場合、アイテム型 AP 共通情報取得 API (diosaapegetitem()) のアイテム値格納領域に NULL 文字を返却する。

2. 1. 3 TBLENT 項

形式

```
%TBLENT  
    ENTNUM    = エントリ番号  
;  

```

説明

テーブル型 AP 共通情報のエントリの定義を行う。

パラメータの説明

ENTNUM

エントリ番号を指定する。(数字：1～64、必須)
なお、本エントリ番号は APENV 節内で一意とする。

2. 1. 4 TABLE 項

形式

```
%TABLE
    ID      = テーブル識別子
    [, FILE  = ファイルパス名]
;
```

説明

テーブル型 AP 共通情報の定義を行う。

パラメータの説明

ID

テーブル識別子を指定する。（英数字：1～16 文字、必須）
なお、本識別子は TBLENT 項内で一意とする。

FILE

ファイル名をフルパスで指定する。（英数字：1～300 文字、省略可）
本パラメータを省略、またはファイルが存在しない場合、テーブル型 AP 共通情報取得 API(diosaapegettbl())のテーブル領域ポインタに NULL を返却する。

2.2 APLIB(アプリケーション動的置換機能)

2.2.1 APLIB 節

形式

```
$APLIB
  [%DFLTLLIB
    パラメータ記述
  ;]
  [%LLIB
    パラメータ記述
    {%LIBRARY
      パラメータ記述
      {%FUNC
        パラメータ記述
      ;} ...
    ;}
  ;] ...
  [%LM
    パラメータ記述
  ;] ...
;
```

説明

アプリケーション動的置換機能に関する定義を行う。(論理ノード単位、省略可)

項の説明

DFLTLLIB 項

全ての LM に対してリンクする論理ライブラリ名を定義する。(最大 1 個、省略可)
LM 項に定義していない LM に対しても有効である。
省略した場合は、LM 項で指定した LM でのみライブラリがリンクされる。

LLIB 項

論理ライブラリに関する情報を定義する。(最大 32767 個、省略可)
DFLTLLIB 項、LLIB 項で指定する論理ライブラリが無い場合のみ省略可能。

LIBRARY 項

ライブラリに関する情報を定義する。
(ノード全体最大 65535 個、LLIB 項を指定した場合は必須)

FUNC 項

関数に関する情報を定義する。(ライブラリ配下最大 512 個、ノード全体最大 262143、必須)

LM 項

LM に関する情報を定義する。(最大 32767 個、省略可)
省略した場合 DFLTLLIB 項で指定されたライブラリのみがリンクされる。
LM 項、DFLTLLIB 項ともに省略された場合はライブラリのリンクは行われない。

2. 2. 2 DFLTLLIB 項

形式

```
%DFLTLLIB
    [ LLIBNAME = 論理ライブラリ名 ] ...
    [, LOADMODE = {YES|NO} ]
;
```

説明

すべての LM に対してリンクする論理ライブラリの定義を行う。
LM 項に定義していない LM に対しても本定義は有効となる。

パラメータの説明

LLIBNAME

論理ライブラリ名を定義する。(最大:512 個、英数字:1～30 文字、省略可)
省略した場合、リンクする論理ライブラリの定義を行わない。

LOADMODE

共有ライブラリのロード時にシンボル参照解決をするかどうか定義する(省略可)。
YES:シンボル参照解決を行う。
NO :シンボル参照解決を行わない。
省略した場合、“NO”が設定される。

2. 2. 3 LLIB 項

形式

```
%LLIB
    LLIBNAME  = 論理ライブラリ名
    [, LIBDIR  = 共有ライブラリ格納ディレクトリ]
    [, LOAD    = {INIT|DEFERRED}]
    [, UNLOAD  = {NO|TRNS}]
;
```

説明

論理ライブラリに関する情報定義を行う。

パラメータの説明

LLIBNAME

論理ライブラリ名定義する。(英数字：1～30 文字、必須)

LIBDIR

共有ライブラリの格納ディレクトリを定義する。(英数字：1～250 文字、省略可)

省略した場合、共有ライブラリ格納ディレクトリは設定されない。

定義を省略し、かつ配下の LIBRARY 項の LIBNAME パラメータが"/"を含まない場合、そのライブラリは自動置換対象となる。

LOAD

共有ライブラリをロードするタイミングを指定する。(省略可)

省略した場合、INIT となる。

パラメータ	説明
INIT	プロセス起動時にロードされる
DEFERRED	最初の呼び出し時にロードされる

UNLOAD

共有ライブラリをアンロードするタイミングを指定する。(省略可)

省略した場合、NO となる。

パラメータ	説明
NO	ロードしたライブラリはアンロードしない
TRNS	トランザクション終了時にアンロードする

注意事項

- ロードタイミングを INIT、アンロードタイミングを TRNS とした場合、プロセス開始処理終了時にライブラリはアンロードされ、次にそのライブラリの関数が呼び出されるまでロードされない。(それ以降は DEFERRED を指定した場合と同じ動作となる。)

2. 2. 4 LIBRARY 項

形式

```
%LIBRARY  
    LIBNAME  = 共有ライブラリ名  
;
```

説明

共有ライブラリに関する情報定義を行う。

パラメータの説明

LIBNAME

アプリケーションサービスを格納する共有ライブラリ名を定義する。(英数字:1～64 文字、必須)

2. 2. 5 FUNC 項

形式

```
%FUNC  
    FUNCNAME  = 関数名  
    ;
```

説明

関数に関する情報定義を行う。

パラメータの説明

FUNCNAME

関数名を定義する。(英数字:1～30 文字、必須)

2.2.6 LM 項

形式

%LM
{, LMNAME = LM 名}...
[, LOADMODE = {YES NO}]
[, LLIBNAME = 論理ライブラリ名]...
;

説明

サーバやバッチジョブなどの LM に関する情報定義を行う。

パラメータの説明

LMNAME

LM 名を定義する。(最大 1024 個、英数字：1～30 文字、必須)
シンボリックリンクを作成して LM を実行する場合、リンク先ではなく、作成したシンボリックリンクの名前を LM 名として定義する必要があります。

LOADMODE

共有ライブラリのロード時にシンボル参照解決をするかどうか定義する。(省略可)

パラメータ	説明
YES	シンボル参照解決を行う
NO	シンボル参照解決を行わない

省略した場合、DFLTLLIB 項の LOADMODE の値が取られる。

LLIBNAME

論理ライブラリ名を定義する。(最大:5120 個、英数字:1～30 文字、省略可)

2.3 APMGRNT (電文保証機能)

2.3.1 APMGRNT 節

形式

```
[$APMGRNT
  [%MSGGNT
    パラメータ記述
  ;]
  [%OVERSEND
    パラメータ記述
  ;]
;]
```

説明

電文保証機能に関する定義を行う。(論理ノード単位、省略可)
省略した場合、既定値情報で動作する。

項の説明

MSGGNT 項

電文保証機能の動作パラメータを設定する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合は、MSGGNT 項の各パラメータの既定値に従って動作する。

OVERSEND 項

再送処理がリトライオーバー(最大再送回数を超過)した際の通知先 CO を指定する。
(最大 1 個、省略可)
省略した場合は、リトライオーバー発生時に CO が呼び出されない。

2.3.2 MSGGNT 項

形式

%MSGGNT		
[RSNDINVL	=	保証電文再送間隔]
[SENDMAX	=	最大送信回数]
[RSNDCHKINVL	=	電文再送処理実行間隔]
[DELCHKINVL	=	受信電文管理情報の削除処理実行間隔]
[RGNTTIME	=	受信電文管理情報の保存期間]
[SEQDELTIME	=	順序性保証グループ情報保持期間]
[INITEXIT	=	電文保証 TPP プロセス初期化出口関数名]
[TERMEXIT	=	電文保証 TPP プロセス終了出口関数名]
[JUDGEEXIT	=	保証電文送信有無判定出口関数名]
;		

説明

電文保証機能の動作パラメータを定義する。

パラメータの説明

RSNDINVL

保証電文の再送間隔を指定する。(最大 1 個、省略可)
単位は秒とし、1 秒～9999 秒を指定することができる。省略時は 60 秒となる。

SENDMAX

電文の最大送信回数を指定する。(最大 1 個、省略可)
指定可能な値は 1～524287 とし、省略時は 10 となる。
電文送信 API(diosasendtx)での送信が 1 回目の送信としてカウントされる。

RSNDCHKINVL

電文再送処理を実行する間隔を指定する。(最大 1 個、省略可)
単位は秒とし、1 秒～9999 秒を指定することができる。省略時は 60 秒となる。

DELCHKINVL

保存時間を超過した受信電文管理情報の削除処理を実行する間隔を指定する。(最大 1 個、省略可)
単位は分とし、1 分～120 分を指定することができる。省略時は 5 分となる。

RGNTTIME

受信電文管理情報の保存時間を指定する。(最大 1 個、省略可)
単位は分とし、1 分～14400 分(240 時間)を指定することができる。省略時は 30 分となる。
送信元の再送処理がリトライオーバーするまでに掛かる時間を超える値を設定すること。

SEQDELTIME

全ての保証電文送信が完了した順序性保証グループの情報を保持する時間を指定する。(最大 1 個、省略可)
単位は分とし、1 分～2147483647 分を指定することができる。省略時は 60 分となる。
削除されても順序性保証の動作に影響はない。短時間で不要となる順序性保証グループが大量に生成され

るシステムなどでは、この値を小さくすることで不要なレコードを早期に削除することが可能となる。

INITEXIT

電文保証 TPP プロセス初期化出口の関数名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
省略時は本出口の呼び出しは行われない。

TERMEXIT

電文保証 TPP プロセス終了出口の関数名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
省略時は本出口の呼び出しは行われない。

JUDGEEXIT

保証電文送信有無判定出口の関数名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
省略時は本出口の呼び出しは行われない。

2. 3. 3 OVERSEND 項

形式

```
%OVERSEND
    OVERCONAME = リトライオーバー時呼び出し CO 名
    OVERTXID   = リトライオーバー時送信先トランザクション ID
;
```

説明

再送処理がリトライオーバーした際の通知先を定義する。
定義する場合は全てのパラメータを定義する必要がある。
定義が不要な場合は項自体を省略可能。その場合、リトライオーバー発生時に CO が呼び出されない。

パラメータの説明

OVERCONAME

リトライオーバー発生時、該当電文を処理する CO 名を指定する (最大 1 個、英数字 : 1~30 文字、必須)。

OVERTXID

リトライオーバー発生時、該当電文を送信するトランザクション ID を指定する (最大 1 個、英数字 : 1~6 文字、必須)。

2. 4 CMDSEND (コマンド配信機能)

2. 4. 1 CMDSEND 節

形式

<pre>\$CMDSEND [%CMDSENDINFO パラメータ記述 [%ENV パラメータ記述 ;]... [%LNODECMD パラメータ記述 [%ENV パラメータ記述 ;]... ;]... ;] [%SRVGRPINFO %SRVGRP パラメータ記述 %LNODESRV パラメータ記述 ;... ;... ;] [%CMDROUTING %CMDRT パラメータ記述 ;... ;] [%CMDPERM パラメータ記述 %CMDGRP パラメータ記述 %CMDTEXT パラメータ記述 ;... ;... %EXPERM パラメータ記述 %CMD パラメータ記述 ;... ;... ;] ;</pre>

説明

コマンド配信コマンドの動作環境を定義する。(論理ノード単位、省略可)
省略した場合、既定値情報で動作する。

項の説明

CMDSENDINFO 項

コマンド配信に必要な情報を定義する。(最大 1 個、省略可)

ENV 項

環境変数を定義する。(CMDSENDINFO 項内または LNODECMD 項内で最大 1024 個、省略可)

LNODECMD 項

論理ノードに関する情報を定義する。(CMDSENDINFO 項内で最大 256 個、省略可)

SRVGRPINFO 項

サーバグループに関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)

SRVGRP 項

サーバグループの詳細を定義する。(SRVGRPINFO 項内で最大 1024 個、必須)

LNODESRV 項

論理ノードに関する情報を定義する。(SRVGRP 項内で最大 256 個、必須)

CMDROUTING 項

コマンドルーティングに関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)

CMDRT 項

コマンドルーティングの詳細を定義する。(CMDROUTING 項内で最大 4096 個、必須)

CMDPERM 項

コマンド実行権限に関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)

CMDGRP 項

コマンドグループの詳細を定義する。(CMDPERM 項内で最大 1024 個、必須)

CMDTEXT 項

コマンドテキストを定義する。(CMDGRP 項内で最大 1024 個、必須)

EXPERM 項

コマンド実行権限に関する詳細を定義する。(CMDPERM 項内で最大 1024 個、必須)

CMD 項

コマンドグループ名を定義する。(EXPERM 項内で最大 1024 個、必須)

2. 4. 2 CMDSENDINFO 項

形式

%CMDSENDINFO	
[TMPDIR	= コマンド実行結果一時格納ディレクトリ名]
[, APITIMEOUT	= コマンド配信応答待ち合わせ時間]
[, EXECTIMEOUT	= コマンド実行応答待ち合わせ時間]
[, RTRYCNT	= リトライ回数]
[, RTRYINTVL	= リトライインターバル]
[, HSTTYPE	= { ALL REQ EXE STA ERR <u>NO</u> }]
[, HSTFLNAME	= 履歴ファイル名(絶対パス)]
[, HSTFLMAXCNT	= 履歴ファイル最大数]
[, HSTFLMAXSIZE	= 履歴ファイル最大サイズ]
[, SNDMULTCNT	= 同時受付要求数最大値]
[, SNDMULTINTVL	= 同時受付遅延間隔]
[, SNDNODECNT	= 一括配信多重度制限]
[, BLOCKCHK	= { <u>YES</u> NO }]
;	

説明

コマンド配信に必要な情報を定義する。

パラメータの説明

TMPDIR

コマンド実行結果を一時的に格納する際に使用するディレクトリ名を指定する。(文字列:1～127バイト、省略可)
省略された場合、DIOSA/XTP の作業用ディレクトリが設定される。
環境変数 DIOSA_CDDTMPDIR が設定されている場合は、そちらの値が優先される。

APITIMEOUT

コマンド配信 API(あるいはコマンド)の、コマンド配信応答待ち合わせ時間を指定する。(単位：秒、数値：1～3600、省略可)
省略した場合、40 秒が設定される。
環境変数 DIOSA_CDDAPITIMEOUT が設定されている場合は、そちらの値が優先される。

EXECTIMEOUT

コマンド配信を実行した際のノード間の応答待ち合わせ時間を指定する。(単位：秒、数値：1～3600、省略可)
省略した場合、30 秒が設定される。
環境変数 DIOSA_CDDEXECTIMEOUT が設定されている場合は、そちらの値が優先される。

RTRYCNT

接続リトライ回数を指定する。(数値：0～100、省略可)
0 を指定した場合、リトライしない。
省略した場合、0 が設定される。
環境変数 DIOSA_CDDRTRYCNT が設定されている場合は、そちらの値が優先される。

RTRYINTVL

接続リトライ処理の待合せ時間を指定する。(単位：秒、数値：1～3600、省略可)
省略した場合、30 が設定される。
環境変数 DIOSA_CDDRTRYINTVL が設定されている場合は、そちらの値が優先される。

HSTTYPE

コマンド配信履歴の採取方法を指定する。(省略可)

省略した場合、NO とする。

パラメータ	説明
ALL	全情報を採取する
REQ	配信要求のみを採取する
EXE	実行要求のみを採取する
STA	配信結果のみを採取する
ERR	配信結果のうちエラー情報を採取する
NO	採取しない

HSTFLNAME

コマンド配信履歴ファイル名を絶対パスで指定する。(1～255 バイト、省略可)

実際には、「指定された絶対パスファイル名_ノード名. ファイル番号」というファイルが作成される。

省略した場合、コマンド配信履歴は採取しない。

HSTFLMAXCNT

コマンド配信履歴ファイルの最大数を指定する。(数値：2～7、省略可)

省略した場合、2 が設定される。

HSTFLMAXSIZE

コマンド配信履歴ファイルの最大ファイルサイズを指定する。(数値：1～2048、単位 MB、省略可)

省略した場合、1(1MB)が設定される。

SNDMULTCNT

同時受付可能なコマンド配信要求数を指定する。(数値：0～512、省略可)

0 を設定した場合、制限無しとする。

省略した場合、0 が設定される。

SNDMULTINTVL

受け付けたコマンド配信要求数が SENDMULCNT に達した際に、遅延させる間隔を指定する。(単位：秒、数値：1～3600、省略可)

省略した場合、1 が設定される。

SNDNODECNT

一回のコマンド配信要求で同時に配信できるノード数を指定する。(数値：0～512、省略可)

0 を設定した場合、制限無しとする。

省略した場合、0 が設定される。

設定数を超えた場合は、設定数まで同時に配信し、残りの要求は配信中の処理が完了次第配信される。

BLOCKCHK

コマンド配信時に閉塞状態チェックを行うか否かを指定する。(省略可)

省略した場合、YES とする。

パラメータ	説明
YES	チェックを行う
NO	チェックを行わない

2. 4. 3 ENV 項

形式

%ENV		
NAME	=	環境変数名
, VALUE	=	“設定する値”
;		

説明

環境変数を定義する。

パラメータの説明

NAME

環境変数名を設定する。(英数字 : 1～31 バイト、必須)
CMDSENDINFO 項で指定された場合は CMDSENDINFO 項内ユニーク、また LNODECMD 項内で指定された場合は LNODECMD 項内ユニークとする。
環境変数名に PATH を指定した場合、現在の環境変数 PATH の先頭に設定値 (VALUE) が追加される。

VALUE

環境変数に設定する値をダブルクォーテーションで囲って設定する。(任意文字列 : 1～255 バイト、必須)

2. 4. 4 LNODECMD 項

形式

```
%LNODECMD
    NAME          = 論理ノード名
;

```

説明

ノード情報の定義を行う。

パラメータの説明

NAME
論理ノード名を指定する。(英数字：1～15 バイト、必須)
CMDSENDINFO 項内ユニークとする。

2. 4. 5 SRVGRP 項

形式

%SRVGRP
NAME = サーバグループ名
;

説明

サーバグループの詳細を定義する。

パラメータの説明

- NAME
- サーバグループ名を指定する。(英数字：1～15 バイト、必須)
- サーバグループ名は SRVGRPINFO 項内でユニークであること。

2. 4. 6 LNODESRV 項

形式

%LNODESRV
NAME = 論理ノード名
;

説明

ノード情報の定義を行う。

パラメータの説明

- NAME
- 論理ノード名を指定する。(英数字：1～15 バイト、必須)
- 論理ノード名は SRVGRP 項内でユニークであること。

2. 4. 7 CMDRT 項

形式

%CMDRT	
NAME	= "コマンド名"
[, DSTNAME	= 配信宛先名]
[, LSTYPE	= { <u>ALL</u> AP OLTP DB }]
[, TARGET	= { <u>ALL</u> ANY }]
[, SELF	= { <u>YES</u> NO }]
[, REGEXP	= { YES <u>NO</u> }]
;	

説明

コマンドルーティングの詳細を定義する。

パラメータの説明

NAME

コマンド名をダブルクォーテーションで囲って指定する。(任意文字列：1～63 バイト、必須)
正規表現での登録を可能とする。ただし、コマンド名内でダブルクォーテーション(")はエスケープできない。
コマンド名は、CMDROUTING 項内でユニークであること。

DSTNAME

配信宛先名を指定する。論理ノード名、論理システム名、サーバグループ名での指定が可能である。(英数字：1～15 バイト、省略可)
省略した時、LSTYPE を指定した場合は自論理システムに、LSTYPE を省略した場合は自ノードに配信する。

LSTYPE

配信宛先名に論理システム名を指定した場合、配信対象として論理システム配下のノード属性を指定することができる。(省略可)
省略した場合、ALL とする。

パラメータ	説明
ALL	指定論理システム内の全ノードを配信対象とする
AP	指定論理システム内の AP サーバ属性の全ノードを配信対象とする
OLTP	指定論理システム内の OLTP サーバ属性の全ノードを配信対象とする
DB	指定論理システム内の DB サーバ属性の全ノードを配信対象とする

TARGET

複数ノードへの配信の場合、配信対象を指定することができる。(省略可)
省略した場合、ALL とする。

パラメータ	説明
ALL	指定した配信先のうち、全ノードを対象
ANY	指定した配信先のうち、任意の 1 ノードを対象

SELF

複数ノードへの配信で配信元も配信対象に含まれる場合、配信元を配信対象に含めるか否かを指定する。(省略可)
省略した場合、YES とする。

配信宛先名に論理ノード名を指定した場合、あるいは配信元が配信対象に含まれない場合、この値は無視される。

パラメータ	説明
YES	配信元も配信対象に含める
NO	配信元は配信対象に含めない

REGEXP

指定したコマンド名が、正規表現か否かを指定する。（省略可）
省略した場合、NO とする。

パラメータ	説明
YES	正規表現である
NO	正規表現でない

2. 4. 8 CMDPERM 項

形式

```
%CMDPERM
    [DFLTPERM = { EXEC | NOEXEC }]
;
```

説明

コマンド実行権限に関する情報を定義する。
本項を省略した場合、全てのコマンドに対して実行可能とする。

パラメータの説明

DFLTPERM

EXPERM 項に未登録のコマンドが指定された場合の実行可否を指定する。（省略可）
省略した場合、NOEXEC とする。

パラメータ	説明
EXEC	実行可能とする
NOEXEC	実行不可とする

2. 4. 9 CMDGRP 項

形式

```
%CMDGRP
    NAME      = コマンドグループ名
;

```

説明

コマンドグループの詳細を定義する。

パラメータの説明

- NAME
- コマンドグループ名を指定する。(英数字：1～31 バイト、必須)

コマンドグループ名は CMDPERM 項内でユニークであること。

2. 4. 10 CMDTEXT 項

形式

```
%CMDTEXT  
    TEXT      = コマンド名  
;
```

説明

コマンドテキストを定義する。

パラメータの説明

TEXT

コマンド名を指定する。(英数字 : 1～63 バイト、必須)
正規表現での登録は不可とする。
コマンド名は、CMDGRP 項内でユニークであること。

2. 4. 11 EXPERM 項

形式

%EXPERM	
[USERTYPE	= { <u>USER</u> USERGRP}]
,NAME	= {ユーザ名 ユーザグループ名}
[,PERMISSION	= { <u>EXEC</u> NOEXEC}]
;	

説明

コマンド実行権限に関する詳細を定義する。

USERTYPE、NAME、PAERMISSION の組み合わせは、CMDPERM 項内ユニークとする。

同じユーザ、コマンドについて、実行許可、実行不可の同時定義はできない。

未登録のコマンドを実行した場合、CMDPERM 項の DFLTPERM に従う。

パラメータの説明

USERTYPE

実行権付与対象ユーザの指定方法を指定する。(省略可)

省略した場合、USER とする。

パラメータ	説明
USER	ユーザ名指定
USERGRP	ユーザグループ名指定

NAME

実行権付与対象ユーザ名、または対象ユーザグループ名を指定する。(英数字：1～31 バイト、必須)

ユーザ名、ユーザグループ名には、システムに登録された値を指定すること。

PERMISSION

実行権の有無を指定する。(省略可)

省略した場合、EXEC とする。

パラメータ	説明
EXEC	実行を許可する
NOEXEC	実行を許可しない

2. 4. 12 CMD 項

形式

```
%CMD
    CMDGRP      = コマンドグループ名
;

```

説明

コマンドグループ名を定義する。

パラメータの説明

CMDGRP

実行権を与えるコマンドグループ名を指定する。(英数字：1～31 バイト、必須)
コマンドグループ名は、CMDGRP 項のコマンドグループ名 (NAME) で指定された値を指定すること。
EXPERM 項内ユニークとする。

2. 5 COCENV (CO 制御機能)

2. 5. 1 COCENV 節

形式

```
[ $ COCENV
  [%COMMON
    パラメータ記述
  ;]
  [%EXIT
    パラメータ記述
  ;]
  [%DEF_CLASS
    パラメータ記述
  ;]
  [%DEF_TRNS
    パラメータ記述
  ;]
  [%COGROUP
    パラメータ記述
    %CO
    パラメータ記述
  ;...
;]...
%NODETYPE
  パラメータ記述
  [%SHARE_CLASS
    パラメータ記述
    %SHARE_TRNS
    パラメータ記述
  ;...
;]...
[%NODE
  パラメータ記述
  [%SHARE_CLASS
    パラメータ記述
    %SHARE_TRNS
    パラメータ記述
  ;...
;]...
  [%TPM
    パラメータ記述
    [%CLASS
      パラメータ記述
      %TRNS
      パラメータ記述
    ;...
  ;]...
;]...
```



```
        ;]...
    ;...
;]
```

説明

C0 制御機能の動作環境を定義する。(論理ノード単位、省略可)
省略した場合、C0 制御機能は動作しない。

項の説明

COMMON

C0 制御機能の共通項目を定義する。(最大 1 個、省略可)

EXIT

C0 制御 TPP の利用者出口を定義する。(最大 1 個、省略可)

DEF_CLASS

クラス情報の既定値を定義する。(最大 1 個、省略可)

DEF_TRNS

トランザクション ID 情報の既定値を定義する。(最大 1 個、省略可)

COGROUP

C0 グループ情報を定義する。(最大 1000 個、省略可)

C0

C0 グループ配下の C0 名を定義する。(COGROUP 項内、最大 1000 個) 注(1)

NODETYPE

ノードタイプ別の情報を定義する。(最大 2 個、省略不可)

SHARE_CLASS

論理システム全体、または論理ノード配下の TPBASE に共通するクラス情報を定義する。(省略可) 注(2)

SHARE_TRNS

SHARE_CLASS 項配下で共通するトランザクション情報を定義する。(省略可) 注(3)

NODE

論理ノード別の情報を定義する。(最大 256 個、省略可)

TPM

論理ノード配下の C0 制御 TPP が動作する TPBASE 情報を定義する。(最大 16 個、省略可)

CLASS

TPM 項配下の C0 制御が動作するクラス情報を定義する。(1~1000 個、省略可) 注(2)

TRNS

TPM-CLASS 項配下で動作するトランザクション ID 情報を定義する。(省略可) 注(3)

注(1) 全体の C0 合計最大数は 2000
注(2) 全体のクラス(CLASS)合計最大数は 1000
注(3) 全体のトランザクション(TRNS)合計最大数は 1000

2. 5. 2 COMMON 項

形式

```
%COMMON
[ WATCHINVL = プロセス監視間隔]
[, KILLTIME  = デーモン停止タイムアウト値]
[, INITTIME  = デーモン起動タイムアウト値]
[, ABORTREQ  = { CONT | STOP }]
[, ELPOVER   = { MSG  | STOP }]
[, DICOC001  = { YES  | NO  }]
[, DICOC002  = { YES  | NO  }]
[, DICOC004  = { YES  | NO  }]
[, DICOC005  = { YES  | NO  }]
;
```

説明

C0 制御機能の共通的功能を定義する

パラメータの説明

WATCHINVL

C0 制御 TPP の異常終了を監視し、管理情報の補正やデーモンの再起動を行う間隔を、秒単位で指定する。
(数字 10～9999、省略可)
省略した場合、60 とする。

KILLTIME

C0 制御監視デーモンを停止する時、SIGTERM 送信からデーモン停止までのタイムアウト値を、秒単位で指定する。(数字 10～9999、省略可)
タイムアウト時には、SIGKILL を送信して停止させる。
省略した場合、30 とする。

INITTIME

C0 制御監視デーモンを起動した時、起動完了通知を受信するまでのタイムアウト値を、秒単位で指定する。(数字 60～9999、省略可)
タイムアウト時には、メッセージを表示して処理を継続する。初期化コマンドは最終的には警告終了となる。
省略した場合、60 とする。

ABORTREQ

C0 から diosauca-Status= DIOSA_ST_ABORT で異常終了要求が行われた時に、プロセスを停止するか否かを指定する。(省略可)
省略した場合、CONT とする。

パラメータ	説明
CONT	プロセスを停止しない。
STOP	プロセスを停止する。

ELPOVER

経過時間が超過した時の処置を指定する。(省略可)

省略した場合、MSG とする。

パラメータ	説明
MSG	警告メッセージのみ表示しプロセスの停止は行わない。
STOP	プロセスを停止する。(例外処理が行われる)

DICOC001

「DICOC001 CO 制御 TPP の起動処理を開始しました」のメッセージを表示するか否かを指定する。

省略した場合、NO とする。

パラメータ	説明
YES	表示する。
NO	表示しない。

DICOC002

「DICOC002 CO 制御 TPP が起動しました」のメッセージを表示するか否かを指定する。

省略した場合、YES とする。

パラメータ	説明
YES	表示する。
NO	表示しない。

DICOC004

「DICOC004 CO 制御 TPP の停止処理を開始しました」のメッセージを表示するか否かを指定する。

省略した場合、NO とする。

パラメータ	説明
YES	表示する。
NO	表示しない。

DICOC005

「DICOC005 CO 制御 TPP が停止しました」のメッセージを表示するか否かを指定する。

省略した場合、YES とする。

パラメータ	説明
YES	表示する。
NO	表示しない。

2.5.3 EXIT 項

形式

%EXIT		
[PRCINIT	=	プロセス初期化出口名]
[, PRCTERM	=	プロセス終了出口名]
[, ANALYZE	=	受信電文解析出口]
[, TRNSINIT	=	トランザクション初期化出口名]
[, TRNSTERM	=	トランザクション終了出口名]
[, ABORT1	=	アボート # 1 出口名]
[, ABORT2	=	アボート # 2 出口名]
;		

説明

C0 制御 TPP 上で呼び出す利用者出口名を定義する。(省略可)

パラメータの説明

PRCINIT

プロセス初期化出口の関数名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
省略した場合、プロセス初期化出口の呼び出しは行われない。

PRCTERM

プロセス終了出口の関数名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
省略した場合、プロセス終了出口の呼び出しは行われない。

ANALYZE

受信電文解析出口の関数名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
本出口では、受信電文情報、C0 名等を返却することができる。また受信電文の編集処理(解凍処理等)をおこなうことできる。
省略した場合、受信電文解析出口の呼び出しは行われない。
C0 名は、本出口から返却された C0 名が最優先となる。次に diosa ヘッダの C0 名、環境定義の既定 C0 名となる。C0 名が決定できない場合はエラーC0 (TRNS-ERRC0) が呼び出されるとなる。

TRNSINIT

トランザクション初期化出口の関数名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
省略した場合、トランザクション初期化出口の呼び出しは行われない。

TRNSTERM

トランザクション終了出口の関数名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
省略した場合、トランザクション終了出口の呼び出しは行われない。

ABORT1

アボート # 1 出口の関数名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
省略した場合、アボート # 1 出口の呼び出しは行われない。

ABORT2

アボート # 2 出口の関数名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
省略した場合、アボート # 2 出口の呼び出しは行われない。

2. 5. 4 DEF_CLASS 項

形式

```
%DEF_CLASS
[ MSGMAX      = 電文最大長]
[, RESTTXID   = 電文保留用トランザクション ID ]
[, DB         = {NO|RGSET|IM|ALL} ]
;
```

説明

クラス (TPBASE プロセス定義) の既定値を定義する。
本項は、SHARE_CLASS 項、CLASS 項の既定値としてみなされる。

パラメータの説明

MSGMAX

最大受信電文長を指定する。(数字 3～2097151 単位キロバイト、省略可)。
省略した場合、34 が採られる。
圧縮された電文を受信する可能性がある場合は、解凍後の最大電文長を定義する。
利用者が算出した最大電文長に diosa が使用する 2K の制御部の長さを加えた値を定義する。
実際に送受信を保障する電文長は TPBASE の定義に依存するため、以下の値も合わせて設定する。

- ・通信制御機能定義ファイル (mcs)
 VDRECVBUF
 VDEDITBUF
- ・環境変数
 TP_TX_DATA_SIZE
- ・TPBASE 構成ファイル (tpbase.cnf)
 MEMPOOLSIZE
 DATBLKSIZE

RESTTXID

電文を保留する時、一時的に退避するトランザクション ID を指定する。(英数字 1～6、省略可)。
本定義と CLASS の RESTTXID も省略した場合、電文保留機能は動作しない。(diosasendtx で電文保留要求がエラーとなる)
RESTTXID で定義されたトランザクション ID は、定義されたクラスよりも最大電文長が同じ、もしくは大きなクラス配下の TRNS 項に定義されていなければならない。(クラス毎に定義するか、クラス分散して定義するか、全 CLASS で一つだけ定義するかを選択することができる)

DB

クラスで更新対象とする DB 種別を指定する。(省略可)

パラメータ	説明
NO	DB アクセスを行わない(既定値)
RGSET	DB アクセスを RGSET に限定する
IM	DB アクセスを IM に限定する
ALL	DB アクセスを RGSET、IM の両方を可能とする

2. 5. 5 DEF_TRNS 項

形式

%DEF_TRNS	
[CONAME	= C0 名]
[,ERRCO	= エラーC0 名]
[,RETRY	= リトライ最大回数]
[,OPS	= { YES <u>NO</u> }]
[,COINFO	= { YES <u>NO</u> }]
[,CPUTIME	= CPU 時間制限値]
[,ELPTIME	= 経過時間制限値]
[,ELPRESET	= 経過時間リセット最大回数]
[,COCHAIN	= { RESET <u>NORESET</u> }]
;	

説明

トランザクションの動作環境既定値を定義する。
本項は、SHARE_TRNS 項、TRNS 項の既定値としてみなされる。

パラメータの説明

CONAME

受信電文や受信電文解析出口で C0 名が決定していない場合に呼び出す C0 名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
受信電文や受信電文解析出口で C0 名が決定していない、かつ本パラメータと SHARE_TRNS 項、TRNS 項の CONAME パラメータが全て省略された場合、エラーC0 を呼出す。
本パラメータで指定する C0 を C0 名指定の送信対象としても使用する場合、COGROUP 項－C0 項の NAME に別途定義する必要がある。

ERRCO

C0 を呼び出せない時に呼び出す C0 名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
呼び出せない状態とは、C0 名が存在しない、C0 名が決定できない、C0 名が閉塞状態にある、一時保留が解除された(本来呼び出すべきトランザクション ID に diosasendtx を行う必要がある)等がある。
省略した場合、“DIOSA_ERROR_C0”とする。
本パラメータで指定する C0 を C0 名指定の送信対象としても使用する場合、COGROUP 項－C0 項の NAME に別途定義する必要がある。

RETRY

ロールバックリトライを行う最大回数を指定する。(数字 0～9999、省略可)。
最大回数を超えるリトライが発生した時には、異常終了処理が行われる。
0 を指定した場合、無制限となる。
省略した場合、0 とする。

OPS

稼動統計情報を採取するか否かを指定する。(省略可)
省略した場合、NO とする。

パラメータ	説明
YES	採取する。
NO	採取しない。

COINFO

C0 の稼動情報を採取するか否かを指定する。(省略可)
省略した場合、NO とする。

パラメータ	説明
YES	採取する。
NO	採取しない。

CPUTIME

電文毎の CPU 時間制限値を秒単位で指定する。(数字 0～999999、省略可)
CPU 時間が制限値を超過した時は、プロセス停止となる。(例外処理が行われる)
0 を指定した場合、無制限となる。
省略した場合、0 とする。

ELPTIME

電文毎の経過時間制限値を秒単位で指定する。(数字 0～999999、省略可)
経過時間が制限値を超過した時は、COMMON 項 ELPOVER パラメータの指定に従って処置される。
0 を指定した場合、無制限となる。
省略した場合、0 とする。

ELPRESET

電文毎の経過時間のリセットを許可する回数を指定する。(数字 0～999999、省略可)
0 を指定した場合、無制限となる。
省略した場合、0 とする。

COCHAIN

C0 の連鎖が行われた時、経過時間、CPU 時間をリセットするか否かを指定する。(省略可)
省略した場合、NORESET とする。

パラメータ	説明
RESET	リセットする。
NORESET	リセットしない。

2. 5. 6 COGROUP 項

形式

```
%COGROUP
    NAME    = CO グループ名
;
```

説明

CO グループ情報を定義する。
SHARE_TRNS 項、TRNS 項に COGROUP パラメータを定義する場合、省略不可となる。
本項を省略した場合は、CO 名指定の diosasendtx の利用はできない。

パラメータの説明

NAME
CO グループの名前を指定する。(英数字 1～15 文字、省略不可)。

2. 5. 7 C0 項

形式

```
%C0
    NAME    = C0 名
;
```

説明

C0 グループ配下の C0 情報を定義する。
COGROUP 項を定義した場合、省略不可となる。

パラメータの説明

NAME
C0 の名前を指定する。(英数字 1～30 文字、省略不可)。
この値は全ての COGROUP 項でユニークでなければならない。

2. 5. 8 NODETYPE 項

形式

```
%NODETYPE  
    [TYPE = {AP|OLTP}]  
;
```

説明

論理ノードのノードタイプを定義する。(省略不可)

パラメータの説明

TYPE

論理ノードのノードタイプを定義する。(省略可)。

省略した場合、全てのノードタイプに対して配下の定義が適用される。

同一ノードタイプを複数指定することはできない。(TYPE パラメータ省略と TYPE パラメータ指定の混在を含む)

2. 5. 9 SHARE_CLASS 項

形式

%SHARE_CLASS	
NAME	= クラス名
[, MSGMAX	= 電文最大長]
[, RESTTXID	= 電文保留用トランザクション ID]
[, DB	= { <u>NO</u> RGSET IM ALL}]
;	

説明

論理システム全体、または論理ノード配下の TPBASE に共通するクラス情報を定義する。
クラス毎に既定値、上位の SHARE_CLASS 項の値、または DEF_CLASS 項の値を変更したいパラメータを定義する。
NODE 項-SHARE_CLASS 項と TPM 項-CLASS 項を省略した場合、NODETYPE 項-SHARE_CLASS 項は省略不可となる。
TPM 項-CLASS 項を定義した場合、NODETYPE 項-SHARE_CLASS 項と NODE 項-SHARE_CLASS 項は省略可となる。

パラメータの説明

NAME

クラスの名前を指定する。(英数字 1～32 文字、省略不可)。
この値は NODETYPE 項直下でユニークでなければならない(別の NODETYPE 項では重複可能である)。
この値は NODE 項直下でユニークでなければならない(別の NODE 項では重複可能である)。

MSGMAX

最大受信電文長を指定する。(数字 3～2097151 単位キロバイト、省略可)。
省略した場合、上位の SHARE_CLASS 項の値、または DEF_CLASS 項の値が採られる。

RESTTXID

電文を保留する時、一時的に退避するトランザクション ID を指定する。(英数字 1～6、省略可)。
省略した場合、上位の SHARE_CLASS 項の値、または DEF_CLASS 項の値が採られる。

DB

クラスで更新対象とする DB 種別を指定する。(省略可)
省略した場合、上位の SHARE_CLASS 項の値、または DEF_CLASS 項の DB パラメータを採用する。

パラメータ	説明
NO	DB アクセスを行わない(既定値)
RGSET	DB アクセスを RGSET に限定する
IM	DB アクセスを IM に限定する
ALL	DB アクセスを RGSET、IM の両方を可能とする

2. 5. 10 SHARE_TRNS 項

形式

%SHARE_TRNS		
TXID	=	トランザクション ID
[, VD	=	VD 名]
[, CONAME	=	CO 名]
[, ERRCO	=	エラーCO 名]
[, RETRY	=	リトライ最大回数]
[, OPS	=	{ YES <u>NO</u> }
[, COINFO	=	{ YES <u>NO</u> }
[, CPUTIME	=	CPU 時間制限値]
[, ELPTIME	=	経過時間制限値]
[, ELPRESET	=	経過時間リセット最大回数]
[, COCHAIN	=	{ RESET <u>NORESET</u> }
[, COGROUP	=	CO グループ名]...
;		

説明

SHARE_CLASS 項配下で共通するトランザクション情報を定義する。
SHARE_CLASS 項が定義された場合は、SHARE_TRNS 項は省略不可となる。

パラメータの説明

TXID

トランザクション ID を指定する。(英数字 1～6 文字、省略不可)
この値は NODETYPE 項直下でユニークでなければならない(別の NODETYPE 項では重複可能である)。
この値は NODE 項直下でユニークでなければならない(別の NODE 項では重複可能である)。

VD

トランザクション ID に対応する VD 名を指定する。(英数字 1～24 文字、省略可)
省略した場合、TXID に接頭語“VD”が付与されたとみなす。

CONAME

受信電文や受信電文解析出口で CO 名が決定していない場合に呼び出す CO 名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
省略した場合、上位の SHARE_TRNS 項の値、または DEF_TRNS 項の値がとられる。
本パラメータで指定する CO を CO 名指定の送信対象としても使用する場合、COGROUP 項—CO 項の NAME に別途定義する必要がある。

ERRCO

CO を呼び出せない時に呼び出す CO 名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
省略した場合、上位の SHARE_TRNS 項の値、または DEF_TRNS 項の値が採られる。
本パラメータで指定する CO を CO 名指定の送信対象としても使用する場合、COGROUP 項—CO 項の NAME に別途定義する必要がある。

RETRY

ロールバックリトライを行う最大回数を指定する。(数字 0～9999、省略可)。
省略した場合、上位の SHARE_TRNS 項の値、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

OPS

稼動統計情報を採取するか否かを指定する。(省略可)

省略した場合、上位の SHARE_TRNS 項の値、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

パラメータ	説明
YES	採取する。
NO	採取しない。

COINFO

C0 の稼動情報を採取するか否かを指定する。(省略可)

省略した場合、上位の SHARE_TRNS 項の値、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

パラメータ	説明
YES	採取する。
NO	採取しない。

CPUTIME

電文毎の CPU 時間制限値を秒単位で指定する。(数字 0～999999、省略可)

省略した場合、上位の SHARE_TRNS 項の値、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

ELPTIME

電文毎の経過時間制限値を秒単位で指定する。(数字 0～999999、省略可)

省略した場合、上位の SHARE_TRNS 項の値、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

ELPRESET

電文毎の経過時間のリセットを許可する回数を指定する。(数字 0～999999、省略可)

省略した場合、上位の SHARE_TRNS 項の値、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

COCHAIN

C0 の連鎖が行われた時、経過時間、CPU 時間をリセットするか否かを指定する。(省略可)

省略した場合、上位の SHARE_TRNS 項の値、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

パラメータ	説明
RESET	リセットする。
NORESET	リセットしない。

COGROUP

C0 グループ名を指定する。(英数字 1～15 文字、省略可)

省略した場合、上位の SHARE_TRNS 項の値が採られる。

上位の SHARE_TRNS 項と下位の TRNS 項も省略した場合、このトランザクション ID 宛の電文送信に C0 名指定の diosasendtx は利用できない。(トランザクション ID 指定での電文送信時に C0 名を指定することは可能である)

この値は TPM 内でユニークでなければならない(上位 SHARE_TRNS 項で指定した COGROUP も含む)。

2. 5. 11 NODE 項

形式

```
%NODE
    NAME = 論理ノード名
;
```

説明

論理ノード別の情報を定義する。
NODETYPE 項-SHARE_CLASS 項が定義されている場合、省略可となる。

パラメータの説明

NAME

論理ノードの名前を指定する。(英数字 1～15 文字、省略不可)。

2. 5. 12 TPM 項

形式

```
%TPM
    NAME = TPBASE モニタ名
;
```

説明

論理ノード配下の CO 制御 TPP が動作する TPBASE 情報を定義する。
NODETYPE 項-SHARE_CLASS 項と NODE 項-SHARE_CLASS 項が定義されていない場合、省略不可となる。

パラメータの説明

NAME

TPBASE モニタの名前を指定する。(英数字 1～8 文字、省略不可)。

2. 5. 13 CLASS 項

形式

```
%CLASS
    NAME      = クラス名
    [, MSGMAX  = 電文最大長]
    [, RESTTXID = 電文保留用トランザクション ID ]
    [, DB      = {NO|RGSET|IM|ALL} ]
;
```

説明

トランザクションが動作する TPBASE のプロセス環境定義(. ped)のクラス名を指定する。
TPM 項が指定された場合、省略不可となる。

パラメータの説明

NAME

クラス名を指定する。(英数字 1～32 文字、省略不可)。
この値は TPM 項内でユニークでなければならない(別 TPM 項では重複可能である)。

MSGMAX

最大受信電文長を指定する。(数字 3～2097151 単位キロバイト、省略可)。
省略した場合、SHARE_CLASS 項、または DEF_CLASS 項の値が採られる。

RESTTXID

電文を保留する時の一時的に退避するトランザクション ID を指定する。(英数字 1～6、省略可)。
省略した場合、SHARE_CLASS 項、または DEF_CLASS 項の値が採られる。

DB

クラスで更新対象とする DB 種別を指定する。(省略可)
省略した場合、SHARE_CLASS 項、または DEF_CLASS 項の値が採られる。

パラメータ	説明
NO	DB アクセスを行わない(既定値)
RGSET	DB アクセスを RGSET に限定する
IM	DB アクセスを IM に限定する
ALL	DB アクセスを RGSET、IM の両方を可能とする

2. 5. 14 TRNS 項

形式

%TRNS		
TXID	=	トランザクション ID
[, VD	=	VD 名]
[, CONAME	=	CO 名]
[, ERRCO	=	エラーCO 名]
[, RETRY	=	リトライ最大回数]
[, OPS	=	{ YES NO }]
[, COINFO	=	{ YES NO }]
[, CPUTIME	=	CPU 時間制限値]
[, ELPTIME	=	経過時間制限値]
[, ELPRESET	=	経過時間リセット最大回数]
[, COCHAIN	=	{ RESET NORESET }]
[, COGROUP	=	CO グループ名]...
;		

説明

トランザクションの動作環境を定義する。(省略不可)
TPM 項が指定された場合、省略不可となる。
トランザクション ID 毎に一意にしたいパラメータを定義する。

パラメータの説明

TXID

トランザクション ID を指定する。(英数字 1～6 文字、省略不可)。
この値は TPM 項内でユニークでなければならない(別 TPM 項では重複可能である)。

VD

トランザクション ID に対応する VD 名を指定する。(英数字 1～24 文字、省略可)。
省略した場合、TXID の先頭に“VD”を付加した VD 名が定義されたとみなす。

CONAME

受信電文や受信電文解析出口で CO 名が決定していない場合に呼び出す CO 名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)
省略した場合、SHARE_TRNS 項、または DEF_TRNS 項の値が採られる。
本パラメータで指定する CO を CO 名指定の送信対象としても使用する場合、COGROUP 項—CO 項の NAME に別途定義する必要がある。

ERRCO

CO の呼び出しに失敗した時に呼び出す CO 名を指定する。(英数字 1～30 文字、省略可)。
省略した場合、SHARE_TRNS 項、または DEF_TRNS 項の値が採られる。
本パラメータで指定する CO を CO 名指定の送信対象としても使用する場合、COGROUP 項—CO 項の NAME に別途定義する必要がある。

RETRY

ロールバックリトライを行う最大回数を指定する。(数字 0～9999、省略可)。
最大回数を超えるリトライが発生した時には、異常終了処理が行われる。
省略した場合、SHARE_TRNS 項、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

OPS

稼動統計情報を採取するか否かを指定する。(省略可)
省略した場合、SHARE_TRNS 項、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

パラメータ	説明
YES	採取する。
NO	採取しない。

COINFO

C0 の稼動情報を採取するか否かを指定する。(省略可)
省略した場合、SHARE_TRNS 項、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

パラメータ	説明
YES	採取する。
NO	採取しない。

CPUTIME

電文毎の CPU 時間制限値を秒単位で指定する。(数字 0～999999、省略可)
CPU 時間が制限値を超過した時は、プロセス停止となる。(例外処理が行われる)
省略した場合、SHARE_TRNS 項、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

ELPTIME

電文毎の経過時間制限値を秒単位で指定する。(数字 0～999999、省略可)
経過時間が制限値を超過した時は、COMMON 項 ELPOVER パラメータの指定に従って処置される。
省略した場合、SHARE_TRNS 項、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

ELPRESET

経過時間のリセットを許可する回数を指定する。(数字 0～999999、省略可)
0 を指定した場合、無制限となる。
省略した場合、SHARE_TRNS 項、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

COCHAIN

C0 の連鎖が行われた時、経過時間、CPU 時間をリセットするか否かを指定する。(省略可)
省略した場合、SHARE_TRNS 項、または DEF_TRNS 項の値が採られる。

パラメータ	説明
RESET	リセットする。
NORESET	リセットしない。

COGROUP

C0 グループ名を指定する。(英数字 1～15 文字、省略可)
省略した場合、上位の SHARE_TRNS 項の値が採られる。
上位の SHARE_TRNS 項も省略した場合、このトランザクション ID 宛の電文送信に C0 名指定の diosasendtx は利用できない。(トランザクション ID 指定での電文送信時に C0 名を指定することは可能である)
この値は TPM 項内でユニークでなければならない (SHARE_TRNS 項で指定した COGROUP も含む)。

2. 6 DACENV (DB アクセス制御機能)

2. 6. 1 DACENV 節

形式

```
[ $DACENV
  { %TABLESET
    パラメータ記述
    { %TABLE
      パラメータ記述
      { %COLUMN
        パラメータ記述
      } ...
    } %INDEX
      パラメータ記述
    } ...
  } ...
  [ %SQLTEMPLATE
    パラメータ記述
  ]
} ...
; ]
```

説明

DB アクセス制御機能に関する定義を行う。(論理ノード (AP 層および OLTP 層) 単位、省略可)
省略した場合、DB アクセス制御機能は動作しない。

項の説明

TABLESET 項

アプリケーションがアクセスする表に関する情報を定義する。本項の配下の情報は最大 4 世代保持することができる。(最大 4 個、必須)

TABLE 項

IM 表に関する情報を定義する。(TABLESET 項配下に最大 1023 個、必須)

COLUMN 項

IM レコードを構成する項目に関する情報を定義する。(TABLE 項配下に最大 997 個、必須)

INDEX 項

IM 表のインデックスに関する情報を定義する。(TABLE 項配下に最大 63 個、必須)

SQLTEMPLATE 項

SQL 雛形ファイルに関する情報を定義する。(TABLESET 項配下に最大 1 個、省略可)
省略した場合、SQL 雛形機能は使用できない。

2. 6. 2 TABLESET 項

形式

%TABLESET
VERSION = リビジョン番号
;

説明

アプリケーションがアクセスする表に関する情報を定義する。

パラメータの説明

VERSION

本項の配下の定義のリビジョン番号を定義する(数字：1～2147483647、必須)。
リビジョン番号は、DACENV 節内で一意な番号でなければならない。また、リビジョン番号は DIOSA/XTP の論理システム内で一意としなければならない。さらに、センタ間レプリケーションを利用してデータのレプリケーションを行う論理システムに対しても同じリビジョン番号の定義を行うこと。
リビジョン番号は、数値が大きいほど新しい版として扱う。アプリケーションは、利用したい定義のリビジョン番号を指定する。アプリケーションによるデータ更新を DB や他拠点に反映する処理はアプリケーションとは非同期で行われるため、環境定義の改版時には少なくとも改版前後の 2 つの版の定義を並存させなければならない。

2. 6. 3 TABLE 項

形式

%TABLE
NAME = テーブル名
, ID = テーブル ID
[, TRUNCATETYPE = { <u>DELETE</u> TRUNCATE TEMPLATE }]
[, REPLICATION = { NONE <u>ASYNC</u> }]
[, DATEFORMAT = "日付書式文字列"]
[, DATENLSPARAM = "NLS パラメータ"]
;

説明

アプリケーションがアクセスする全ての IM 表の情報を定義する。

パラメータの説明

NAME

テーブル名を定義する。(英字で始まる英数字または'_' : 1～30 文字、必須)
テーブル名は、TABLESET 項内で一意な名前でないといけない。

ID

テーブル ID を定義する。(数字 : 1～1023、必須)
テーブル ID は、TABLESET 項内で一意の数でないといけない。

TRUNCATETYPE

DB からレコードを全件削除する場合の削除方法を定義する。(省略可、既定値 : DELETE)

パラメータ値	説明
DELETE	DELETE の SQL を実行し、ハッシュ値の範囲を元に削除対象 MAP のレコードを全件削除する。 環境変数「DIATC_DELETE_ROWNUM」が定義されていた場合は、設定値を用いて一度に削除する件数を制限した上で、削除対象のレコードが無くなるまで繰り返し DELETE 文を実行する。
TRUNCATE	TRUNCATE の SQL を実行してレコードを全件削除する。
TEMPLATE	SQL 雛形ファイルにおいて「TRUNCATE _n (n:1～9 の整数)」の形式で定義された SQL を実行する。

REPLICATION

レプリケーション種別を定義する。(省略可、既定値 : ASYNC)

パラメータ値	説明
NONE	レプリケーションを行わない。
ASYNC	非同期型レプリケーションを行う。

DATEFORMAT

DB の TO_DATE 関数および TO_CHAR 関数の第 2 パラメータに指定する日付書式文字列を定義する。(二重引用符"" で囲んだ 300 文字以内の文字列。省略可)
本パラメータの省略時、環境変数「DIATC_DATE_FORMAT」が定義されている場合はその設定値を TO_DATE 関数および TO_CHAR 関数の日付書式に指定する。
本パラメータと環境変数「DIATC_DATE_FORMAT」の両方が省略されている場合は、DB の仕様によって日付書式が決定される。

本パラメータと環境変数「DIATC_DATE_FORMAT」の両方が定義されている場合は、本パラメータの設定値を TO_DATE 関数および TO_CHAR 関数の日付書式に指定する。

二重引用符”” ”を含む文字列を日付書式に指定する必要がある場合は、本パラメータではなく、環境変数「DIATC_DATE_FORMAT」を使用すること。

DATENLSPARAM

DB の TO_DATE 関数および TO_CHAR 関数の第 3 パラメータに指定する NLS パラメータを定義する。(二重引用符”” ”で囲んだ 300 文字以内の文字列。省略可)

本パラメータの省略時、環境変数「DIATC_DATE_NLSPARAM」が定義されている場合はその設定値を TO_DATE 関数および TO_CHAR 関数の NLS パラメータに指定する。

本パラメータと環境変数「DIATC_DATE_NLSPARAM」の両方が省略されている場合は、DB の仕様によって NLS パラメータが決定される。

本パラメータと環境変数「DIATC_DATE_NLSPARAM」の両方が定義されている場合は、本パラメータの設定値を TO_DATE 関数および TO_CHAR 関数の NLS パラメータに指定する。

二重引用符”” ”を含む文字列を NLS パラメータに指定する必要がある場合は、本パラメータではなく、環境変数「DIATC_DATE_NLSPARAM」を使用すること。

注意

- 環境定義 IMTABLECONF 節が定義されている環境では、本項の NAME パラメータおよび ID パラメータで定義するテーブル名とテーブル ID は、IMTABLECONF 節-LTABLE 項の NAME パラメータおよび ID パラメータで定義されている必要がある。
- 環境変数 DIATC_CENTER_ID が未設定の場合、REPLICATION パラメータの定義に関わらずレプリケーションを行わない。また、diatcdbsetrplmode(更新ログ登録要否モード設定関数)で更新ログ登録要否モードを「更新ログ抑止モード(レプリケーションなし)」に設定すると、当該トランザクションでは REPLICATION パラメータの定義に関わらずレプリケーションを行わない。

2. 6. 4 COLUMN 項

形式

```
%COLUMN
    NAME = 項目名
    , TYPE = { NUMBER | UNSIGNED | DATE | CHAR | STRING | CLOB | BINARY | BLOB | VARIABLE_SIZE }
    [, SIZE = サイズ ]
;
```

説明

IM のレコードを構成する全ての項目を定義する。レコードの先頭から 40 バイトの DIOSA/XTP 制御領域を除いた、ユーザデータ領域の先頭項目から順に本項の定義を列挙する。

パラメータの説明

NAME

項目名を定義する。(英字で始まる英数字または'_' : 1～30 文字、必須)
項目名は、TABLE 項内で一意な名前でないといけない。
また、項目名は、対応する DB 上の表の項目と同じ名前を定義しなければならない。
DIOSA/XTP の制御用項目名 (DIATC_MAINKEY、DIATC_OPNUM、DIATC_VERSION) は指定不可とする。

TYPE

属性を定義する。(必須)

パラメータ値	説明
NUMBER	整数型 (1 バイト、2 バイト、4 バイト、8 バイト)であることを示す。 Oracle では NUMBER 型に対応付ける。 PostgreSQL では 1～2 バイトは smallint 型、4 バイトは integer 型、8 バイトは bigint 型に対応付ける。
UNSIGNED	符号無し整数型 (1 バイト、2 バイト、4 バイト、8 バイト)であることを示す。 Oracle では NUMBER 型に対応付ける PostgreSQL では 1～2 バイトは integer 型、4 バイトは bigint 型、8 バイトは char 型に対応付ける。
DATE	日時文字列を格納した固定長文字列型であることを示す。 Oracle では DATE 型に対応付ける。 PostgreSQL では timestamp 型に対応付ける。
CHAR	固定長文字列型であることを示す。 Oracle では CHAR 型に対応付ける。(サイズに対して不足があった場合は'¥0'でパッドされる) PostgreSQL では CHAR 型に対応付ける。(サイズに対して不足があった場合は空白でパッドされる)
STRING	可変長文字列型であることを示す。 Oracle では VARCHAR2 型に対応付ける。(末尾に'¥0'(終端文字)が付与) PostgreSQL では varchar 型に対応付ける。(サイズに対して不足があった場合は空白でパッドされる)
CLOB	可変長文字列型であることを示す。 Oracle では CLOB 型に対応付ける。(末尾に'¥0'(終端文字)が付与) PostgreSQL では使用できない。

パラメータ値	説明
BINARY	可変長バイナリ型であることを示す。 Oracle では RAW 型に対応付ける。 PostgreSQL では bytea 型に対応付ける。
BLOB	可変長バイナリ型であることを示す。 Oracle では BLOB 型に対応付ける。 PostgreSQL では使用できない。
VARIABLE_SIZE	可変長項目 (STRING 属性、BINARY 属性、CLOB 属性、BLOB 属性) の長さを格納するための整数型 (1 バイト、2 バイト、4 バイト、8 バイト) であることを示す。省略した場合は SIZE=8 の COLUMN 項が設定される。 また、本項目は Oracle/PostgreSQL には対応付けない。

SIZE

整数型 (NUMBER 型と UNSIGNED 型と VARIABLE_SIZE 型) と固定長文字列型 (CHAR 型と DATE 型) の長さを定義する (必須)。ただし、可変長項目の BINARY 型は省略可、STRING 型と CLOB 型と BLOB 型は指定不可。

属性	省略可否	パラメータ値
NUMBER	必須	1、2、4、8
UNSIGNED	必須	1、2、4、8
DATE	必須	1～2000
CHAR	必須	1～2000
STRING	指定不可	－
CLOB	指定不可	－
BINARY	省略可	Oracle : 1～32767 PostgreSQL : 1～10485760
BLOB	指定不可	－
VARIABLE_SIZE	必須	1、2、4、8

2. 6. 5 INDEX 項

形式

```
%INDEX
    NAME = インデックス名
    , COLUMN = "項目名[, 項目名]..."
;
```

説明

IM 表に定義されている全てのインデックスの情報を定義する。

パラメータの説明

NAME

IM 表のインデックス名を定義する。(英字で始まる英数字または'_' : 1~30 文字。必須)

インデックス名は、TABLE 項内で一意な名前でないといけない。

IM 表のプライマリキーを先頭に定義しなければならない。

COLUMN

IM 表におけるインデックスを構成するキー項目名を定義する(二重引用符"" で囲んだ 300 文字以内の文字列。必須)。インデックスが複数キー項目から構成される場合は',' (カンマ) で区切って先頭項目から順に列挙する。最大で 32 項目まで指定可能。

可変長項目 (STRING 属性、BINARY 属性、CLOB 属性、BLOB 属性) およびそれ以降の項目を本パラメータに指定することはできない。

注意

- 環境定義 IMTABLECONF 節が定義されている環境では、本項の NAME パラメータで定義するインデックス名は、IMTABLECONF 節-PRIMARYKEY 項または SECONDARYKEY 項の NAME パラメータで定義されている必要がある。

2. 6. 6 SQLTEMPLATE 項

形式

```
%SQLTEMPLATE  
    FILE = SQL 雛形ファイル名  
;
```

説明

SQL 雛形ファイルに関する情報を定義する。

パラメータの説明

FILE

SQL 雛形ファイル名を絶対パスで指定する。(英数字：1～256 文字、必須)

2. 6. 7 SQL 雛形

(1) SQL 雛形ファイル

形式

```
{¥[TABLE¥]  
パラメータ記述  
} ...  
【凡例】'¥[' は '[' を示す。'¥]' は ']' を示す。
```

説明

SQL 雛形ファイルは、IM から DB へのデータのレプリケーション時に合わせて利用者が付加的に実行したい SQL を記述するためのファイルである。

定義は、DIOSA/XTP の論理ノード(AP 層および OLTP 層)単位に行う。本機能を利用しない場合は、省略可能である。なお、IM から DB にデータ更新をレプリケーションするための SQL は自動生成されるため、本ファイルには記載不要である。

SQL 雛形ファイルは、DIOSA 環境定義言語(EDL)の形式ではなく、いわゆる INI ファイルの形式で記述する。SQL 雛形ファイルには任意の名前を付けることができ、DACENV 節の SQLTEMPLATE 項に SQL 雛形ファイル名を定義する。

項の説明

TABLE 項

IM から DB へのデータレプリケーションに合わせて利用者が付加的な SQL を実行したい表の情報を定義する。(最大 1023 個、必須)

(2) **TABLE 項**

形式

¥[TABLE¥] NAME = テーブル名 [INSERTn = SQL 雛形]... [UPDATEn = SQL 雛形]... [DELETEn = SQL 雛形]... [TRUNCATEN = SQL 雛形]... 【凡例】 n : 1～9 の整数を示す。 '¥[' は '[' を示す。'¥]' は ']' を示す。

説明

DB に対して実行する SQL の雛形を定義する。

SQL 雛形とは、バインド変数を埋め込んだ SQL 文のことを指す。
SQL 実行時、アプリケーションが DB アクセス API によるデータ更新時に受け取った IM のレコードイメージから該当部分を抜き出して SQL 雛形にバインドする。

バインド変数の名前は、DACENV 節の COLUMN 項の NAME パラメータで定義された項目名の前に「:」（コロン）を付加したものである。

IM-DB データ同期機能は、DB 上の表に 1 レコードを追加／更新／削除／全件削除する度に対応する SQL を実行する。更新対象のテーブルとデータ更新の種類(追加／更新／削除／全件削除)についてそれぞれ最大 9 個の SQL 雛形を定義することができる。

TABLE 項の宣言が存在する行から次の TABLE 項の宣言が出現する直前までが 1 つの TABLE 項として扱われる。

パラメータの説明

NAME

 テーブル名を定義する。テーブル名は、DACENV 節の TABLE 項で定義されているテーブル名を記述しなければならない。(英字で始まる英数字または'_' : 1～30 文字、必須)

INSERTn (n:1～9 の整数)

 アプリケーションによるレコード追加要求を DB に反映した時に一緒に実行したい SQL を定義する。(最大 9 個、省略可)
 複数の INSERT パラメータを定義した場合、n の少ない方から順番に実行される。

UPDATEn (n:1～9 の整数)

 アプリケーションによるレコード更新要求を DB に反映した時に一緒に実行したい SQL を定義する。(最大 9 個、省略可)
 複数の UPDATE パラメータを定義した場合、n の少ない方から順番に実行される。

DELETEn (n:1～9 の整数)

 アプリケーションによるレコード削除要求を DB に反映した時に一緒に実行したい SQL を定義する。(最大 9 個、省略可)
 複数の DELETE パラメータを定義した場合、n の少ない方から順番に実行される。
 NAME パラメータに指定したテーブルのプライマリキーの項目のみバインド変数に指定することができる。

TRUNCATEN (n:1～9 の整数)

アプリケーションによるレコード全件削除要求を DB に反映する際に実行する SQL を定義する。(最大 9 個、省略可)

複数の TRUNCATE パラメータを定義した場合、n の少ない方から順番に実行される。

本パラメータで指定した SQL は、DACENV 節-TABLE 項の TRUNCATETYPE パラメータに TEMPLATE を指定した場合のみ実行される。

本パラメータで指定する SQL にバインドすることができるのは、削除対象の MAPID のみとなる。

削除対象の MAPID をバインドする際は、変数名に「:DIATC_MAPID」を使用する。

注意

- 下記の文字列は予約語となるため、INSERT/UPDATE/DELETE パラメータのバインド変数として使用することはできない。

DIATC_MAPID

(3) SQL 雛形ファイルの一般規則

項の形式

¥[項名¥] [パラメータ] ... 【凡例】'¥' は '[' を示す。'¥]' は ']' を示す。
--

- '[' と項名、および、項名と ']' の間には、空白等の何らかの文字列を置いてはならない。

パラメータの形式

キーワード = パラメータ値

- '=' の前後は 1 個以上のスペース、およびタブを挿入することができる。
- パラメータ値が SQL 雛形の場合は、改行文字以外の全ての文字を利用することができる。

コメントの形式

；コメント内容

コメントの開始はセミコロン(;)によって示される。コメントはその行の終わりまで続く。セミコロンと行末の間の全ての文字は無視される。コメントは行頭からしか開始できないが、セミコロンの前にスペースまたはタブを置いてもその行はコメントとして扱われる。

その他

- (1) パラメータ記述は 1 行に 1 つだけ記載すること。
- (2) SQL 雛形ファイルに空行を挿入することができる。
- (3) SQL 雛形ファイルの一行の最大文字数は 65534 文字である。

(4) **SQL 雛形の実行順序**

IM-DB データ同期の際に、SQL 雛形ファイルに定義した SQL がどのように実行されるかを説明する。

環境定義

前提として、環境定義 DACENV 節と SQL 雛形が下記のように定義されているものとする。

【環境定義 DACENV 節】

```
※説明に不要な部分は省略しています。
%TABLE
    NAME = USER_TABLE01,   ID = 101,   TRUNCATETYPE = TEMPLATE
;
%TABLE
    NAME = USER_TABLE02,   ID = 102,   TRUNCATETYPE = TRUNCATE
;
%TABLE
    NAME = USER_TABLE03,   ID = 103
;
%SQLTEMPLATE
    FILE = /home/diosa/sqltemplate.txt
;
```

【SQL 雛形ファイル】

```
[TABLE]
NAME = USER_TABLE01
INSERT1 = <SQL(A)>
INSERT2 = <SQL(B)>
UPDATE1 = <SQL(C)>
DELETE1 = <SQL(D)>
TRUNCATE1 = <SQL(E)>

[TABLE]
NAME = USER_TABLE02
UPDATE1 = <SQL(F)>
TRUNCATE1 = <SQL(G)>
```

アプリケーションによるデータアクセス

次に、アプリケーションが DB アクセス API を利用して下記のようにデータアクセスを行う。

```
※アプリケーションが下記の順番で関数を実行する。
①トランザクション開始関数

②レコード追加関数
・テーブル ID : 101 (USER_TABLE01)
・SQL 雛形実行フラグ : O N

③レコード更新関数
・テーブル ID : 101 (USER_TABLE01)
・SQL 雛形実行フラグ : O F F
```

④レコード更新関数
・テーブル ID : 102 (USER_TABLE02)
・SQL 雛形実行フラグ : ON
⑤レコード削除関数
・テーブル ID : 103 (USER_TABLE03)
・SQL 雛形実行フラグ : ON
⑥コミット

DB への反映順序

アプリケーションによるコミット後、IM-DB データ同期制御によって下記の順番で DB を更新する。

- (1)②のレコード追加を反映する。
- (2)SQL 雛形ファイルに定義された<SQL (A)>を実行する。
- (3)SQL 雛形ファイルに定義された<SQL (B)>を実行する。
- (4)③のレコード更新を反映する。
- (5)④のレコード更新を反映する。
- (6)SQL 雛形ファイルに定義された<SQL (F)> を実行する。
- (7)⑤のレコード削除を反映する。

上記(1)～(7)は同一トランザクションで実行されるので、アプリケーションによるトランザクション(上記における①～⑥)の原子性は保たれる。しかし、DB へのコミットは IM-DB データ同期制御によって制御されているため、コミットが(7)の直後に実行されない場合がある。

アプリケーションによるデータアクセス(レコード全件削除時)

レコード全件削除関数は同一トランザクション内で他の更新系 DB アクセス API と併用することができないため、アプリケーションは下記のようにデータアクセスを行う。

①トランザクション開始関数
②レコード全件削除関数
・テーブル ID : 101 (USER_TABLE01)
③コミット
④トランザクション開始関数
⑤レコード全件削除関数
・テーブル ID : 102 (USER_TABLE02)
⑥コミット

DB への反映順序(レコード全件削除時)

アプリケーションによるコミット後、IM-DB データ同期制御によって下記の順番で DB を更新する。

- (1)②のレコード全件削除を反映する。USER_TABLE01 のように、DACENV 節-TABLE 項の TRUNCATETYPE パラメータに TEMPLATE を指定していた場合は、SQL 雛形ファイルに定義された SQL(ここでは<SQL (E)>)を実行することで

レコードを全件削除する。

(2)⑤のレコード全件削除を反映する。USER_TABLE02 のように、DACENV 節-TABLE 項の TRUNCATETYPE パラメータに DELETE/TRUNCATE を指定していた場合、または省略していた場合は、自動生成した SQL を実行することでレコードを全件削除する。(SQL 雛形ファイルに定義された SQL は実行されない)

2. 7 DBCTRL (DB 接続管理機能)

2. 7. 1 DBCTRL 節

形式

```
$DBCTRL
    %CONTROL
        パラメータ記述
    ;
    {%INSTANCE
        パラメータ記述
    ;} ...
    {%RGSET
        パラメータ記述
        [%RGIDSET
            パラメータ記述
        ;] ...
    ;} ...
    [%INSTANCEGRP
        パラメータ記述
    ;] ...
;
```

説明

データベース接続に関する環境定義(論理システム単位、省略可)
省略した場合、DB 接続管理機能は動作しない。

項の説明

CONTROL 項

ヘルスチェック間隔などの制御に関する定義を行う。(必須、繰り返しなし)

INSTANCE 項

データベース・インスタンスの情報に関する定義を行う。
(最低 1 個必須、DBCTRL 節内で最大 32 個まで定義可能)

RGSET 項

リソースグループが使用するデータベース・インスタンスを定義する。(最低 1 個必須、DBCTRL 節内で最大 32 個まで定義可能)

RGIDSET 項

リソースグループに紐付くリソースグループ ID を定義する。
(省略可、DBCTRL 節内で最大 100 個まで定義可能)
省略した場合は RGID による制御は行えない。

INSTANCEGRP 項

接続時に指定する RGSET が切り替わるデータベース・インスタンスのグループを定義する。
(省略可、DBCTRL 節内で最大 16 個まで定義可能)
インスタンスグループが1つとなる場合のみ省略可。その場合は、DBCTRL-INSTANCE 項の先頭2つ (INSTANCE 項が 1 つしか定義されていない場合は、その 1 つ) のデータベース・インスタンスを 1 つのインスタンスグループとして扱う。

2. 7. 2 CONTROL 項

形式

%CONTROL		
PORTNUM	=	DB ヘルスチェックデーモンが使用するポート番号
[, INTERVAL1	=	稼働 DB ヘルスチェック処理間隔時間]
[, INTERVAL2	=	障害 DB ヘルスチェック処理間隔時間]
[, RETRY	=	SQL 発行のリトライ回数]
[, DEFAULTRGSET	=	デフォルトで使用する RGSET 名]
[, CONNECTEXIT	=	データベース接続出口関数名]
[, MULTI	=	データベース接続多重度]
[, DBTYPE	=	{ORACLE POSTGRESQL}]
;		

説明

ヘルスチェック間隔などの制御に関する定義を行う。

パラメータの説明

PORTNUM

DB ヘルスチェックデーモンがソケット通信の際に使用するポート番号またはサービス名を英数字 1～31 バイトで定義する。(必須、ポート番号で定義する場合は 1～65535 の範囲で定義する)

INTERVAL1

正常稼働中のデータベース・インスタンスをヘルスチェックする間隔を 1～1000000 の整数で定義する。100 の位で四捨五入される。1000 未満が指定された場合は、1000 が設定される。(単位：ミリ秒、省略可、既定値：1000)

INTERVAL2

障害中のデータベース・インスタンスを復旧検出するためのヘルスチェック間隔を 1～1000000 の整数で定義する。100 の位で四捨五入される。1000 未満が指定された場合は、1000 が設定される。(単位：ミリ秒、省略可、既定値：1000)

RETRY

データベース・インスタンスを障害と判定するまでの SQL 発行リトライ回数を 0～9999999 の整数で定義する。0 が設定されている場合は、初回 SQL 異常検出時にデータベース・インスタンスを障害と判定する。
(単位：回数、省略可能、既定値：0)

DEFAULTRGSET

リソースグループに依存しない処理の場合、またはバッチ AP 制御において DB を使用する場合に、デフォルトで使用する RGSET を英数字 1～31 バイトで指定する。
(省略可能、既定値：DBCTRL 節に一番初めに定義されている RGSET)

CONNECTEXIT

データベースに接続するためのデータベース接続出口関数名を英数字 1～30 バイトで指定する。
CONNECTEXIT と、DBCTRL-INSTANCE 項の USERID と PASSWORD の両方が設定されている場合は、データベース接続出口関数を用いて接続を行う。
省略時は DBCTRL-INSTANCE 項の USERID と PASSWORD を用いて接続を行う。
(DBCTRL-INSTANCE 項の全ての USERID と PASSWORD が指定されている場合のみ省略可能)

MULTI

トランザクション終了時に実行するデータベース再接続処理において、データベースへの接続処理要求の集中を避けるため、インスタンス単位に各動作ノード内で同時に接続処理要求できる最大多重度を 1～9999999 の整数で定義する。

(省略可能、既定値：20)

DBTYPE

論理システム内で接続するデータベース種別を定義する。

省略した場合、ORACLE が設定される。

パラメータ	説明
<u>ORACLE</u>	OracleDB
POSTGRESQL	PostgreSQL

注意事項

- DEFAULTRGSET に指定するリソースグループセット名は、DBCTRL-RGSET 項の NAME パラメータで定義されていなければならない。

2. 7. 3 INSTANCE 項

形式

%INSTANCE		
DBNAME	=	データベース名
,DBLNODENAME	=	データベースノード名
[, USERID	=	ユーザ名]
[, PASSWORD	=	パスワード]
;		

説明

データベース・インスタンスの情報に関する定義を行う。

パラメータの説明

DBNAME

データベース名を英数字 1～136 バイトで指定する。(必須、DBCTRL 節内で重複不可)
Oracle の場合、ネットサービス名(TNS サービス名)を指定する。
PostgreSQL の場合、接続サービスファイルで設定したサービス名を指定する。

DBLNODENAME

データベースノード名(論理ノード名)を英数字 1～15 バイトで指定する。(必須、DBCTRL 節内で重複不可)

USERID

ユーザ名を英数字 1～30 バイトで指定する。
USERID と、DBCTRL-CONTROL 項の CONNECTEXIT の両方が設定されている場合は、CONNECTEXIT の設定を優先する。
(DBCTRL-CONTROL-CONNECTEXIT パラメータにデータベース接続出口関数名が設定してある場合のみ省略可能)

PASSWORD

パスワードを英数字 1～30 バイトで指定する。
PASSWORD と、DBCTRL-CONTROL 項の CONNECTEXIT の両方が設定されている場合は、CONNECTEXIT の設定を優先する。
(DBCTRL-CONTROL-CONNECTEXIT パラメータにデータベース接続出口関数名が設定してある場合のみ省略可能)

注意事項

- USERID, PASSWORD を指定して接続をおこなう場合、パスワードの有効期限切れ数日前(接続時に ORA-28002 が発生するようになるタイミング)から接続ができなくなるため、有効期限を設定する場合は余裕をもって有効期限の更新をおこなう必要がある。

2.7.4 RGSET 項

形式

```
%RGSET
    NAME          = RGSET 名
    , DBNAME      = データベース名
;
```

説明

リソースグループが使用するデータベース・インスタンスを定義する。

パラメータの説明

NAME

リソースグループセットの名称を英数字 1～31 バイトで定義する。(必須、DBCTRL 節内で重複不可)

DBNAME

データベース・インスタンスを、英数字 1～136 バイトのデータベース名で指定する。(必須、RGSET 項内で繰り返しなし、DBCTRL 節内で重複不可)

注意事項

- RGSET 項で記述するデータベース名は、DBCTRL-INSTANCE 項の DBNAME パラメータで定義されていなければならない。

2.7.5 RGIDSET 項

形式

```
%RGIDSET
    [ RGID      = リソースグループ ID] ...
    [, RGIDMIN  = 範囲指定する RGID の下限値]
    [, RGIDMAX  = 範囲指定する RGID の上限値]
;
```

説明

リソースグループに紐付くリソースグループ ID を定義する。

パラメータの説明

RGID

リソースグループセットに含まれるリソースグループ ID を 00～99 の整数で定義する。
(RGIDMIN/RGIDMAX が定義されている場合のみ省略可能、DBCTRL 節内で最大 100 個定義可能、DBCTRL 節内で RGID の重複不可)

RGIDMIN

リソースグループセットに含まれるリソースグループ ID を範囲指定する際の下限値を 00～99 の整数で定義する。本パラメータは RGIDMAX とセットで使用する。
(RGID が定義されている場合のみ省略可能、省略時は「0xFF」、RGIDSET 内で 1 つのみ定義可能、DBCTRL 節内で RGID の重複不可)

RGIDMAX

リソースグループセットに含まれるリソースグループ ID を範囲指定する際の上限値を 00～99 の整数で定義する。本パラメータは RGIDMIN とセットで使用する。
(RGID が定義されている場合のみ省略可能、省略時は「0xFF」、RGIDSET 内で 1 つのみ定義可能、DBCTRL 節内で RGID の重複不可)

注意事項

- リソースグループセットに含まれるリソースグループ ID の範囲指定を複数行いたい場合は、RGIDSET 項を複数定義する。
- RGIDSET 項配下に RGID と、RGIDMIN/RGIDMAX の両方の定義を可能とする。
- RGIDMIN < RGIDMAX でなければならない。
- DBCTRL 節内で RGID の重複不可とは、DBCTRL 節内で、RGIDMIN～RGIDMAX で指定される範囲の RGID と、RGID パラメータで指定される RGID 全てにおいて重複があってはいけないという事を意味する。従って、下記のような定義は不可とする。

```
%RGSET
    NAME              = RGSET1
    DBNAME            = INSTANCE3
    %RGIDSET
        RGID          = 2
        ,RGID          = 5
        ,RGIDMIN       = 15
        ,RGIDMAX       = 20
    ;
    %RGIDSET
        RGIDMIN        = 1 ... 1 つめの%RGIDSET で「2」「5」が定義されているため 1～10 の範囲は
        RGIDMAX        = 10 指定できない
    ;
```

;

2. 7. 6 INSTANCEGRP 項

形式

```
%INSTANCEGRP
    NAME      = インスタンスグループ名
    , DBNAME1  = データベース名
    [, DBNAME2 = データベース名]
;
```

説明

接続時に指定する RGSET が切り替わるデータベース・インスタンスのグループを定義する。

パラメータの説明

NAME

インスタンスグループの名称を英数字 1～31 バイトで定義する。(必須、DBCTRL 節内で重複不可)

DBNAME1

本インスタンスグループに属する 1 つ目のデータベース・インスタンスのデータベース名を、英数字 1～136 バイトで指定する。(必須、DBNAME1 と DBNAME2 を合わせて DBCTRL 節内で重複不可)

DBNAME2

本インスタンスグループに属する 2 つ目のデータベース・インスタンスのデータベース名を、英数字 1～136 バイトで指定する。インスタンスグループにデータベース・インスタンスを 1 つしか含まない場合、本パラメータは省略可能。

(省略可能、DBNAME1 と DBNAME2 を合わせて DBCTRL 節内で重複不可)

注意事項

- DBNAME1、DBNAME2 に指定するデータベース名は、DBCTRL-INSTANCE 項の DBNAME パラメータで定義されていなければならない。
- 本項は、インスタンスグループが 1 つとなる場合のみ省略可。その場合は、DBCTRL-INSTANCE 項の先頭 2 つ (INSTANCE 項が 1 つしか定義されていない場合は、その 1 つ) のデータベース・インスタンスを 1 つのインスタンスグループとして取り扱う。

2. 8 DELAYED (ディレード転送機能)

2. 8. 1 DELAYED 節

形式

\$DELAYED
[%COMMON
パラメータ記述
;]
[%PATHCTRL
パラメータ記述
;]
[%LOCATIONCTRL
パラメータ記述
;]
[%DSAM
パラメータ記述
[%DEFAULT
パラメータ記述
;]
;]
[%SENDER
[%DEFAULT
パラメータ記述
;]
;]
[%RECEIVER
[%DEFAULT
パラメータ記述
;]
;]
[%LOGREADER
[%DEFAULT
パラメータ記述
;]
;]
%UNITGROUP
パラメータ記述
[%SNDUNIT
パラメータ記述
;]
[%RCVUNIT
パラメータ記述
;]
[%LRDUNIT
パラメータ記述
;]...
;...
%SUPERSTREAM

```
        パラメータ記述
        [%SNDUNIT
            パラメータ記述
        ;]
        [%RCVUNIT
            パラメータ記述
        ;]
        [%LRDUNIT
            パラメータ記述
        ;]...
    ;...
;
```

説明

ディレード転送機能に関する環境を定義する。(論理システム単位、省略可)
省略した場合、ディレード転送機能は動作しない。

項の説明

COMMON 項

ディレード転送全体に関わる定義をおこなう。(最大 1 個、省略可)
本項目を省略した場合は既定値で動作する。

PATHCTRL 項

通信制御機能の動作条件定義を行う。(最大 1 個、省略可)
本項目を省略した場合は既定値で動作する。

LOCATIONCTRL 項

ストリーム所在管理機能の動作条件定義を行う。(最大 1 個、省略可)
本項目を省略した場合は既定値で動作する。

DSAM 項

DSAM の動作条件定義を行う。(最大 1 個、省略可)
本項目を省略した場合は既定値で動作する。

SENDER 項

センダの動作条件定義を行う。(最大 1 個、省略可)
センダ機能を使用しない場合、および既定値情報を定義する必要がない場合、本項目は省略可である。

RECEIVER 項

レシーバの動作条件定義を行う。(最大 1 個、省略可)
レシーバ機能を使用しない場合、および既定値情報を定義する必要がない場合、本項目は省略可である。

LOGREADER 項

ログリーダの動作条件定義を行う。(最大 1 個、省略可)
ログリーダ機能を使用しない場合、および既定値情報を定義する必要がない場合、本項目は省略可である。

DEFAULT 項

DSAM 項、SENDER 項、RECEIVER 項、LOGREADER 項配下で既定値パラメータを定義する場合に指定する。(項配下に最大 1 個、省略可)
既定値情報を定義する必要がない場合、本項目は省略可である。

UNITGROUP 項

ユニットグループの定義をおこなう。(最大 128 個、必須)

UNITGROUP 配下には、SNDUNIT か LRDUNIT を少なくとも 1 つ定義する必要がある。

SUPERSTREAM 項

スーパーストリームの動作条件定義を行う。(最大 1024 個、必須)

論理システム内に所属するスーパーストリームの数だけ、本項目を指定する。

SNDUNIT 項

センダユニットの定義をおこなう。(UNITGROUP 項、SUPERSTREAM 項ごとに最大 1 個、省略可)

省略した場合、該当スーパーストリーム上ではセンダ機能は動作しない。

RCVUNIT 項

レシーバユニットの定義をおこなう。(UNITGROUP 項、SUPERSTREAM 項ごとに最大 1 個、省略可)

POOLTYPE=RECEIVER のユニットグループ、およびそのユニットグループを使用するスーパーストリーム配下にのみ定義可能である。

LRDUNIT 項

ログリーダーユニットの定義をおこなう。(UNITGROUP 項、SUPERSTREAM 項ごとに最大 16 個、省略可)

省略した場合、該当スーパーストリーム上ではログリーダー機能は動作しない。

2. 8. 2 COMMON 項

形式

%COMMON		
[DBLAYER	=	{AP OLTP <u>NONE</u> }]
[, FAILOVER	=	{YES <u>NO</u> }]
[, DMNRESTINVL	=	実行デーモン再起動リトライ間隔]
[, DMNDOWNCNT	=	実行デーモン再起動中止判定回数]
[, DMNDOWNTIME	=	実行デーモン再起動中止判定時間]
[, RCVRYCHKINVL	=	障害復旧監視間隔]
;		

説明

ディレード転送全体に関わる定義をおこなう。
全てのパラメータを省略する場合は COMMON 項の省略が可能である。

パラメータの説明

DBLAYER

Oracle プールファイルで処理をおこなうスーパーストリームの実行デーモン動作ノードをノード種別で指定する。
省略時の既定値は NONE だが、UNITGROUP 項-POOLFILE に DB を指定したストリームを 1 つでも定義した場合、本パラメータは必須となる。

FAILOVER

死活監視機能による制御デーモンの再起動リトライオーバー時、該当ノードをフェイルオーバー対象とするかを指定する。
省略した場合は、NO が指定されたものとする。

DMNRESTINVL

センダ、レシーバ、ログリーダの制御デーモンが実行デーモンの異常終了を検出した際の再起動処理で、再起動に失敗した場合のリトライ間隔(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。
省略した場合は、5 が指定されたものとする。

DMNDOWNCNT

センダ、レシーバ、ログリーダの制御デーモンが実行デーモンの異常終了を検出した際の再起動処理を中止すると判断するため回数を 1 から 100 までの整数で指定する。
省略した場合は、5 が指定されたものとする。

DMNDOWNTIME

センダ、レシーバ、ログリーダの制御デーモンが実行デーモンの異常終了を検出した際の再起動処理を中止すると判断するための時間(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。
省略した場合は、60 が指定されたものとする。
最初の再起動から、DMNDOWNTIME の間に、DMNDOWNCNT 回の再起動に失敗したら、再起動処理を中止し、コマンドによる再起動まで再起動されなくなる。
本パラメータには、DMNRESTINVL×DMNDOWNCNT に対して十分大きな値を指定すること。

RCVRYCHKINVL

センダ、レシーバ、ログリーダのデーモンが動作ノードの確認、及び復旧監視を行う間隔(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。
省略した場合は、60 が指定されたものとする。

2. 8. 3 PATHCTRL 項

形式

%PATHCTRL		
[MAXTHR_C	=	通信デーモン送受信処理最大スレッド数]
[, MINTHR_C	=	通信デーモン送受信処理最小スレッド数]
[, MAXTHR_D	=	振り分けデーモン送受信処理最大スレッド数]
[, MINTHR_D	=	振り分けデーモン送受信処理最小スレッド数]
[, RCHKINVL	=	復旧監視間隔]
[, HCHKINVL	=	ヘルスチェック間隔]
[, DLSIDLETIME	=	相手論理システム通信対象外判定時間]
;		

説明

通信制御機能の動作条件定義を行う。
全てのパラメータを省略する場合は PATHCTRL 項の省略が可能である。

パラメータの説明

MAXTHR_C

通信デーモンの送受信処理最大スレッド数を 1 から 2048 までの整数で指定する。
省略した場合、MINTHR_C パラメータと同じ値になる。
MINTHR_C 以上の値を指定すること。

MINTHR_C

通信デーモンの送受信処理最小スレッド数を 1 から 2048 までの整数で指定する。
省略した場合、1 になる。

MAXTHR_D

振り分けデーモンの送受信処理最大スレッド数を 1 から 2048 までの整数で指定する。
省略した場合、MINTHR_D パラメータと同じ値になる。
MINTHR_D 以上の値を指定すること。

MINTHR_D

振り分けデーモンの送受信処理最小スレッド数を 1 から 2048 までの整数で指定する。
省略した場合、1 になる。

RCHKINVL

切断検出時の復旧監視間隔(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。
省略した場合、60 になる。

HCHKINVL

送受信がおこなわれていないパスに対してヘルスチェックを実施する間隔(秒)を 0 から 3600 までの整数で指定する。0 を指定した場合、送受信のおこなわれていないパスに対するヘルスチェックはおこなわれない。
省略した場合、0 になる。

DLSIDLETIME

一定時間送受信がおこなわれていない相手論理システムに対して、通信対象外と判断するまでの時間(分)を 1 から 1440 までの整数で指定する。
省略した場合、60 になる。

2. 8. 4 LOCATIONCTRL 項

形式

```
%LOCATIONCTRL
[ CHKINVL  = ヘルスチェック間隔]
[,CHKRETRY = ヘルスチェックリトライ回数]
[,INITWAIT = ストリーム所在管理エージェント受付時間]
;
```

説明

ストリーム所在管理機能の動作条件定義を行う。

ORACLE を使用しない場合や、全てのパラメータを省略する場合は LOCATIONCTRL 項の省略が可能である。

パラメータの説明

CHKINVL

監視対象ノードのヘルスチェックを行う時間間隔(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。

監視対象となるノードは COMMON 項-DBLAYER に定義したノード種別のノード、および AP ノードである。

省略した場合、3 秒になる。

CHKRETRY

監視対象ノードのヘルスチェックを行う際のリトライ回数を 1 から 99 までの整数で指定する。

省略した場合、3 回になる。

INITWAIT

ストリーム所在管理マネージャデーモン起動時に、ストリーム所在管理エージェントデーモンとの接続を受け付ける時間間隔(秒)を 1～3600 までの整数で指定する。

省略した場合、300 秒になる。

2. 8. 5 DSAM 項

形式

%DSAM		
[DELINVL_IM	=	ログデータ削除監視間隔(IM)]
[, DELINVL_DB	=	ログデータ削除監視間隔(DB)]
[%DEFAULT		
[STACKNUM	=	プールファイルのスタックファイル数]
[, SWAPSIZE	=	スワップサイズ]
[, DELSTACKCNT	=	削除スタック数]
[, COMPRESS	=	{YES <u>NO</u> }]
;]		
;		

説明

DSAM の動作条件定義を行う。
全てのパラメータを省略する場合は DSAM 項の省略が可能である。

パラメータの説明

DELINVL_IM

IM のプールファイルから処理済みとなったログデータを削除する間隔(分)を 1 から 1440 までの整数で指定する。
省略した場合は、10 が指定されたものとする。

DELINVL_DB

DB のプールファイルから処理済みとなったログデータを削除する間隔(分)を 1 から 1440 までの整数で指定する。
省略した場合は、60 が指定されたものとする。

STACKNUM

UNITGROUP 項-POOLFILE=IM の場合、IM のプールファイルを構成するスタックファイル数(IM 表数)を 2～99 の整数で指定する。
UNITGROUP 項-POOLFILE=DB の場合、プールファイルを構成するスタックファイルのパーティション数を 2～99 の整数で指定する。
省略した場合 5 が指定されたものとする。

SWAPSIZE

1 スタックファイルに格納するデータサイズの上限值(メガバイト)の既定値を 1 以上の整数で指定する。
格納データサイズが本値に至った際、出力先を次スタックファイルへスワップする。
省略した場合は、100 が指定されたものとする。

DELSTACKCNT

削除するスタックファイル数を 0 から 99 までの整数で指定する。
省略した場合は、2 が指定されたものとする。
ログデータの出力先スタックファイルの次から、本値に指定されたスタックファイル数分が削除対象となる。このため、全スタックファイルのログデータが処理済となっても、本値のスタックファイル数分のみが削除される。
0 を指定した場合は、処理済となった全スタックファイルを削除する。
スーパーストリームに設定したスタックファイル総数よりも大きい値を設定した場合も、処理済となった全スタックファイルを削除する。

COMPRESS

ログデータの圧縮を行うか否かを指定する。

YES : 圧縮を行う

NO : 圧縮を行わない(既定値)

2. 8. 6 SENDER 項

形式

%SENDER		
%DEFAULT		
[MSGSIZE	=	電文サイズ]
[, CHKINVL_IM	=	データ発生監視間隔(IM)]
[, CHKINVL_DB	=	データ発生監視間隔(DB)]
[, PSENDCNT	=	1 ペーシングあたりの送信電文数]
[, PRTYINVL	=	ペーシング要求電文再送間隔]
[, PRTYMAX	=	ペーシング要求電文再送回数]
[, MSGDLYCNT	=	電文送信遅延電文数]
[, MSGDLYTIME	=	電文送信遅延間隔]
[, CRTYINVL	=	制御電文再送間隔]
[, CRTYMAX	=	制御電文再送回数]
;		
;		

説明

センダの動作条件定義を行う。
全てのパラメータを省略する場合は SENDER 項の省略が可能である。

パラメータの説明

MSGSIZE

センダが転送するログデータ電文の最大電文長(バイト)の既定値を 1024 から 524288 までの整数で指定する。
省略した場合は、16384 が指定されたものとする。

CHKINVL_IM

POOLFILE=IM を指定した UNITGROUP に対する、データ発生監視タイマの間隔(ミリ秒)の既定値を 10 から 60000 までの整数で指定する。
省略した場合は、1000 が指定されたものとする。

CHKINVL_DB

POOLFILE=DB を指定した UNITGROUP に対する、データ発生監視タイマの間隔(ミリ秒)の既定値を 10 から 60000 までの整数で指定する。
省略した場合は、10000 が指定されたものとする。

PSENDCNT

1 ペーシングあたりの送信電文数の既定値を 1 以上の整数で指定する。
省略した場合は、10 が指定されたものとする。

PRTYINVL

ペーシング要求電文の再送を行う間隔(秒)の既定値を 1 から 3600 までの整数で指定する。
省略した場合は、60 が指定されたものとする。

PRTYMAX

ペーシング要求電文の再送を行う回数の既定値を 0 から 255 までの整数で指定する。
省略した場合は、5 が指定されたものとする。

MSGDLYCNT

一定間隔で処理を遅延させながらログデータ電文を送信する場合に、連続して送信するログデータ電文数の既定値を 1 以上の整数で指定する。

本値の電文数ごとに、MSGDLYTIME の時間で処理を遅延させながら送信する。

省略された場合は 1 が指定されたものとする。

MSGDLYTIME

一定間隔で処理を遅延させながらログデータ電文を送信する場合に、MSGDLYCNT の電文数毎に遅延させる時間(ミリ秒)の既定値を 0 から 1000 の整数で指定する。

省略された場合は 0 が指定されたものとする。

CRTYINVL

制御電文(開始要求、停止要求、ディビジョン終了要求)の再送を行う間隔(秒)の既定値を 1 から 3600 までの整数で指定する。

省略した場合は、60 が指定されたものとする。

CRTYMAX

制御電文(開始要求、停止要求、ディビジョン終了要求)の再送を行う回数の既定値を 0 から 255 までの整数で指定する。

省略した場合は、5 が指定されたものとする。

2. 8. 7 RECEIVER 項

形式

%RECEIVER		
%DEFAULT		
[MSGSIZE	=	電文サイズ]
[, MSGPERCMT	=	1 コミットあたりの電文受信数]
[, CRTYINVL	=	制御電文再送間隔]
[, CRTYMAX	=	制御電文再送回数]
;		
;		

説明

レシーバの動作条件定義を行う。
全てのパラメータを省略する場合は RECEIVER 項の省略が可能である。

パラメータの説明

MGSSIZE

レシーバが受信するログデータ電文の最大電文長(バイト)の既定値を 1024 から 524288 までの整数で指定する。
省略した場合は、16384 が指定されたものとする。

MSGPERCMT

1 コミットあたりに何件のログデータ電文を受信するか of 既定値を 0 から 100 までの整数で指定する。
0 を指定した場合は、1 ページング分のログデータ電文を受信してコミットする。
省略した場合は、1 が指定されたものとする。

CRTYINVL

制御電文(開始要求、停止要求)の再送を行う間隔(秒)の既定値を 1 から 3600 までの整数で指定する。
省略した場合は、60 が指定されたものとする。

CRTYMAX

制御電文(開始要求、停止要求)の再送を行う回数の既定値を 0 から 255 までの整数で指定する。
省略した場合は、5 が指定されたものとする。

2. 8. 8 LOGREADER 項

形式

%LOGREADER		
%DEFAULT		
[DATAPERLOT	=	コミット係数]
[, CHKINVL_IM	=	データ発生監視間隔(IM)]
[, CHKINVL_DB	=	データ発生監視間隔(DB)]
[, DLYTIME	=	処理遅延間隔]
[, PERF	=	{YES NO}]
[, ELPOVER	=	{MSG STOP}]
[, ELPTIME	=	経過時間制限値]
[, ELPRESET	=	経過時間リセット最大回数]
[, CPUTIME	=	CPU 時間制限値]
[, RETRY	=	リトライ最大回数]
[, DATABUFSIZE	=	ログデータ格納領域サイズ]
[, PRCINIT	=	ユーザ用プロセス初期化处理]
[, PRCTERM	=	ユーザ用プロセス終了処理]
[, TRNINIT	=	ユーザ用トランザクション初期化处理]
[, TRNTERM	=	ユーザ用トランザクション終了処理]
[, MAINAP	=	ユーザ用ログデータ実行メイン処理]
;		
;		

説明

ログリーダの動作条件定義を行う。
全てのパラメータを省略する場合は LOGREADER 項の省略が可能である。

パラメータの説明

DATAPERLOT

データ処理において、ロットとしてまとめて処理を行うログデータ件数の既定値を 1 から 100 までの整数で指定する。本件数を 1 ロットとして、コミット発行が行われる。
省略した場合は 1 が指定されたものとする。

CHKINVL_IM

POOLFILE=IM を指定した UNITGROUP に対する、データ発生監視タイマの間隔(ミリ秒)の既定値を 10 から 60000 までの整数で指定する。
省略した場合は、1000 が指定されたものとする。

CHKINVL_DB

POOLFILE=DB を指定した UNITGROUP に対する、データ発生監視タイマの間隔(ミリ秒)の既定値を 10 から 60000 までの整数で指定する。
省略した場合は、10000 が指定されたものとする。

DLYTIME

データ処理において、ロット単位に処理を遅延させる時間(ミリ秒)の既定値を 0 から 60000 の整数で指定する。
省略された場合は 0(ミリ秒)が指定されたものとする。

PERF

ユーザアプリケーションの性能情報を収集するかどうかの既定値を指定する。

- YES : 稼動統計情報を収集する。
NO : 稼動統計情報を収集しない(既定値)。

ELPOVER

ログリーダーのデーモンが呼び出しているユーザの関数処理の経過時間が制限値を超過した時、または経過時間リセット回数が最大回数を越えた時の処置の既定値を指定する。

- MSG : 超過時にメッセージのみ出力する(既定値)。
STOP : 超過時にプロセスを強制終了する(リトライオーバーするまでは再起動される)。
省略した場合は、MSG が指定されたものとする。

ELPTIME

ログデータ毎の経過時間を制限する時間(秒)の既定値を 0 から 999999 の整数で指定する。
経過時間が制限値を超過した時は、LOGREADER 項 ELPOVER パラメータの指定に従って処置される。
0 を指定した場合、無制限となる。
省略された場合は 0(無制限)が指定されたものとする。

ELPRESET

ログデータ毎の経過時間および CPU 時間のリセットを許可する回数の既定値を 0 から 999999 の整数で指定する。リセット要求の最大回数が制限値を超過した時は、経過時間リセット API(diosaetgreset)が異常終了する。
0 を指定した場合、無制限となる。
省略された場合は 0(無制限)が指定されたものとする。

CPUTIME

ログデータ毎の CPU 時間制限時間(秒)の既定値を 0 から 999999 の整数で指定する。
CPU 時間が制限値を超過した時は、プロセスを強制終了する(リトライオーバーするまでは再起動される)。
0 を指定した場合、無制限となる。
省略された場合は 0(無制限)が指定されたものとする。

RETRY

ロールバックリトライを行う最大回数の既定値を 0 から 9999 の整数で指定する。
最大回数を越えるリトライが発生した時には、異常終了処理が行われる。
0 を指定した場合、無制限となる。
省略された場合は 0(無制限)が指定されたものとする。
※注意) リトライ回数の定義であるため、異常終了処理となるまでの実行回数は指定値+2回となる

DATABUFSIZE

プールファイルから読み込んだログデータを格納するバッファのサイズ(キロバイト)の初期値の既定値を 1 から 2097151 の整数で指定する。
本値より大きいログデータが存在した際は、バッファサイズの自動拡張を行う。
省略した場合は、1024 が指定されたものとする。

PRCINIT

ログリーダー実行デーモンのプロセス初期化時に呼び出す利用者出口名の既定値を 30 文字の英数字で指定する。
省略された場合は、利用者出口の呼び出しをおこなわない。

PRCTERM

ログリーダー実行デーモンのプロセス終了時に呼び出す利用者出口名の既定値を 30 文字の英数字で指定する。
省略された場合は、利用者出口の呼び出しをおこなわない。

TRNINIT

ログリーダー実行デーモンのトランザクション初期化時に呼び出す利用者出口名の既定値を 30 文字の英数字で指定する。

省略された場合は、利用者出口の呼び出しをおこなわない。

TRNTERM

ログリーダー実行デーモンのトランザクション終了時に呼び出す利用者出口名の既定値を 30 文字の英数字で指定する。

省略された場合は、利用者出口の呼び出しをおこなわない。

MAINAP

ログデータ実行メイン処理として呼び出す利用者出口名の既定値を 30 文字の英数字で指定する。

センタ間レプリケーション機能の更新ログ反映を利用する場合は、以下をいずれかを指定する。

なお、いずれかを指定した場合は、PRCINIT、PRCTERM、TRNINIT、TRNTERM は指定が無効となる。

IM 更新ユニット : DILOGUPDIM

DB 更新ユニット : DILOGUPDDB

ここで指定した値が、UNITGROUP-LRDUNIT-MAINAP を省略した場合の既定値になるため、省略した場合は、LRDUNIT 項配下の MAINAP が省略不可となる。

2. 8. 9 UNITGROUP 項

形式

```
%UNITGROUP
    NAME          = ユニットグループ名
    , POOLTYPE     = {WRITER|RECEIVER}
    , POOLFILE     = {IM|DB}
    [, POOLFILEID  = プールファイル ID]
    [, RGSETNAME   = リソースグループセット名]
    [, BLOCKSTATUS = {ACT|BLK}]
;
```

説明

ユニットグループを定義する。
UNITGROUP 項は最大 128 回繰り返し指定ができる。

パラメータの説明

NAME

ユニットグループ名を 15 文字以内の英数字で指定する。

POOLTYPE

プールファイルの種別を指定する。

WRITER : ライタによる書き込みがおこなわれるプールファイル
RECEIVER : レシーバによる書き込みがおこなわれるプールファイル

POOLFILE

ログデータ格納先を指定する

IM : ログデータを IM のプールファイルに格納する
DB : ログデータを Oracle のプールファイルに格納する *1

*1 DBCTRL 節-CONTROL 項-DBTYPE に ORACLE を指定した場合のみ、DB を指定できる

POOLFILEID

プールファイルを識別するための ID を 0 から 99 の整数で指定する。
複数の SUPERSTREAM 項において、同一 MAPID を指定する場合は、他の SUPERSTREAM 項-POOLFILEID と重複しない値を指定する必要がある。
省略した場合は、0 が指定されたものとする。

RGSETNAME

DB 接続に使用する RGSET 名を 31 文字以内の英数字で指定する。
省略した場合は、DBCTRL 節-CONTROL 項-DEFAULTRGSET が使用される。

BLOCKSTATUS

初期無効化状態を指定する。
ACT : 有効
BLK : 無効
省略した場合は、ACT となる。

2. 8. 10 SNDUNIT 項

形式

%SNDUNIT		
NAME	=	ユニット名
[, DLSNAME	=	相手論理システム名]
[, BLOCKSTATUS	=	{ <u>ACT</u> BLK}]
[, MSGSIZE	=	電文サイズ]
[, CHKINVL	=	データ発生監視間隔]
[, PSENDCNT	=	1 ペーシングあたりの送信電文数]
[, PRTYINVL	=	ペーシング要求再送間隔]
[, PRTYMAX	=	ペーシング要求再送回数]
[, MSGDLYCNT	=	電文送信遅延電文数]
[, MSGDLYTIME	=	電文送信遅延間隔]
[, CRTYINVL	=	制御電文再送間隔]
[, CRTYMAX	=	制御電文再送回数]
;		

説明

UNITGROUP 項、および SUPERSTREAM 項配下に定義可能な、センダユニットの情報を定義する。
特に記述がない場合、パラメータは両方の項配下で定義可能である。
UNITGROUP 項配下では、必要なユニットを全て定義する必要がある。SUPERSTREAM 項単位に定義を変える必要がある場合のみ、SUPERSTREAM 項配下にも同一ユニット名で定義をおこなうことで、UNITGROUP 項配下で定義された値を上書きすることが可能である。
パラメータの説明に書かれている省略時の既定値は、UNITGROUP 項、SUPERSTREAM 項の両方で定義が省略された場合の既定値である。
SNDUNIT 項は UNITGROUP 項配下に、最大 1 回指定ができる。
UNITGROUP 項配下に SNDUNIT 項、LRDUNIT 項のいずれかを少なくとも 1 つ定義する必要がある。

パラメータの説明

NAME

ユニット名を 15 文字以内の英数字で指定する。

DLSNAME

スーパーストリームが接続する相手論理システム名を 15 文字以内の英数字で指定する。
UNITGROUP 項配下の SNDUNIT 項では必須、SUPERSTREAM 項配下の SNDUNIT 項では定義不可。
DLSNAME は SYSMAP 節-LOGSYSTEM 項-LSNAME に存在しなければならない。

BLOCKSTATUS

初期無効化状態を指定する。
ACT : 有効
BLK : 無効
省略した場合、ACT となる。

MSGSIZE

センダが送信するログデータ電文の最大電文長を 1024 から 524288 (バイト) までの整数で指定する。
省略した場合は、SENDER 項-DEFAULT 項-MSGSIZE の値が適用される。

CHKINVL

データ発生監視タイマの間隔 (ミリ秒) を 10 から 60000 までの整数で指定する。

省略した場合は、UNITGROUP 項-POOLFILE に IM を指定した場合は SENDER 項-DEFAULT 項-CHKINVL_IM の値、UNITGROUP 項-POOLFILE に DB を指定した場合は SENDER 項-DEFAULT 項-CHKINVL_DB の値が適用される。

PSENDCNT

1 ページあたりの送信電文数を 1 以上の整数で指定する。
省略した場合は、SENDER 項-DEFAULT 項-PSENDCNT の値が適用される。

PRTYINVL

ページ要求電文の再送を行う間隔(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。
省略した場合は、SENDER 項-DEFAULT 項-PRTYINVL の値が適用される。

PRTYMAX

ページ要求電文の再送を行う回数を 0 から 255 までの整数で指定する。
省略した場合は、SENDER 項-DEFAULT 項-PRTYMAX の値が適用される。

MSGDLYCNT

一定間隔で処理を遅延させながらログデータ電文を送信する場合に、連続して送信するログデータ電文数を 1 以上の整数で指定する。
本値の電文数ごとに、MSGDLYTIME の時間で処理を遅延させながら送信する。
省略された場合は、SENDER 項-DEFAULT 項-MSGDLYCNT の値が適用される。

MSGDLYTIME

一定間隔で処理を遅延させながらログデータ電文を送信する場合に、MSGDLYCNT の電文数毎に遅延させる時間(ミリ秒)を 0 から 1000 の整数で指定する。
省略された場合は、SENDER 項-DEFAULT 項-MSGDLYTIME の値が適用される。

CRTYINVL

制御電文(開始要求、停止要求、ディビジョン終了要求)の再送を行う間隔(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。
省略した場合は、SENDER 項-DEFAULT 項-CRTYINVL の値が適用される。

CRTYMAX

制御電文(開始要求、停止要求、ディビジョン終了要求)の再送を行う回数を 0 から 255 までの整数で指定する。
省略した場合は、SENDER 項-DEFAULT 項-CRTYMAX の値が適用される。

2. 8. 11 RCVUNIT 項

形式

%RCVUNIT		
NAME	=	ユニット名
[, DLSNAME	=	相手論理システム名]
[, BLOCKSTATUS	=	{ <u>ACT</u> BLK}]
[, MSGSIZE	=	電文サイズ]
[, MSGPERCMT	=	1 コミットあたりの電文受信数]
[, CRTYINVL	=	制御電文再送間隔]
[, CRTYMAX	=	制御電文再送回数]
;		

説明

UNITGROUP 項、および SUPERSTREAM 項配下に定義可能な、レシーバユニットの情報を定義する。
特に記述がない場合、パラメータは両方の項配下で定義可能である。
UNITGROUP 項配下では、必要なユニットを全て定義する必要がある。SUPERSTREAM 項単位に定義を変える必要がある場合のみ、SUPERSTREAM 項配下にも同一ユニット名で定義をおこなうことで、UNITGROUP 項配下で定義された値を上書きすることが可能である。
パラメータの説明に書かれている省略時の既定値は、UNITGROUP 項、SUPERSTREAM 項の両方で定義が省略された場合の既定値である。
UNITGROUP 項-POOLTYPE=RECEIVER の場合、RCVUNIT 項の定義が必須となる。UNITGROUP 項配下には 1 つの RCVUNIT 項のみ記述可能である。
UNITGROUP 項-POOLTYPE=WRITER の場合、RCVUNIT 項は定義できない。

パラメータの説明

NAME

ユニット名を 15 文字以内の英数字で指定する。

DLSNAME

スーパーストリームが接続する相手論理システム名を 15 文字以内の英数字で指定する。
UNITGROUP 項配下の RCVUNIT 項では必須、SUPERSTREAM 項配下の RCVUNIT 項では定義不可。
DLSNAME は SYSMAP 節-LOGSYSTEM 項-LSNAME に存在しなければならない。

BLOCKSTATUS

初期無効化状態を指定する。
ACT : 有効
BLK : 無効
省略した場合、ACT となる。

MSGSIZE

レシーバが受信するログデータ電文の最大電文長を 1024 から 524288(バイト)までの整数で指定する。
省略した場合は、RECEIVER 項-DEFAULT 項-MSGSIZE の値が適用される。

MSGPERCMT

1 コミットあたりに何件のログデータ電文を受信するかを 0 から 100 までの整数で指定する。
0 を指定した場合は、1 ページング分のログデータ電文を受信してコミットする。
省略した場合は、RECEIVER 項-DEFAULT 項-MSGPERCMT の値が適用される。

CRTYINVL

レシーバの制御電文(開始要求、停止要求)の再送を行う間隔(秒)を 1 から 3600 までの整数で指定する。

省略した場合は、RECEIVER 項-DEFAULT 項-CRTYINVL の値が適用される。

CRTYMAX

レシーバの制御電文(開始要求、停止要求)の再送を行う回数を 0 から 255 までの整数で指定する。

省略した場合は、RECEIVER 項-DEFAULT 項-CRTYMAX の値が適用される。

2. 8. 12 LRDUNIT 項

形式

```
%LRDUNIT
    NAME           = ユニット名
    [, BLOCKSTATUS = {ACT|BLK}]
    [, USERDATA    = {IM|DB}]
    [, RGSETNAME    = リソースグループセット名]
    [, DATAPERLOT   = コミット係数]
    [, CHKINVL      = データ発生監視間隔]
    [, DLYTIME      = 処理遅延間隔]
    [, PERF         = {YES|NO}]
    [, ELPOVER      = {MSG|STOP}]
    [, ELPTIME      = 経過時間制限値]
    [, ELPRESET     = 経過時間リセット最大回数]
    [, CPUTIME      = CPU 時間制限値]
    [, RETRY        = リトライ最大回数]
    [, DATABUFSIZE  = ログデータ格納領域サイズ]
    [, PRCINIT      = ユーザ用プロセス初期化处理]
    [, PRCTERM      = ユーザ用プロセス終了処理]
    [, TRNINIT      = ユーザ用トランザクション初期化处理]
    [, TRNTERM      = ユーザ用トランザクション終了処理]
    [, MAINAP       = ユーザ用ログデータ実行メイン処理]
    ;
```

説明

UNITGROUP 項、および SUPERSTREAM 項配下に定義可能な、ログリーダーユニットの情報を定義する。
特に記述がない場合、パラメータは両方の項配下で定義可能である。
UNITGROUP 項配下では、必要なユニットを全て定義する必要がある。SUPERSTREAM 項単位に定義を変える必要がある場合のみ、SUPERSTREAM 項配下にも同一ユニット名で定義をおこなうことで、UNITGROUP 項配下で定義された値を上書きすることが可能である。
パラメータの説明に書かれている省略時の既定値は、UNITGROUP 項、SUPERSTREAM 項の両方で定義が省略された場合の既定値である。
LRDUNIT 項は UNITGROUP 項配下に、最大 16 回指定ができる。
UNITGROUP 項配下に SNDUNIT 項、LRDUNIT 項のいずれかを少なくとも 1 つ定義する必要がある。

パラメータの説明

NAME

ユニット名を 15 文字以内の英数字で指定する。

BLOCKSTATUS

初期無効化状態を指定する。

ACT : 有効

BLK : 無効

省略した場合、ACT となる。

USERDATA

ユーザデータの更新先を指定する

IM : IM のユーザデータを更新する

DB : DB のユーザデータを更新する

UNITGROUP 項配下でのみ定義可能。
省略した場合、UNITGROUP が属する SUPERSTREAM 項-POOLFILE の値が適用される。

RGSETNAME

リソースグループセット名を 31 文字以内の英数字で指定する。
USERDATA が DB のときのみ指定可能。
RGSETNAME は DBCTRL 節-RGSET 項-NAME に存在しなければならない。
ログリーダの RGSETNAME 定義については以下のように定義値を決定する。

- ① UNITGROUP 項-RGSETNAME
- ② UNITGROUP 項-LRDUNIT 項-RGSETNAME
- ③ SUPERSTREAM 項-RGSETNAME
- ④ SUPERSTREAM 項-LRDUNIT 項-RGSETNAME

定義有無				ユーザデータ更新先 RGSET
①	②	③	④	
任意	任意	任意	あり	SUPERSTREAM 項-LRDUNIT 項-RGSETNAME
任意	あり	任意	なし	UNITGROUP 項-LRDUNIT 項-RGSETNAME
任意	なし	あり	なし	SUPERSTREAM 項-RGSETNAME
あり	なし	なし	なし	UNITGROUP 項-RGSETNAME
なし	なし	なし	なし	DBCTRL 節-CONTROL 項-DEFAULTRGSET

DATAPERLOT

データ処理において、ロットとしてまとめて処理を行うログデータ件数を 1 から 100 までの整数で指定する。
本件数を 1 ロットとして、コミット発行が行われる。
省略した場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-DATAPERLOT の値が適用される。

CHKINVL

データ発生監視タイマの間隔(ミリ秒)を 10 から 60000 までの整数で指定する。
省略した場合は、UNITGROUP 項-POOLFILE に IM を指定した場合は LOGREADER 項-DEFAULT 項-CHKINVL_IM の値、UNITGROUP 項-POOLFILE に DB を指定した場合は LOGREADER 項-DEFAULT 項-CHKINVL_DB の値が適用される。

DLYTIME

データ処理において、ロット単位に処理を遅延させる時間(ミリ秒)を 0 から 60000 の整数で指定する。
省略された場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-DLYTIME の値が適用される。

PERF

アプリケーションの性能情報を収集するかしないかを指定する。
省略された場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-PERF の値が適用される。

ELPOVER

ログリーダのデーモンが呼び出しているユーザの関数処理の経過時間が制限値を超過した時、または経過時間リセット回数が最大回数を越えた時の処置を指定する。

- MSG : 超過時にメッセージのみ出力する。
- STOP : 超過時にプロセスを強制終了する(リトライオーバーするまでは再起動される)。

省略された場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-ELPOVER の値が適用される。

ELPTIME

ログデータ毎の経過時間を制限する時間(秒)を 0 から 999999 の整数で指定する。
経過時間が制限値を超過した時は、LOGREADER 項 ELPOVER パラメータの指定に従って処置される。
0 を指定した場合、無制限となる。

省略された場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-ELPTIME の値が適用される。

ELPRESET

ログデータ毎の経過時間および CPU 時間のリセットを許可する回数を 0 から 999999 の整数で指定する。
リセット要求の最大回数が制限値を超過した時は、経過時間リセット API(diosaetgreset)が異常終了する。

0 を指定した場合、無制限となる。

省略された場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-ELPRESET の値が適用される。

CPUTIME

ログデータ毎の CPU 時間制限時間(秒)を 0 から 999999 の整数で指定する。

CPU 時間が制限値を超過した時は、プロセスを強制終了する(リトライオーバーするまでは再起動される)。

0 を指定した場合、無制限となる。

省略された場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-CPUTIME の値が適用される。

RETRY

ロールバックリトライを行う最大回数を 0 から 9999 の整数で指定する。

最大回数を超えるリトライが発生した時には、異常終了処理が行われる。

0 を指定した場合、無制限となる。

省略された場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-RETRY の値が適用される。

※注意) リトライ回数の定義であるため、異常終了処理となるまでの実行回数は指定値+2回となる

DATABUFSIZE

プールファイルから読み込んだログデータを格納するバッファのサイズ(キロバイト)の初期値を 1 から 2097151 の整数で指定する。

本値より大きいログデータが存在した際は、バッファサイズの自動拡張を行う。

省略した場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-DATABUFSIZE の値が適用される。

PRCINIT

ログリーダー実行デーモンのプロセス初期化時に呼び出す利用者出口名を 30 文字の英数字で指定する。

省略された場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-PRCINIT の値が適用される。

LOGREADER 項-DEFAULT 項にも定義されていない場合、プロセス初期化時に利用者出口を呼び出さない。

PRCTERM

ログリーダー実行デーモンのプロセス終了時に呼び出す利用者出口名を 30 文字の英数字で指定する。

省略された場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-PRCTERM の値が適用される。

LOGREADER 項-DEFAULT 項にも定義されていない場合、プロセス終了時に利用者出口を呼び出さない。

TRNINIT

ログリーダー実行デーモンのトランザクション初期化時に呼び出す利用者出口名を 30 文字の英数字で指定する。

省略された場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-TRNINIT の値が適用される。

LOGREADER 項-DEFAULT 項にも定義されていない場合、トランザクション初期化時に利用者出口を呼び出さない。

TRNTERM

ログリーダー実行デーモンのトランザクション終了時に呼び出す利用者出口名を 30 文字の英数字で指定する。

省略された場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-TRNTERM の値が適用される。

LOGREADER 項-DEFAULT 項にも定義されていない場合、トランザクション終了時に利用者出口を呼び出さない。

MAINAP

ログデータ実行メイン処理として呼び出す利用者出口名を 30 文字の英数字で指定する。
センタ間レプリケーション機能の更新ログ反映を利用する場合は、以下をいずれかを指定する。
なお、いずれかを指定した場合は、PRCINIT、PRCTERM、TRNINIT、TRNTERM は指定が無効となる。

IM 更新ユニット : DILOGUPDIM

DB 更新ユニット : DILOGUPDDB

省略された場合は、LOGREADER 項-DEFAULT 項-MAINAP の値が適用される。

LOGREADER 項-DEFAULT 項-MAINAP も省略されていた場合はエラーとなる。(SUPERSTREAM 項-LRDUNIT 項-MAINAP のみを定義することはできない。)

2. 8. 13 SUPERSTREAM 項

形式

```
%SUPERSTREAM
    NAME          = スーパーストリーム名
    [, ALIAS      = エイリアス名]
    [, UNITGROUP  = ユニットグループ名
    [, POOLFILEID = プールファイル ID]
    [, BLOCKSTATUS = {ACT|BLK}]
    [, MAPID      = MAPID]
    [, RGSETNAME  = リソースグループセット名]
    [, GROUP      = スーパーストリームグループ]
    [, STACKNUM   = プールファイルのスタックファイル数]
    [, SWAPSIZE   = スワップサイズ]
    [, DELSTACKCNT = 削除スタック数]
    [, COMPRESS   = {YES|NO}]
;
```

説明

スーパーストリーム名とスーパーストリームの動作条件定義を行う。

SUPERSTREAM 項は最大 1024 回繰り返し指定ができる。

パラメータの説明

NAME

スーパーストリーム名を 15 文字以内の英数字で指定する。

この値は DELAYED 節内でユニークでなければならない。なお、スーパーストリーム名では、大文字/小文字の区別はなく、同じ文字とみなす。

指定するスーパーストリーム名は転送先システムと同じスーパーストリーム名で定義しなければならない。

ALIAS

エイリアス名を 15 文字以内の英数字で指定する。

省略した場合、SUPERSTREAM 項-NAME の値が適用される。

他の項も含め、SUPERSTREAM 項-NAME として定義された名前を指定することはできない。

UNITGROUP

ユニットグループ名 15 文字以内の英数字で指定する。

指定した名前は、UNITGROUP 項-NAME として定義されている名前でなければならない。

POOLFILEID

プールファイルを識別するための ID を 0 から 99 の整数で指定する。

複数の SUPERSTREAM 項において、同一 MAPID を指定する場合は、他の SUPERSTREAM 項-POOLFILEID と重複しない値を指定する必要がある。

省略した場合は、UNITGROUP 項-POOLFILEID の値が適用される。

BLOCKSTATUS

初期無効化状態を指定する。

ACT : 有効

BLK : 無効

省略した場合、指定した UNITGROUP に定義されている初期無効化状態が適用される。

MAPID

IM サーバアクセスに使用する MAPID を 1 以上の整数で指定する。
指定した UNITGROUP 項-POOLFILE=IM の場合必須となる。

RGSETNAME

DB 接続に使用する RGSET 名を 31 文字以内の英数字で指定する。
RGSETNAME は DBCTRL 節-RGSET 項-NAME に存在しなければならない。
省略した場合、指定した UNITGROUP に定義されている RGSETNAME が適用される。

GROUP

スーパーストリームグループ番号を 1～16 の整数で指定する。
本パラメータは、UNITGROUP に指定したユニットグループの POOLFILE パラメータが DB の場合のみ有効となる。
各スーパーストリームの動作ノードが自動的に決定される際は、スーパーストリームグループ単位で各動作ノードのスーパーストリーム数が調整される。本パラメータによって数が調整されるのは、本パラメータが有効であるスーパーストリームのみである。本パラメータで対象とする動作ノードは、COMMON 項-DBLAYER で設定されたタイプに該当するノードである。
省略した場合は 1 が指定されたものとする。

STACKNUM

UNITGROUP 項-POOLFILE=IM の場合、IM のプールファイルを構成するスタックファイル数(IM 表数)を 2～99 の整数で指定する。
UNITGROUP 項-POOLFILE=DB の場合、プールファイルを構成するスタックファイルのパーティション数を 2～99 の整数で指定する。
省略した場合は、DSAM 項-DEFAULT 項-STACKNUM の値が適用される。

SWAPSIZE

1 スタックファイルに格納するデータサイズの上限值(メガバイト)を 1 以上の整数で指定する。
格納データサイズが本値に至った際、出力先を次スタックファイルへスワップする。
省略した場合は、DSAM 項-DEFAULT 項-SWAPSIZE の値が適用される。

DELSTACKCNT

削除するスタックファイル数を 0 から 99 までの整数で指定する。
ログデータの出力先スタックファイルの次から、本値に指定されたスタックファイル数分が削除対象となる。このため、全スタックファイルのログデータが処理済となっても、本値のスタックファイル数分のみが削除される。
0 を指定した場合は、処理済となった全スタックファイルを削除する。
スーパーストリームに設定したスタックファイル総数よりも大きい値を設定した場合も、処理済となった全スタックファイルを削除する。
省略した場合は、DSAM 項-DEFAULT 項-DELSTACKCNT の値が適用される。

COMPRESS

スーパーストリーム単位にログデータの圧縮を行うか否かを指定する。(省略可)
YES : 圧縮を行う
NO : 圧縮を行わない
省略した場合、DSAM 項-DEFAULT 項-COMPRESS の値が適用される。
UNITGROUP 項-POOLTYPE=WRITER 時のみ指定可能。

2.9 DIOSAMAP (論理ノード構成定義)

2.9.1 DIOSAMAP 節

形式

```
$DIOSAMAP
  [%DEFAULT
    パラメータ記述
  ;]
  {%LOGSYSTEM
    パラメータ記述
    {%LNODE
      パラメータ記述
      [%TPM
        パラメータ記述
      ;]...
    ;}...
  ;}...
;
```

説明

DIOSA/XTP の各機能が認識可能な論理システム、論理ノードの構成を定義する。(論理システム単位、必須)

項の説明

DEFAULT 項

DIOSAMAP 節内での既定値を定義する。(最大 1 個、省略可)

LOGSYSTEM 項

論理システム (DB サーバグループ) に所属する論理ノードを定義する。(最大 255 個、必須)

LNODE 項

論理ノードとその属性を定義する。(DIOSAMAP 節内で最大 256 個、必須)

TPM 項

TPBASE へアクセスするための情報を定義する。(各 LNODE 項内で最大 16 個、省略可)

2. 9. 2 DEFAULT 項

形式

%DEFAULT		
PORT_BCM	=	ポート番号
PORT_CDD	=	ポート番号
[PORT_DLT	=	ポート番号]
[PORT_IIC	=	ポート番号]
[PORT_IMS	=	ポート番号]
[TERMPREFIX	=	端末名・VD 名の接頭辞]
;		

説明

DIOSAMAP 節内で使用する既定値を定義する。

パラメータの説明

PORT_BCM

LNODE 項配下の PORT_BCM の既定値を定義する。(10 進表記の数字 : 1025～65535 もしくは 1～31 文字までのサービス名、最大 1 個、必須)

PORT_CDD

LNODE 項配下の PORT_CDD の既定値を定義する。(10 進表記の数字 : 1025～65535 もしくは 1～31 文字までのサービス名、最大 1 個、必須)

PORT_DLT

LNODE 項配下の PORT_DLT の既定値を定義する。(10 進表記の数字 : 1025～65532 もしくは 1～31 文字までのサービス名、最大 1 個、省略可)

PORT_IIC

LNODE 項配下の PORT_IIC の既定値を定義する。(10 進表記の数字 : 1025～65534 もしくは 1～31 文字までのサービス名、最大 1 個、省略可)

PORT_IMS

LNODE 項配下の PORT_IMS の既定値を定義する。(10 進表記の数字 : 1025～65520 もしくは 1～31 文字までのサービス名、最大 1 個、省略可)

TERMPREFIX

LOGSYSTEM 項配下の TERMPREFIX の既定値を定義する。(英数字 1～4 文字、最大 1 個、省略可)
省略時は “DXTP” が指定されたものとみなす。

2. 9. 3 LOGSYSTEM 項

形式

%LOGSYSTEM	
NAME	= 論理システム名
[TERMPREFIX	= 端末名・VD 名の接頭辞]
{%LNODE	
パラメータ記述	
;}...	
;	

説明

論理システム (DB サーバグループ) に所属する論理ノードを定義する。

パラメータの説明

NAME

論理システム名を定義する。(英数字：1～15 文字、LOGSYSTEM 項内で最大 1 個、必須)
DIOSAMAP 節内でユニークな名前とする。(LNODE 項配下の NAME との重複も不可)

TERMPREFIX

ノード間の T パスを構成する端末名・VD 名の接頭辞を定義する。(英数字 1～4 文字、省略可)

LNODE 項

論理ノードとその属性を定義する。(DIOSAMAP 節内で最大 256 個、LOGSYSTEM 項内で制限なし、必須)

注意

- 下記の文字列は予約語となるため、論理システム名として使用することはできない。
all

2. 9. 4 LNODE 項

形式

%LNODE	
NAME	= 論理ノード名
ID	= 論理ノード番号
[INITSTS	= { <u>ACT</u> BLK }]
TYPE	= { OLTP AP DB }
IPADDR	= IP アドレス
[IPADDR2	= IP アドレス]
[IPADDR_CTL	= IP アドレス]
[IPADDR_CTL2	= IP アドレス]
[IPADDR_OP	= IP アドレス]
[IPADDR_EXT	= IP アドレス]
[PORT_BCM	= ポート番号]
[PORT_CDD	= ポート番号]
[PORT_DLT	= ポート番号]
[PORT_IIC	= ポート番号]
[PORT_IMS	= ポート番号]
[%TPM	
パラメータ記述	
;]...	
;	

説明

論理ノードとその属性を定義する。

パラメータの説明

NAME

論理ノード名を定義する。(英数字：1～15 文字、LNODE 項内で最大 1 個、必須)
DIOSAMAP 節内でユニークな名前とする。(LOGSYSTEM 項配下の NAME との重複も不可)

ID

論理ノードのノード番号を定義する。(1～32767 の数字、LNODE 項内で最大 1 個、必須)
DIOSAMAP 節内で一意の番号とする。

INITSTS

論理ノードの初期ステータスを定義する。(LNODE 項内で最大 1 個、省略可)

パラメータ	説明
ACT	閉塞解除
BLK	閉塞

省略した場合、“ACT”が設定される。

TYPE

論理ノードの属性を定義する。(LNODE 項配下で最大 1 個、必須)

パラメータ	説明
OLTP	OLTP 層の論理ノード
AP	AP 層の論理ノード
DB	DB 層の論理ノード

IPADDR

業務用 IP アドレスをネットワークアドレス形式、またはホスト名で指定する。(英数字：1～256 文字、LNODE 項配下で最大 1 個、必須)
ネットワークアドレス形式の場合、ドットで区切った 10 進数の形式(#.#.#.#)で、各 # は 0 から 255 までの 10 進数を表す。

IPADDR2

業務用 IP アドレスをネットワークアドレス形式、またはホスト名で指定する。(英数字：1～256 文字、LNODE 項配下で最大 1 個、省略可)
ネットワークアドレス形式の場合、ドットで区切った 10 進数の形式(#.#.#.#)で、各 # は 0 から 255 までの 10 進数を表す。
省略した場合は、IPADDR に定義した値が設定される。

IPADDR_CTL

制御用 IP アドレスをネットワークアドレス形式、またはホスト名で指定する。(英数字：1～256 文字、LNODE 項配下で最大 1 個、省略可)
ネットワークアドレス形式の場合、ドットで区切った 10 進数の形式(#.#.#.#)で、各 # は 0 から 255 までの 10 進数を表す。
省略した場合は、IPADDR に定義した値が設定される。

IPADDR_CTL2

制御用 IP アドレスをネットワークアドレス形式、またはホスト名で指定する。(英数字：1～256 文字、LNODE 項配下で最大 1 個、省略可)
ネットワークアドレス形式の場合、ドットで区切った 10 進数の形式(#.#.#.#)で、各 # は 0 から 255 までの 10 進数を表す。
省略した場合は、IPADDR に定義した値が設定される。

IPADDR_OP

運用管理用 IP アドレスをネットワークアドレス形式、またはホスト名で指定する。(英数字：1～256 文字、LNODE 項配下で最大 1 個、省略可)
ネットワークアドレス形式の場合、ドットで区切った 10 進数の形式(#.#.#.#)で、各 # は 0 から 255 までの 10 進数を表す。
省略した場合は、IPADDR に定義した値が設定される。

IPADDR_EXT

外部接続用 IP アドレスをネットワークアドレス形式、またはホスト名で指定する。(英数字：1～256 文字、LNODE 項配下で最大 1 個、省略可)
ネットワークアドレス形式の場合、ドットで区切った 10 進数の形式(#.#.#.#)で、各 # は 0 から 255 までの 10 進数を表す。
省略した場合、コマンド配信機能では IPADDR_OP、ディレード転送では IPADDR_CTL に定義した値で外部論理システムと接続する。

PORT_BCM

閉塞管理機能が使用するポート番号を設定する。(10 進表記の数字：1025～65535 もしくは 1～31 文字までのサービス名、条件付き省略可)
省略した場合、DIOSAMAP-DEFAULT 項配下の PORT_BCM が設定される。
なお、DIOSAMAP-DEFAULT 項が省略されていた場合は、PORT_BCM の定義は必須とする。

PORT_CDD

コマンド配信機能が使用するポート番号を設定する。(10 進表記の数字：1025～65535 もしくは 1～31 文字までのサービス名、条件付き省略可)

省略した場合、DIOSAMAP-DEFAULT 項配下の PORT_CDD が設定される。

なお、DIOSAMAP-DEFAULT 項が省略されていた場合は、PORT_CDD の定義は必須とする。

PORT_DLT

ディレード転送機能が使用するポート番号の開始値を指定する。(10 進表記の数字：1025～65532 もしくは 1～31 文字までのサービス名、省略可)

ディレード転送機能では、指定されたポート番号から 4 つのポート番号を使用する。開始値に指定されたポート番号を外部と通信する際に使用する。

省略した場合、DIOSAMAP-DEFAULT 項配下の PORT_DLT が設定される。

なお、DIOSAMAP-DEFAULT 項または DIOSAMAP-DEFAULT 項配下の PORT_DLT が省略されていた場合は、ディレード転送機能は使用できない。

PORT_IIC

インメモリサーバ所在管理機能が使用するポート番号の開始値を指定する。(10 進表記の数字：1025～65534 もしくは 1～31 文字までのサービス名、省略可)

インメモリサーバ所在管理機能では、指定されたポート番号から 2 つのポート番号を使用する。

省略した場合、DIOSAMAP-DEFAULT 項配下の PORT_IIC が設定される。

なお、DIOSAMAP-DEFAULT 項または DIOSAMAP-DEFAULT 項配下の PORT_IIC が省略されていた場合は、インメモリサーバ所在管理機能は使用できない。

PORT_IMS

インメモリサーバ機能が使用するポート番号の開始値を指定する。(10 進表記の数字：1025～65520 もしくは 1～31 文字までのサービス名、省略可)

インメモリサーバ機能では、指定されたポート番号から 16 個のポート番号を使用する。

省略した場合、DIOSAMAP-DEFAULT 項配下の PORT_IMS が設定される。

なお、DIOSAMAP-DEFAULT 項または DIOSAMAP-DEFAULT 項配下の PORT_IMS が省略されていた場合は、インメモリサーバ機能は使用できない。

TPM 項

TPBASE へアクセスするための情報を定義する。(LNODE 項配下で最大 16 個、省略可)

注意

- 下記の文字列は予約語となるため、論理ノード名として使用することはできない。
all

2. 9. 5 TPM 項

形式

%TPM		
ID	=	TP モニタ番号
NAME	=	TP モニタ名
;		

説明

TPBASE へアクセスするための情報を定義する。

パラメータの説明

ID

TPBASE の TP モニタ番号を定義する。(1～16 の数字、必須)
LNODE 項内でユニークな TP モニタ番号とする。

NAME

TPBASE の TP モニタ名を定義する。(英数字：8 文字、必須)
LNODE 項内でユニークな TP モニタ名とする。

注意事項

- 複数の LNODE 項の間で、それぞれの配下の%TPM-NAME が重複することは可能だが、各論理ノードが同一物理
 ホスト上で動作している場合等、結果的に同じ TP モニタを指す場合の動作は保証しない。

2. 10 IMENV(インメモリキャッシュ機能)

2. 10. 1 IMENV 節

形式

```
$IMENV
[%COMMON
    パラメータ記述
;]
[%FAULTDETECT
    [%NODEFAULT
        パラメータ記述
    ;]
    [%SERVERFAULT
        パラメータ記述
    ;]
    [%BRIDGEFAULT
        パラメータ記述
    ;]
    [%TAMFAULT
        パラメータ記述
    ;]
;]
[%DEF_MAP
    パラメータ記述
    [%GROUPCOMMIT
        パラメータ記述
    ;]
    [%ACCESSLOG
        パラメータ記述
    ;]
;]
{%REPGROUP
    パラメータ記述
    {%MAP
        パラメータ記述
        [%GROUPCOMMIT
            パラメータ記述
        ;]
        {%HASHRANGE
            パラメータ記述
        ;} ...
        [%ACCESSLOG
            パラメータ記述
        ;]
    ;} ...
%MASTER
```

```

        パラメータ記述
    ;
    [%SLAVE
        パラメータ記述
    ;] ...
;} ...
%BRIDGE
    パラメータ記述
    [%ACCESSLOG
        パラメータ記述
    ;]
;
%USERAP
    パラメータ記述
;
;
```

説明

インメモリキャッシュ機能に関する定義を行う。(論理システム単位、省略可)
省略した場合、インメモリキャッシュ機能は動作しない。

項の説明

COMMON 項

インメモリキャッシュ機能の制御に関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合は、COMMON 項の各パラメータの既定値に従い動作する。

FAULTDETECT 項

インメモリキャッシュ機能の監視及び制御に関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合は、FAULTDETECT 項の各パラメータの既定値に従い動作する。

NODEFAULT 項

ノード間通信の監視及び制御に関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合は、NODEFAULT 項の各パラメータの既定値に従い動作する。

SERVERFAULT 項

アクセスサーバの監視及び制御に関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合は、SERVERFAULT 項の各パラメータの既定値に従い動作する。

BRIDGEFAULT 項

ブリッジサーバの監視及び制御に関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合は、BRIDGEFAULT 項の各パラメータの既定値に従い動作する。

TAMFAULT 項

IM インスタンスの監視及び制御に関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合は、TAMFAULT 項の各パラメータの既定値に従い動作する。

DEF_MAP 項

MAP 項におけるアクセスサーバの動作に関する情報で省略可能パラメータの既定値を定義する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合は、MAP 項の各パラメータの既定値に従い動作する。

REPGROUP 項

インメモリキャッシュ機能のレプリケーショングループに関する情報を定義する。(最大 256 個、必須)

MAP 項

MAP に関する情報を定義する。(REPGROUP 項内で最大 256 個、必須)

HASHRANGE 項

MAP 毎に割り当てるハッシュ値の範囲に関する情報を定義する。(MAP 項内で最大 10 個、必須)

MASTER 項

マスタ IM インスタンスに関する情報を定義する。(REPGROUP 項内で最大 1 個、必須)

SLAVE 項

スレーブ IM インスタンスに関する情報を定義する。(REPGROUP 項内で最大 10 個、省略可)
省略した場合、スレーブ IM インスタンスに関する機能不能使用。

BRIDGE 項

ブリッジサーバに関する情報を定義する。(最大 1 個、必須)

USERAP 項

利用者アプリケーションに関する情報を定義する。(最大 1 個、必須)

GROUPCOMMIT 項

グループコミットに関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合は、GROUPCOMMIT 項の各パラメータの既定値に従い動作する。

ACCESSLOG 項

アクセス情報ログに関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合は、ACCESSLOG 項の各パラメータの既定値に従い動作する。

2. 10. 2 COMMON 項

形式

```
%COMMON
[ SWITCH          = {AUTO | MANUAL} ]
[ , CTRLSENDINVL  = 制御電文再送間隔 ]
[ , ALLOWCOMMIT   = {REPGTHALF | REPGEONE | REPNOTHING} ]
[ , RESTTXIDBLK   = {YES | NO} ]
;
```

説明

インメモリキャッシュ機能の制御に関する情報を定義する。

パラメータの説明

SWITCH

各種障害検出時に自動的にマスタ切替、およびスレーブ起動を行うか否かを指定する。(省略可)
省略した場合、AUTO が指定される。

パラメータ	説明
AUTO	自動的にマスタ切替、スレーブ起動を行う
MANUAL	自動的にマスタ切替、スレーブ起動を行わない

CTRLSENDINVL

インメモリキャッシュ機能が送信する制御電文の再送間隔を 100 ミリ秒単位で指定する。(数字:1～36000、省略可)
省略した場合、10(=1 秒)が指定される。

ALLOWCOMMIT

スレーブへのレプリケーション結果によって、コミットを正常終了するか否かを指定する。(省略可)
省略した場合、REPGEONE が指定される。
スレーブが存在しない場合は当パラメータは無効となる。

パラメータ	説明
REPGTHALF	レプリケーションが半数より多く成功していればコミットを正常終了する
REPGEONE	レプリケーションが一つでも成功していればコミットを正常終了する
REPNOTHING	レプリケーションが一つも成功していなくてもコミットを正常終了する

RESTTXIDBLK

マスタ切替開始時に AP 層の電文保留用トランザクションを閉塞し、マスタ切替完了時に AP 層の電文保留用トランザクションを閉塞解除する制御を自動的に行うか否かを指定する。(省略可)
省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	電文保留用トランザクションの閉塞および閉塞解除を行う
NO	電文保留用トランザクションの閉塞および閉塞解除を行わない

2. 10. 3 NODEFAULT 項

形式

%NODEFAULT		
[HLTHCHKINVL	=	ノード間ヘルスチェック間隔]
[, HLTHCHKRETRY	=	ノード間ヘルスチェックリトライ回数]
[, TPATHCHK	=	{ <u>YES</u> NO}]
[, DOWNCNT	=	{ <u>ALL</u> GTHALF GEHALF ANY}]
[, DOWNTIME	=	ノード障害判定時間]
;		

説明

ノード間通信の監視及び制御に関する情報を定義する。

パラメータの説明

HLTHCHKINVL

AP 層-OLTP 層間で行うヘルスチェック処理の間隔を 100 ミリ秒単位で指定する。(数字：0～36000、省略可)
0 を指定した場合、ヘルスチェック処理は行わない。
省略した場合、0 が指定される。

HLTHCHKRETRY

AP 層-OLTP 層間のヘルスチェック処理失敗時のリトライ回数を指定する。(数字：0～99、省略可)
0 を指定した場合、リトライは行わない。
省略した場合、0 が指定される。
HLTHCHKINVL=0 の場合、当パラメータは無効となる。

TPATHCHK

AP 層において T パス状態を参照し、T パス障害検出時にノード障害とみなすか否かを指定する。(省略可)
省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	T パス状態を参照し、ノード障害判定に利用する
NO	T パス状態を参照しない

DOWNCNT

AP 層が検出した OLTP 層障害によって、OLTP 層のノード障害とするか否かを指定する。
省略した場合、ALL が指定される。

パラメータ	説明
ALL	全 AP 層で障害を検出した場合に、ノード障害とする。
GTHALF	過半数の AP 層でノード障害を検出した後、DOWNTIME で指定した間隔で状態変化が無い場合に、ノード障害とする。
GEHALF	半数以上の AP 層でノード障害を検出した後、DOWNTIME で指定した間隔で状態変化が無い場合に、ノード障害とする。
ANY	任意の 1AP 層でノード障害を検出した後、DOWNTIME で指定した間隔で状態変化が無い場合に、ノード障害とする。

DOWNTIME

DOWNCNT で指定した条件を満たし、ノード障害とするまでの間隔を 100 ミリ秒単位で指定する。(数字：0～36000、省略可)
0 を指定した場合、即ノード障害とする。

省略した場合、0 が指定される。

全 AP 層でノード障害を検出した場合は、本パラメータの指定に関わらず、即ノード障害とする。

2. 10. 4 SERVERFAULT 項

形式

```
%SERVERFAULT
[ CHKINVL           = アクセスサーバ監視間隔]
[, DELAYLIMIT       = アクセスサーバ滞留電文数しきい値]
[, MSTRESTART       = アクセスサーバ(マスタ)再起動回数]
[, SLVRESTART       = アクセスサーバ(スレーブ)再起動回数]
[, RESTARTTIME      = 再起動後に正常起動と判定する時間]
;
```

説明

アクセスサーバの監視及び制御に関する情報を定義する。

パラメータの説明

CHKINVL

アクセスサーバのプロセス起動状態と滞留電文数を監視する間隔を 100 ミリ秒単位で指定する。(数字：0～36000、省略可)
0 を指定した場合、アクセスサーバの監視を行わない。
省略した場合、0 が指定される。

DELAYLIMIT

アクセスサーバの滞留電文数上限しきい値を指定する。(数字：0～2147483647、省略可)
滞留電文数が当しきい値を超えると、該当するアクセスサーバを障害とみなす。
0 を指定した場合、滞留電文数の監視を行わない。
省略した場合、0 が指定される。
CHKINVL=0 の場合、当パラメータは無効となる。

MSTRESTART

マスタ IM に対応するアクセスサーバ異常終了時の再起動回数を指定する。(数字：0～99、省略可)
0 を指定した場合、再起動は行わない。
省略した場合、0 が指定される。
CHKINVL=0 の場合、当パラメータは無効となる。

SLVRESTART

スレーブ IM に対応するアクセスサーバ異常終了時の再起動回数を指定する。(数字：0～99、省略可)
0 を指定した場合、再起動は行わない。
省略した場合、0 が指定される。
CHKINVL=0 の場合、当パラメータは無効となる。

RESTARTTIME

アクセスサーバが再起動したあと正常に起動したと判定する時間を秒単位で指定する。(数字：1～3600、省略可)
省略した場合、60 が指定される。
CHKINVL=0 の場合、当パラメータは無効となる。
CHKINVL より長い時間を指定する必要がある。

2. 10. 5 BRIDGEFAULT 項

形式

```
%BRIDGEFAULT
[ CHKINVL          = ブリッジサーバ監視間隔]
[, RESTART         = ブリッジサーバ再起動回数]
[, RESTARTTIME     = 再起動後に正常起動と判定する時間]
;
```

説明

ブリッジサーバの監視及び制御に関する情報を定義する。

パラメータの説明

CHKINVL

ブリッジサーバのプロセス起動状態を監視する間隔を 100 ミリ秒単位で指定する。(数字：0～36000、省略可)

0 を指定した場合、ブリッジサーバの監視を行わない。

省略した場合、0 が指定される。

RESTART

ブリッジサーバ異常終了時の再起動回数を指定する。(数字：0～99、省略可)

0 を指定した場合、再起動は行わない。

省略した場合、0 が指定される。

CHKINVL=0 の場合、当パラメータは無効となる。

RESTARTTIME

ブリッジサーバが再起動したあと正常に起動したと判定する時間を秒単位で指定する。(数字：1～3600、省略可)

省略した場合、60 が指定される。

CHKINVL=0 の場合、当パラメータは無効となる。

CHKINVL より長い時間を指定する必要がある。

2. 10. 6 TAMFAULT 項

形式

%TAMFAULT		
[CHKINVL	=	IM インスタンス監視間隔]
[, SWITCHRETRY	=	マスタ切替リトライ回数]
[, SWITCHINVL	=	マスタ切替リトライ間隔]
[, SLVCHKCOUNT	=	スレーブ IM 自動起動時の起動状態確認回数]
[, SLVCHKINVL	=	スレーブ IM 自動起動時の起動状態確認間隔]
;		

説明

IM インスタンスの障害監視及び制御に関する情報を定義する。

パラメータの説明

CHKINVL

IM インスタンスの稼動状態を監視する間隔を 100 ミリ秒単位で指定する。(数字：0～36000、省略可)
0 を指定した場合、IM インスタンスの監視を行わない。
省略した場合、0 が指定される。

SWITCHRETRY

IM のマスタ切替失敗時のリトライ回数を指定する。(数字：0～99、省略可)
0 を指定した場合、リトライは行わない。
省略した場合、0 が指定される。

SWITCHINVL

IM のマスタ切替失敗時にリトライする間隔を 100 ミリ秒単位で指定する。(数字：1～36000、省略可)
省略した場合、10(=1 秒)が指定される。
SWITCHRETRY=0 の場合、当パラメータは無効となる。

SLVCHKCOUNT

スレーブ IM 自動起動時の起動状態確認回数を指定する。(数字：1～2147483647、省略可)
省略した場合、30 が指定される。

SLVCHKINVL

スレーブ IM 自動起動時の起動状態確認間隔を 100 ミリ秒単位で指定する。(数字：1～1000、省略可)
省略した場合、10(=1 秒)が指定される。

2. 10. 7 DEF_MAP 項

形式

%DEF_MAP		
[MULTI	=	アクセススレッド多重度]
[, TXTBLSIZE	=	トランザクション管理テーブルサイズ]
[, IMQUEBUFSIZE	=	IMS キューバッファサイズ]
[, IMQUEBUFUNIT	=	IM キューバッファユニットサイズ]
[, JOURNAL	=	{YES <u>NO</u> }]
[, STATS	=	{ <u>YES</u> NO}]
[, COMMITMODE	=	{ <u>NORMAL</u> GROUP}]
;		

説明

MAP 項の省略可能パラメータの既定値を定義する。

パラメータの説明

MAP 項を参照すること。

2. 10. 8 REPGROUP 項

形式

```
%REPGROUP
    ID          = レプリケーショングループ ID
    , INSTANCE  = IM インスタンス名
;
```

説明

インメモリキャッシュ機能のレプリケーショングループに関する情報を定義する。

パラメータの説明

ID

インメモリキャッシュ機能のレプリケーショングループを識別するための ID を指定する。(数字：1～2147483647、必須)

アクセスサーバを識別する ID としても使用する。

この値は IMENV 節内でユニークでなければならない。

INSTANCE

インメモリキャッシュ機能のレプリケーショングループに対応する IM インスタンス名を指定する。(英数字：1～40 文字、必須)

この値は IMENV 節内でユニークでなければならない。

2. 10. 9 MAP 項

形式

%MAP		
ID	=	MAPID
[, MULTI	=	アクセススレッド多重度
[, TXTBLSIZE	=	トランザクション管理テーブルサイズ]
[, IMQUEBUFSIZE	=	IMS キューバッファサイズ]
[, IMQUEBUFUNIT	=	IMS キューバッファユニットサイズ]
[, JOURNAL	=	{YES <u>NO</u> }]
[, STATS	=	{ <u>YES</u> NO}]
[, COMMITMODE	=	{ <u>NORMAL</u> GROUP}]
;		

説明

MAP に関する情報を定義する。
MAP 項の省略可能なパラメータを省略した際は、DEF_MAP 項の定義が適用される。

パラメータの説明

ID

MAP を識別するための ID を指定する。(数字：1～2147483647、必須)
この値は IMENV 節内でユニークでなければならない。

MULTI

アクセスサーバのアクセススレッド多重度を指定する。(数字：1～16、省略可)
省略した場合、1 が指定される。

TXTBLSIZE

トランザクション管理テーブル(コミットするまでの更新中レコードを管理)に格納できるレコード数を指定する。(数字：100～2147483647、省略可)
省略した場合、1000 が指定される。

IMQUEBUFSIZE

アクセスサーバが利用者アプリケーションやブリッジサーバにアクセス結果を返却するための IMS キューに使用する共有メモリ・バッファのメモリサイズを K バイト単位で指定する。(数字：1～2000000、ただし同一 MAP 項の MULTI を指定した場合は IMQUEBUFSIZE×MULTI が 2000000 以下になる必要がある。省略可)
省略した場合、1024K バイト(=1M バイト)が指定される。

IMQUEBUFUNIT

アクセスサーバが利用者アプリケーションやブリッジサーバにアクセス結果を返却するための IMS キューに使用する共有メモリ・バッファのブロックサイズをバイト単位で指定する。(数字：8～2048000000、省略可)
8 の倍数を指定する必要がある。省略した場合、8 バイトが指定される。

[同一項配下の IMQUEBUFSIZE と IMQUEBUFUNIT の関係について]
IMQBUFUNIT は、(IMQUEBUFSIZE×1024)以下でなければならない。(IMQUEBUFSIZE×1024)が IMQUEBUFUNIT で割り切れるように、両者の値を指定することを推奨する。

JOURNAL

TAM の更新ログを蓄積するか否かを指定する。(省略可)

省略した場合、NO が指定される。

パラメータ	説明
YES	更新ログを蓄積する。
NO	更新ログを蓄積しない。

YES にする場合は COMMON 項の SWITCH を MANUAL に指定する必要がある。

YES にした場合は、TAM の更新ログ出力先識別子(txlog.conf の txlog_id)を以下の命名規則で定義する必要がある。xxxxx は MAPID を指定し、10 桁未満の場合は 0 で埋めること。

diosa_ims_jnl_xxxxx

(例 MAPID=1 → txlog_id = diosa_ims_jnl_0000000001)

STATS

アクセス統計情報を蓄積するか否かを指定する。(省略可)

省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	アクセス統計の蓄積を行う。
NO	アクセス統計の蓄積を行わない。

COMMITMODE

コミット方式を指定する。(省略可)

省略した場合、NORMAL が指定される。

パラメータ	説明
NORMAL	通常コミット
GROUP	グループコミット

2. 10. 10 HASHRANGE 項

形式

%HASHRANGE		
START	=	開始ハッシュ値
,END	=	終了ハッシュ値
;		

説明

MAP 毎に割り当てるハッシュ値の範囲に関する情報を定義する。
IMENV 節内において、各 MAP に割り当てたハッシュ値の範囲が重複することのないように定義する必要がある。

パラメータの説明

START

MAP に割り当てるハッシュ値の開始値を指定する。(数字：0～2147483647、必須)

END

MAP に割り当てるハッシュ値の終了値を指定する。(数字：0～2147483647、必須)
START で指定した値以上の値を指定する必要がある。

2. 10. 11 MASTER 項

形式

```
%MASTER
    LNODE      = 論理ノード名
    ,TAMVNODE  = IM 論理ノード名
;
```

説明

マスタ IM インスタンスに関する情報を定義する。

パラメータの説明

LNODE

マスタ IM を配置する論理ノード名を指定する。(英数字 : 1～15 文字、必須)

指定する論理ノード名は、REPGROUP 項内での重複は不可である。また、DIOSAMAP 節において、自論理システム配下で属性が OLTP の論理ノードを指定する必要がある。

TAMVNODE

IM インスタンスを識別するための論理ノード名を指定する。(英数字 : 1～40 文字、必須)

TAM のコンフィグパラメータファイル(tammng.conf)の virtual_node_name に該当する名前を指定する。

2. 10. 12 SLAVE 項

形式

```
%SLAVE
    LNODE      = 論理ノード名
    ,TAMVNODE   = IM 論理ノード名
    [, INITSTART = {YES | NO} ]
;
```

説明

スレーブ IM インスタンスに関する情報を定義する。

パラメータの説明

LNODE

スレーブ IM を配置する論理ノード名を指定する。(英数字：1～15 文字、必須)
指定する論理ノード名は、REPGROUP 項内での重複は不可である。また、DIOSAMAP 節において、自論理システム配下で属性が OLTP の論理ノードを指定する必要がある。

TAMVNODE

IM インスタンスを識別するための論理ノード名を指定する。(英数字：1～40 文字、必須)
TAM のコンフィグパラメータファイル(tammng.conf)の virtual_node_name に該当する名前を指定する。

INITSTART

初期起動時のスレーブ IM 起動有無を指定する。(省略可)
REPGROUP 項内において、本パラメータで YES を指定した SLAVE 項の数までスレーブ IM を起動することができる。
REPGROUP 項内に SLAVE 項を定義する場合、本パラメータで YES を指定した SLAVE 項を必ず 1 つ以上定義する必要がある。
省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	初期起動時にスレーブ IM を起動する
NO	初期起動時にスレーブ IM を起動しない

2. 10. 13 BRIDGE 項

形式

%BRIDGE		
MULTI	=	多重度
[, CONNECTINVL	=	再接続間隔]
[, IMQUEBUFSIZE	=	IMS キューバッファサイズ]
[, IMQUEBUFUNIT	=	IMS キューバッファユニットサイズ]
[, STATS	=	{ <u>YES</u> NO}]
;		

説明

ブリッジサーバに関する情報を定義する。

パラメータの説明

MULTI

ブリッジサーバの多重度を指定する。(数字：1～16、必須)

CONNECTINVL

ブリッジサーバ間の再接続間隔を秒単位で定義する。(数字：1～3600、省略可)

省略した場合、10 秒が指定される。

IMQUEBUFSIZE

ブリッジサーバがアクセスサーバにアクセス要求するため及び利用者アプリケーションへアクセス結果を返却するための IMS キューに使用する共有メモリ・バッファのメモリサイズを K バイト単位で指定する。(数字：1～2000000、省略可)

省略した場合、1024K バイト(=1M バイト)が指定される。

IMQUEBUFUNIT

ブリッジサーバがアクセスサーバにアクセス要求するため及び利用者アプリケーションへアクセス結果を返却するための IMS キューに使用する共有メモリ・バッファのブロックサイズをバイト単位で指定する。(数字：8～2048000000、省略可)

8 の倍数を指定する必要がある。省略した場合、8 バイトが指定される。

[同一項配下の IMQUEBUFSIZE と IMQUEBUFUNIT の関係について]

IMQBUFUNIT は、(IMQUEBUFSIZE×1024)以下でなければならない。(IMQUEBUFSIZE×1024)が IMQUEBUFUNIT で割り切れるように、両者の値を指定することを推奨する。

STATS

アクセス統計情報を蓄積するか否かを定義する。(省略可)

省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	アクセス統計の蓄積を行う。
NO	アクセス統計の蓄積を行わない。

2. 10. 14 USERAP 項

形式

```
%USERAP
    HASHEXIT          = ハッシュ関数名
    [, REQTIMEOUT      = 応答監視タイマ値]
    [, CONNTIMEOUT     = 接続監視タイマ値]
    [, IMQUEBUFSIZE    = IMS キューバッファサイズ]
    [, IMQUEBUFUNIT    = IMS キューバッファユニットサイズ]
    [, MAXNUM          = 同時起動接続利用者アプリケーション数]
;
```

説明

利用者アプリケーションに関わる情報を定義する。

パラメータの説明

HASHEXIT

メインキーをハッシュ値に変換するためのハッシュ関数名を指定する。(英数字：1～30 文字、必須)

REQTIMEOUT

利用者アプリケーションがアクセス要求を行ってからアクセス結果を受け取るまでの監視タイマ値をミリ秒単位で指定する。(数字：0～2147483647、省略可)

0 を指定した場合、無限待ち扱いとし、アクセス要求を行ってからアクセス結果を受け取るまで、利用者アプリケーションに制御は戻されない。

省略した場合、1000 ミリ秒が指定される。

CONNTIMEOUT

利用者アプリケーションがアクセスサーバ、ブリッジサーバに接続する際の監視タイマ値をミリ秒単位で指定する。(数字：0～2147483647、省略可)

0 を指定した場合、無限待ち扱いとし、接続結果を受け取るまで利用者アプリケーションに制御は戻されない。

省略した場合、1000 ミリ秒が指定される。

IMQUEBUFSIZE

アクセスサーバ、ブリッジサーバにアクセス要求するための IMS キューに使用する共有メモリ・バッファのメモリサイズを K バイト単位で指定する。(数字：1～2000000、省略可)

省略した場合、128K バイトが指定される。

IMQUEBUFUNIT

アクセスサーバ、ブリッジサーバにアクセス要求するための IMS キューに使用する共有メモリ・バッファのブロックサイズをバイト単位で指定する。(数字：8～2048000000、省略可)

8 の倍数を指定する必要がある。省略した場合、8 バイトが指定される。

[同一項配下の IMQUEBUFSIZE と IMQUEBUFUNIT の関係について]

IMQBUFUNIT は、(IMQUEBUFSIZE×1024)以下でなければならない。(IMQUEBUFSIZE×1024)が IMQUEBUFUNIT で割り切れるように、両者の値を指定することを推奨する。

MAXNUM

ノード内で起動する利用者アプリケーションの想定最大数を指定する。(数字：1～65535、省略可)

省略した場合、100 が指定される。本パラメータの詳細はメモリキャッシュ利用の手引きを参照。

2. 10. 15 GROUPCOMMIT 項

形式

```
%GROUPCOMMIT
  [ REQNUM           = コミット要求数]
  [, TMOUT           = タイムアウト]
  [, IMQUECHK        = {YES | NO}]
;
```

説明

グループコミットに関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)

REPGROUP 項の MAP 項に GROUPCOMMIT 項が存在しない場合、また、同 GROUPCOMMIT 項のパラメータを省略した際は DEF_MAP 項で定義した GROUPCOMMIT 項の定義が適用される。

パラメータの説明

REQNUM

1 コミットとしてグループ化するコミット要求数を指定する。(数字：2～255、省略可)

省略した場合、5 が指定される。

TMOUT

コミット要求数の合計が REQNUM に満たない場合、コミット要求の到着を待つ時間を指定する。当パラメータに指定された時間の間は、コミット要求以外の要求を処理する。また、当パラメータに指定された時間を待っても REQNUM に満たない場合は、その時点のコミット要求をグループ化してコミットを行う。

単位はミリ秒(数字：1～2147483647、省略可)

省略した場合、1 ミリ秒が指定される。

IMQUECHK

コミット要求数の合計が REQNUM に満たない場合、IMS キューに対し、滞留電文の有無チェックを行うか否かを定義する。(省略可)

省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	滞留電文の有無チェックを行う。 コミット要求を保留している際、IMS キューが空(滞留電文がない)になった時点で、コミット要求をグループ化してコミットを行う。
NO	滞留電文の有無チェックを行わない。 コミット要求数が REQNUM を満した時、または TMOUT の時間を経過した時のいずれかの時のみ、コミットを行う。

2. 10. 16 ACCESSLOG 項

形式

%ACCESSLOG		
[OUTPUT	=	{ <u>YES</u> NO}]
[, BUFSIZE	=	蓄積領域サイズ]
[, BUFCYCL	=	{ <u>YES</u> NO}]
;		

説明

アクセス情報ログの蓄積に関して定義する。

パラメータの説明

OUTPUT

アクセス情報ログを蓄積するか否かを定義する。(省略可)

省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	アクセス情報ログの蓄積を行う。
NO	アクセス情報ログの蓄積を行わない。

BUFSIZE

アクセス情報ログ(1 レコードは 64 バイト)を蓄積する領域のサイズを K バイト単位で指定する。(数字 : 0～2147483647、省略可)

省略した場合、1024K バイトが指定される。

OUTPUT が YES の場合は、BUFSIZE は 1 以上を指定する必要がある。

BUFCYCL

アクセス情報ログの蓄積領域をサイクリックに使用するか否かを指定する。(省略可)

省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	サイクリックに使用する
NO	一杯になったら停止する

2. 11 IMTABLECONF (インメモリキャッシュ機能 表定義)

2. 11. 1 IMTABLECONF 節

形式

```
$IMTABLECONF
{
  %LTABLE
  パラメータ記述
  %RECORDCONF
  パラメータ記述
  %PRIMARYKEY
  パラメータ記述
  {
    %KEYDEF
    パラメータ記述
  } ...
} ;

[%SECONDARYKEY
  パラメータ記述
  {
    %KEYDEF
    パラメータ記述
  } ...
] ...
;

{%PTABLE
  パラメータ記述
} ...
;}
```

説明

インメモリキャッシュ機能が扱う論理表と TAM の物理表に関する定義を行う。(論理システム単位、省略可)
省略した場合、インメモリキャッシュ機能は動作しない。

項の説明

LTABLE 項

論理表に関する情報を定義する。(最大 1023 個、必須)

RECORDCONF 項

レコードに関する情報を定義する。(LTABLE 項内で最大 1 個、必須)

PRIMARYKEY 項

プライマリキーに関する情報を定義する。(RECORDCONF 項内で最大 1 個、必須)

SECONDARYKEY 項

セカンダリキーに関する情報を定義する。(RECORDCONF 項内で最大 62 個、省略可)
省略した場合セカンダリキーは使用できない。

KEYDEF 項

キー位置に関する情報を定義する。(PRIMARYKEY 項、または SECONDARYKEY 項内で最大 100 個、必須)
SECONDARYKEY 項内では PRIMARYKEY 項の KEYDEF 項と SECONDARYKEY 項の KEYDEF 項の合計が 100 個を超えないこと。

PTABLE 項

物理表に関する情報を定義する。(LTABLE 項内で最大 65536 個、必須)

2. 11. 2 LTABLE 項

形式

```
%LTABLE
    [ TYPE      = 表種別 ]
    ,NAME       = 論理表名
    ,ID         = 論理表 ID
;
```

説明

論理表に関する情報を定義する。

パラメータの説明

TYPE

表種別を指定する。（数字：0～9、省略可）
省略した場合、1 が指定される。論理表一覧取得 API で本パラメータに指定した種別ごとに論理表一覧が取得可能となる。

パラメータ	説明
0	DIOSA で使用する論理表
1～9	利用者が使用する論理表。 特に区別する必要がない場合は 1 のみを指定する

NAME

論理表名を指定する。（英数字：1～255 文字、英字で始まる必要あり、必須）
この値は論理システム内でユニークでなければならない。

ID

論理表を識別するための ID を指定する。（数字：1～1023、必須）
この値は論理システム内でユニークでなければならない。

2. 11. 3 RECORDCONF 項

形式

```
%RECORDCONF
    [ TYPE  = { VARLEN | FIXED } ]
;
```

説明

レコードに関する情報を定義する。

パラメータの説明

TYPE

レコードの形式を指定する。(最大1個、省略可)

省略した場合、FIXED が指定される。

パラメータ	説明
VARLEN	可変長レコード
FIXED	固定長レコード

2. 11. 4 PRIMARYKEY 項

形式

```
%PRIMARYKEY  
    NAME    = プライマリキー名  
;
```

説明

プライマリキーに関する情報を定義する。

パラメータの説明

NAME

プライマリキーの名前を指定する。(英数字：1～30 文字、英字で始まる必要あり、必須)
TAM の table.conf における指定と同一であること。

2. 11. 5 SECONDARYKEY 項

形式

```
%SECONDARYKEY
    NAME      = セカンダリキー名
;

```

説明

セカンダリキーに関する情報を定義する。

パラメータの説明

NAME

セカンダリキーの名前を指定する。(英数字：1～30 文字、英字で始まる必要あり、必須)
TAM の table.conf における指定と同一であること。

2. 11. 6 KEYDEF 項

形式

```
%KEYDEF
    OFFSET    = オフセット
    ,LENGTH   = キー長
;
```

説明

キーの位置、サイズに関する情報を定義する。
連結キーの場合、TAM の table.conf における定義順と同じ順番で定義する必要がある。

パラメータの説明

OFFSET

キーのオフセットを指定する。(数字：0～999999、必須)
オフセットは、ユーザレコードの先頭からのバイト数を指定する。

LENGTH

プライマリキー、またはセカンダリキーを構成する各キーの長さを指定する。(数字：1～999999、必須)
OFFSET に指定したキー単位に長さを指定する。

2. 11. 7 PTABLE 項

形式

```
%PTABLE  
    NAME      = 物理表名  
    , MAPID    = MAPID  
    ;
```

説明

物理表に関する情報を定義する。

パラメータの説明

NAME

物理表名を指定する。(英数字：1～255 文字、英字で始まる必要あり、必須)

この値はこの値は論理システム内でユニークでなければならない。また、TAM の table.conf における指定と同一であること。

MAPID

物理表が割り当てられている MAP を識別するための ID を指定する。(数字：1～2147483647、必須)

この値は IMENV 節内に存在する値でなければならない。

2.12 MMG(メモリ管理機能)

2.12.1 MMG 節

形式

```
[$MMG
  [%UAP
    [%SHM
      パラメータ記述
    ;]
    [%PRC
      パラメータ記述
    ;]
    [%THR
      パラメータ記述
    ;]
    [%SVC
      パラメータ記述
    ;]
  ;]
  [%UDMP
    パラメータ記述
  ;]
  [%UDIR
    パラメータ記述
  ;]
  [%DDMP
    パラメータ記述
  ;]
;]
```

説明

メモリ管理で使用する、各設定値を記述する。(論理ノード単位、省略可)
省略した場合、既定値情報で動作する。
各サイズ下記の組み合わせでは指定できない。
・初期サイズ+拡張サイズ>最大サイズ
・拡張サイズ=0 かつ 初期サイズ≠最大サイズ
また、下記の組み合わせではメモリ管理機能を使用できない。
・初期サイズ=0, 拡張サイズ=0, 最大サイズ=0

項の説明

UAP 項

利用者用共有メモリ、プロセスメモリの初期サイズ、最大サイズ、拡張サイズを定義する。(最大 1 個、省略可)

SHM 項

利用者用の共有メモリの初期サイズ、最大サイズ、拡張サイズを定義する。(最大 1 個、省略可)

PRC 項

プロセス内で使用するプロセスメモリの初期サイズ、最大サイズ、拡張サイズを定義する。(最大 1 個、省略可)

THR 項

スレッド内で使用するプロセスメモリの初期サイズ、最大サイズ、拡張サイズを定義する。(最大 1 個、省略可)

SVC 項

サービス内で使用するプロセスメモリの初期サイズ、最大サイズ、拡張サイズを定義する。(最大 1 個、省略可)

UDMP 項

利用者用メモリアポートダンプの出力可否を定義する。(最大 1 個、省略可)

UDIR 項

利用者用メモリアポートダンプ出力ディレクトリを定義する。(最大 1 個、省略可)

DDMP 項

内部用メモリアポートダンプの出力可否、出力ディレクトリを定義する。(最大 1 個、省略可)

2. 12. 2 UAP 項

形式

```
%UAP
    [SHM 項]
    [PRC 項]
    [THR 項]
    [SVC 項]
;
```

説明

利用者用の共有メモリ、プロセスメモリの初期サイズ、最大サイズ、拡張サイズを定義する。

2. 12. 3 SHM 項

形式

%SHM		
[WRINIT	=	更新可初期サイズ]
[, WRMAX	=	更新可最大サイズ]
[, WRINC	=	更新可拡張サイズ]
[, RDINIT	=	保護属性初期サイズ]
[, RDMAX	=	保護属性最大サイズ]
[, RDINC	=	保護属性拡張サイズ]
;		

説明

利用者用の共有メモリの初期サイズ、最大サイズ、拡張サイズを定義する。
サイズはキロバイト単位で設定する。(数字：0～2000000、10 進数)

パラメータの説明

WRINIT

更新可共有メモリの初期サイズを定義する。
省略した場合、0 が指定される。

WRMAX

更新可共有メモリの最大サイズを定義する。
省略した場合、2000000 が指定される。

WRINC

更新可共有メモリの拡張サイズを定義する。
省略した場合、10000 が指定される。

RDINIT

保護属性共有メモリの初期サイズを定義する。
省略した場合、0 が指定される。

RDMAX

保護属性共有メモリの最大サイズを定義する。
省略した場合、2000000 が指定される。

RDINC

保護属性共有メモリの拡張サイズを定義する。
省略した場合、10000 が指定される。

2. 12. 4 PRC 項

形式

```
%PRC
    [ WRINIT    = 更新可初期サイズ]
    [, WRMAX    = 更新可最大サイズ]
    [, WRINC    = 更新可拡張サイズ]
;
```

説明

プロセス内で使用するプロセスメモリの初期サイズ、最大サイズ、拡張サイズを定義する。
サイズはキロバイト単位で設定する。(数字：0～2000000、10 進数)

パラメータの説明

WRINIT

プロセスメモリの初期サイズを定義する。
省略した場合、0 が指定される。

WRMAX

プロセスメモリの最大サイズを定義する。
省略した場合、2000000 が指定される。

WRINC

プロセスメモリの拡張サイズを定義する。
省略した場合、10000 が指定される。

2. 12. 5 THR 項

形式

```
%THR  
    [ WRINIT    = 更新可初期サイズ]  
    [, WRMAX    = 更新可最大サイズ]  
    [, WRINC    = 更新可拡張サイズ]  
    ;
```

説明

スレッド内で使用するプロセスメモリの初期サイズ、最大サイズ、拡張サイズを定義する。
サイズはキロバイト単位で設定する。(数字：0～2000000、10 進数)

パラメータの説明

WRINIT

プロセスメモリの初期サイズを定義する。
省略した場合、0 が指定される。

WRMAX

プロセスメモリの最大サイズを定義する。
省略した場合、2000000 が指定される。

WRINC

プロセスメモリの拡張サイズを定義する。
省略した場合、10000 が指定される。

2. 12. 6 SVC 項

形式

```
%SVC
    [ WRINIT    = 更新可初期サイズ]
    [, WRMAX    = 更新可最大サイズ]
    [, WRINC    = 更新可拡張サイズ]
;
```

説明

サービス内で使用するプロセスメモリの初期サイズ、最大サイズ、拡張サイズを定義する。
サイズはキロバイト単位で設定する。(数字：0～2000000、10 進数)

パラメータの説明

WRINIT

プロセスメモリの初期サイズを定義する。
省略した場合、0 が指定される。

WRMAX

プロセスメモリの最大サイズを定義する。
省略した場合、2000000 が指定される。

WRINC

プロセスメモリの拡張サイズを定義する。
省略した場合、10000 が指定される。

2. 12. 7 UDMP 項

形式

%UDMP		
[APWR	=	{ <u>YES</u> NO}]
[, APRD	=	{ <u>YES</u> NO}]
[, PRC	=	{ <u>YES</u> NO}]
[, THR	=	{ <u>YES</u> NO}]
[, SVC	=	{ <u>YES</u> NO}]
;		

説明

利用者用メモリアボートダンプの出力可否を定義する。

パラメータの説明

APRW

更新可共有メモリアボートダンプの出力可否を定義する。

省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	アボートダンプを出力する
NO	アボートダンプを出力しない

APRD

保護属性共有メモリアボートダンプの出力可否を定義する。

省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	アボートダンプを出力する
NO	アボートダンプを出力しない

PRC

一括解放対象外プロセス内メモリアボートダンプの出力可否を定義する。

省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	アボートダンプを出力する
NO	アボートダンプを出力しない

THR

一括解放対象外スレッド内メモリアボートダンプの出力可否を定義する。

省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	アボートダンプを出力する
NO	アボートダンプを出力しない

SVC

一括解放対象サービス内メモリアボートダンプの出力可否を定義する。

省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	アボートダンプを出力する
NO	アボートダンプを出力しない

2. 12. 8 UDIR 項

形式

%UDIR
[DIR = ディレクトリ名]
;

説明

利用者用メモリアポートダンプ出力ディレクトリを定義する。

パラメータの説明

DIR

アポートダンプ出力ディレクトリを定義する。(1～128 文字、省略可)
省略した場合、DIOSA_TMP の設定値(DIOSA/XTP 作業用ディレクトリ)となる。

注意事項

- DIR で指定するディレクトリ(省略時は DIOSA_TMP の設定値)のパーミッションは、メモリ管理の使用有無関わらず、プロセス実行ユーザの書込み権を付与する必要がある。書込み権がない場合、プロセス起動に失敗する。DDMP 項の DIR も同様のパーミッションが必要である。

2. 12. 9 DDMP 項

形式

```
%DDMP
[ PRC      = {YES|NO} ]
[, DIR      = ディレクトリ名]
;
```

説明

内部用メモリアボートダンプの出力可否、出力ディレクトリを定義する。

パラメータの説明

PRC

内部用メモリ (一括解放対象外プロセス内メモリ) アボートダンプの出力可否を定義する。
省略した場合、YES が指定される。

パラメータ	説明
YES	アボートダンプを出力する
NO	アボートダンプを出力しない

DIR

アボートダンプ出力ディレクトリを定義する。(1～128 文字、省略可)
省略した場合、DIOSA_TMP の設定値(DIOSA/XTP 作業用ディレクトリ)となる。

注意事項

- DIR で指定するディレクトリ (省略時は DIOSA_TMP の設定値) のパーミッションは、メモリ管理の使用有無関わらず、プロセス実行ユーザの書込み権を付与する必要がある。書込み権がない場合、プロセス起動に失敗する。UDIR 項の DIR も同様のパーミッションが必要である。

2. 13 OPSENV (稼動統計機能)

2. 13. 1 OPSENV 節

形式

```
[$OPSENV
  [%OPSPARAM
    パラメータ記述
  ;]
;]
```

説明

稼動統計の動作環境として稼動情報ファイル関連の定義を行う。(論理ノード単位、省略可)
省略した場合、既定値情報で動作する。

項の説明

OPSPARAM 項

稼動統計で使用する、各設定値を記述する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合、OPSPARAM 項の各パラメータの既定値に従い動作する。

2. 13. 2 OPSPARAM 項

形式

```
%OPSPARAM
[ FTPUSER      = FTP ユーザ名
  , PASSWD      = FTP パスワード]
[, GATHERDIR    = 収集ディレクトリパス]
[, OPSDIR       = ディレクトリパス]
[, PREFIX       = プレフィックス]
[, FILESIZE     = 稼動統計ファイルのサイズ]
[, FILENUM      = 稼動統計ファイルの個数／セット]
[, SETNUM       = 稼動統計ファイルセットの個数]
[, SWEETIME     = 強制出力間隔]
;
```

説明

稼動統計で使用する、ディレクトリ、ファイル関連の各設定値を記述する。

パラメータの説明

FTPUSER

稼動統計収集コマンドにて稼動情報ファイルを収集時に使用する F T P のログインユーザ名を指定する。
(英数字：1～8 文字、省略可)
省略した場合、収集コマンドでのファイル転送は利用不可となる。

PASSWD

稼動統計収集コマンドにて稼動情報ファイルを収集時に使用する F T P のログインパスワードを指定する。
(英数字：1～8 文字、省略可)
FTPUSER パラメータを指定した場合は、省略不可である。
FTPUSER パラメータを省略した場合は、指定不可である。

GATHERDIR

稼動統計収集コマンドにて稼動情報ファイルを収集するディレクトリパスを絶対パスで指定する。(1～200 バイト、省略可)
省略時は”{DIOSA_TMP の設定値}/{DIOSA_LNODENAME の設定値}/ops/gatherdir”が設定される。

OPSDIR

稼動情報ファイルを格納するディレクトリパスを絶対パスで指定する。(1～200 バイト、省略可)
省略時は”{DIOSA_TMP の設定値}/{DIOSA_LNODENAME の設定値}/ops/opmdir”が設定される。

PREFIX

稼動情報ファイル名のプレフィックス(接頭語)を指定する。(英数字：1～7 文字、省略可)
省略時は”OPS”が設定される。

FILESIZE

稼動情報ファイル(1 ファイル)のサイズを MByte 単位で指定する。(1～100、省略可)
省略時は 50 が設定される。

FILENUM

稼動情報ファイルの個数を指定する。(2～100、省略可)
省略時は 3 が設定される。

SETNUM

稼動情報ファイルのセット数を指定する。(1～99、省略可)
省略時は 1 が設定される。

SWEPTIME

メモリバッファ中の稼動統計情報をファイルに強制出力する最大経過時間を秒単位で指定する。(0～3600、省略可)
0 を指定した場合は、強制出力を行わない。
省略時は 90 が設定される。

2. 14 OTCENV (都度接続管理機能)

2. 14. 1 OTCENV 節

形式

```
[$OTCENV
    [%COMMON
        パラメータ記述
    ;]
    [%DEF_MSGCTRL
        パラメータ記述
    ;]
    [%MSGCTRL
        パラメータ記述
    ;] ...
;]
```

説明

都度接続管理機能に関する定義を行う。(論理ノード単位、省略可)
省略した場合、既定値情報で動作する。

項の説明

COMMON 項

都度接続管理機能の制御に関する情報を定義する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合、COMMON 項の各パラメータの既定値に従い動作する。

DEF_MSGCTRL 項

電文宛先単位の電文送受信制御パラメータの既定値を定義する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合、DEF_MSGCTRL 項の各パラメータの既定値に従い動作する。

MSGCTRL 項

電文宛先単位の電文送受信制御パラメータ値を定義する。(最大 16384 個、省略可)
省略した場合、DEF_MSGCTRL 項の値に従い動作する。

2. 14. 2 COMMON 項

形式

%COMMON		
[PROCESS	=	都度接続デーモンプロセス数]
[RELAYTHR	=	中継スレッド数]
[SENDTHR	=	送信スレッド数]
[RCVTHR	=	受信スレッド数]
[WATCHINVL	=	都度接続管理機能監視間隔]
[WATCHRETRY	=	都度接続送信デーモン再起動リトライ回数]
[AUTOSTOP	=	{NO DAEMON TPBASE NODE}]
[ACCPQESIZE	=	業務送信を受け付けるソケットのバックログ]
[ALERTUNLOCK	=	滞留解消判定レベル]
[INITEXIT	=	送受信エラー初期化出口名]
[TERMEXIT	=	送受信エラー終了出口名]
;		

説明

都度接続管理機能の制御に関する情報を定義する。

パラメータの説明

PROCESS

TPBASE 単位に起動する都度接続送信デーモンのプロセス数を指定する。(数字：1～32767)
省略した場合、1 が設定される。

RELAYTHR

都度接続送信デーモン 1 プロセスあたりの中継スレッド数を指定する。(数字：1～32767)
省略した場合、1 が設定される。

SENDTHR

都度接続送信デーモン 1 プロセスあたりの送信スレッド数を指定する。(数字：1～32767)
省略した場合、1 が設定される。

RCVTHR

都度接続送信デーモン 1 プロセスあたりの受信スレッド数を指定する。(数字：1～32767)
省略した場合、1 が設定される。

WATCHINVL

都度接続管理機能の監視間隔を秒単位で指定する。(数字：1～32767)
都度接続送信デーモンのプロセス死活監視および負荷状態監視の間隔に使用される。
省略した場合、10 が設定される。

WATCHRETRY

都度接続送信デーモン再起動のリトライ回数を指定する。(数字：0～32767)
指定した回数だけ連続して再起動が失敗するとリトライオーバーする。
0 を指定すると都度接続監視デーモンによる都度接続送信デーモンの再起動は行われない。
省略した場合、3 が設定される。

AUTOSTOP

都度接続送信デーモン再起動がリトライオーバーした際の、都度接続監視デーモン自動停止設定を指定する。

省略した場合、NO が設定される。

パラメータ	説明
NO	自動停止しない
DAEMON	いずれかの都度接続送信デーモンがリトライオーバーした時
TPBASE	いずれかの TPBASE に紐づいた全ての都度接続送信デーモンがリトライオーバーした時
NODE	論理ノード内の全ての都度接続送信デーモンがリトライオーバーした時

ACCPQESIZE

都度接続送信デーモンが業務アプリケーション(TPP)から電文送信要求を受け付ける(listen())ソケットのバックログを指定する。(数字：1～32767)

省略した場合、100 が設定される。なお OS 設定より大きな値が指定された場合は、OS 設定となる。

ALERTUNLOCK

送信待ちキュー/受信待ちキュー溢れ発生後に、滞留数が十分減少したと判断する割合をパーセントで指定する。(数字：0～100)

キュー溢れ発生の警告メッセージが出力された後に、滞留数が「キューサイズ×本パラメータ(%)」で計算された値よりも小さくなった場合に通知メッセージが出力され、キュー溢れ発生時の警告メッセージが再度出力されるようになる。

省略した場合、90 が設定される。

INITEXIT

送受信エラー初期化出口を指定する。(英数字:1～30 文字、必須)

指定した出口は都度接続送信デーモンのプロセス起動時に呼び出される。

省略した場合、送受信エラー初期化出口は呼び出されない。

TERMEXIT

送受信エラー終了出口を指定する。(英数字:1～30 文字、必須)

指定した出口は都度接続送信デーモンのプロセス停止時に呼び出される。

省略した場合、送受信エラー終了出口は呼び出されない。

2. 14. 3 DEF_MSGCTRL 項

形式

```
%DEF_MSGCTRL
    [SENDTHRLIMIT  = 送信スレッド最大占有数]
    [RCVTHRLIMIT   = 受信スレッド最大占有数]
    [SENDQESIZE    = 送信待ちキューサイズ]
    [RCVQESIZE     = 応答受信待ちキューサイズ]
    [MSGTIMEOUT    = 電文送受信タイムアウト時間]
    [MSGERREXIT    = 送受信エラー出口名]
    [LSNRWAITTIME  = リスナ接続最大時間]
;
```

説明

宛先単位の電文送受信制御パラメータの既定値を指定する。
MSGCTRL 項で省略したパラメータに対して、本項で設定したパラメータの設定値が使用される。

パラメータの説明

MSGCTRL 項を参照すること。

2. 14. 4 MSGCTRL 項

形式

%MSGCTRL	
ACCESSPOINT	= アクセスポイント名
[SETTINGGROUP	= グループ番号]
[SENDTHRLIMIT	= 送信スレッド最大占有数]
[RCVTHRLIMIT	= 受信スレッド最大占有数]
[SENDQESIZE	= 送信待ちキューサイズ]
[RCVQESIZE	= 応答受信待ちキューサイズ]
[MSGTIMEOUT	= 電文送受信タイムアウト時間]
[MSGERREXIT	= 送受信エラー出口名]
[LSNRWAITTIME	= リスナ接続最大時間]
;	

説明

宛先アクセスポイントおよび宛先アクセスポイント内定義グループ単位に、電文送受信制御パラメータを指定する。

MSGCTRL 項を指定しなかった宛先は、DEF_MSGCTRL 項での設定値で SETTINGGROUP=1 として設定される。

パラメータの説明

ACCESSPOINT

制御対象の宛先アクセスポイント名を指定する。(英数字:1～15 文字、必須)
SYSMAP-LOGSYSTEM-ACCESSPOINT-NAME に存在するアクセスポイントを指定する必要がある。
また、SYSMAP-LOGSYSTEM-ACCESSPOINT-PROTOCOL で指定したプロトコルが、SYSMAP-PROTOCOL-CONN_TIMING を ONETIME (都度接続) に指定しているアクセスポイントである必要がある。
自論理システム配下のアクセスポイントを指定した場合、その項の設定は使用されない。

SETTINGGROUP

定義グループ番号を指定する。(数字 : 1～255)
省略した場合、1 が設定される。

SENDTHRLIMIT

同時に占有する送信スレッド数の上限を指定する。(数字 : 1～32767)
指定する値は都度接続送信デーモン 1 プロセスあたりの値である。
COMMON 項 SENDTHR の値以上を指定した場合、SENDTHR の値が実施的な上限となる。
省略した場合、32767 が設定される。

RCVTHRLIMIT

同時に占有する受信スレッド数の上限を指定する。(数字 : 1～32767)
指定する値は都度接続送信デーモン 1 プロセスあたりの値である。
COMMON 項 RCVTHR の値以上を指定した場合、RCVTHR の値が実施的な上限となる。
省略した場合、32767 が設定される。

SENDQESIZE

送信待ちキューに滞留できる最大件数を指定する。(数字 : 1～32767)
指定する値は都度接続送信デーモン 1 プロセスあたりの値である。
省略した場合、100 が設定される。

RCVQESIZE

受信待ちキューに滞留できる最大件数を指定する。(数字 : 1～32767)

指定する値は都度接続送信デーモン 1 プロセスあたりの値である。
省略した場合、1000 が設定される。

MSGTIMEOUT

送受信タイムアウト時間の既定値を秒単位に指定する。(数字：1～32767)
省略した場合、60 が設定される。

MSGERREXIT

送受信エラー出口名を設定する。(英数字:1～30 文字)
省略した場合、送受信エラー出口は呼び出されず、エラー電文は破棄される。

LSNRWAITTIME

電文を宛先に送信する際に、1 リスナあたりにかける最大時間を秒単位に指定する。(数字：1～32767)
省略した場合、送受信タイムアウト時間(API で指定した場合は API の値)÷リスナ数で自動計算される。

2. 15 SYSMAP (論理システム構成定義)

2. 15. 1 SYSMAP 節

形式

```
$SYSMAP
  [%DEFAULT
    パラメータ記述
  ;]
  {%LOGSYSTEM
    パラメータ記述
    {%ROUTE
      パラメータ記述
    ;}...
  [%ACCESSPOINT
    パラメータ記述
    [%LISTENER
      パラメータ記述
    ;]...
  ;]...
  ;}...
  [%PROTOCOL
    パラメータ記述
  ;]...
;
```

説明

サブシステム間／拠点間の論理システムの構成を定義する。(論理システム単位、省略可)
省略した場合、論理システム間通信は動作しない。

項の説明

DEFAULT 項

SYSMAP 節内での既定値を定義する。(最大 1 個、省略可)
省略した場合は LOGSYSTEM 項の値に従い動作する。

LOGSYSTEM 項

論理システムに関する情報を定義する。(最大 255 個、必須)

ROUTE 項

DIOSA/XTP の制御プロセスが論理システムとの通信に必要な設定を定義する。(LOGSYSTEM 項配下で最大 16 個、必須)

ACCESSPOINT 項

業務プロセスが論理システムとの通信に必要な設定を定義する。(LOGSYSTEM 項配下で最大 64 個、省略可)
省略した場合、省略した論理システムとの通信は行えない。

LISTENER 項

業務プロセスが論理システムと都度接続による通信に必要な設定を定義する。(ACCESSPOINT 項配下で最大 32 個、省略可)
省略した場合、論理システムとの都度接続通信は行えない

PROTOCOL 項

論理システム間の通信で使用するプロトコルを定義する。(最大 255 個、省略可)
省略した場合、受信電文に応じた処理プロセス (TPP) の選択は行えない。

2. 15. 2 DEFAULT 項

形式

```
%DEFAULT
    [PORT_CDD      = ポート番号
    [PORT_DLT      = ポート番号 ]
    [PROTOCOL      = プロトコル名 ]
    [LSNR_INIT     = リスナ初期化出口 ]
    [LSNR_TERM     = リスナ終了出口 ]
    [LSNR_IT_LIB   = ライブラリ名]
    [NOTIFY_CO     = 接続切断同期通知 CO 名]
    [NOTIFY_TXID   = 接続切断同期通知 TXID]
    [RECOVERY      = { ALL | SEND | RECV | NO } ]
    [MAXCONNECT    = 同時最大接続数 ]
;
```

説明

SYSMAP 節内で使用する既定値を定義する。

パラメータの説明

PORT_CDD

LOGSYSTEM 項配下の PORT_CDD の既定値を定義する。(10 進表記の数字 : 1025～65535 もしくは 1～31 文字までのサービス名、最大 1 個、省略可)

PORT_DLT

LOGSYSTEM 項配下の PORT_DLT の既定値を定義する。(10 進表記の数字 : 1025～65535 もしくは 1～31 文字までのサービス名、最大 1 個、省略可)

PROTOCOL

論理システムと通信する際のプロトコル名を指定する。(英数字 : 1 から 31 文字、最大 1 個、省略可)
指定したプロトコル名は PROTOCOL 項パラメータ NAME で定義されていること。
LOGSYSTEM 項でパラメータ PROTOCOL を省略した場合、本パラメータで指定した値が設定される。
DEFAULT 項、LOGSYSTEM 項、ACCESSPOINT 項のいずれかで指定すること。

LSNR_INIT

TPBASE のリスナ起動時に呼び出されるリスナ初期化出口を指定する。(英数字:1～30 文字、最大 1 個、省略可)
LOGSYSTEM 項で LSNR_INIT を省略した場合、DEFAULT 項で指定された値が使用される。
LOGSYSTEM 項、DEFAULT 項の両方で省略された場合、リスナ初期化出口は呼び出されない

LSNR_TERM

TPBASE のリスナを停止時に呼び出されるリスナ終了出口を指定する。(英数字:1～30 文字、最大 1 個、省略可)
LOGSYSTEM 項で LSNR_TERM を省略した場合、DEFAULT 項で指定された値が使用される。
LOGSYSTEM 項、DEFAULT 項の両方で省略された場合、リスナ終了出口は呼び出されない。

LSNR_IT_LIB

リスナ初期化出口、リスナ終了出口を含むライブラリ名を指定する。(英数字:1～255 文字、最大 1 個、省略可)
LOGSYSTEM 項で LSNR_IT_LIB を省略した場合、DEFAULT 項で指定された値が使用される。

LSNR_INIT, LSNR_TERM を本指定した場合、DEFAULT 項または LOGSYSTEM 項のいずれかで必ず指定すること。

ライブラリ名が’/’から始まる場合は指定されたライブラリをロードする。’/’から始まらない場合は環境変数 LD_LIBRARY_PATH に従いライブラリをロードする。

NOTIFY_CO

論理システムとの接続・切断イベントが発生した際に呼び出す CO 名を指定する。(英数字：1～30 文字、最大 1 個、省略可)

LOGSYSTEM 項で NOTIFY_CO を省略した場合、DEFAULT 項で指定された値が使用される。

LOGSYSTEM 項、DEFAULT 項の両方で省略された場合、接続切断同期通知 CO は呼び出されない。

NOTIFY_TXID

論理システムとの接続・切断イベントが発生した際に呼び出す CO の TXID を指定する。(英数字：1～6 文字、最大 1 個、省略可)

LOGSYSTEM 項で NOTIFY_TXID を省略した場合、DEFAULT 項で指定された値が使用される。

NOTIFY_CO を指定した場合は、LOGSYSTEM 項、DEFAULT 項のいずれかで必ず指定すること

RECOVERY

アクセスポイントとの接続が障害により切れた場合に、自動復旧する対象を指定する。(最大 1 個、省略可)

パラメータ	説明
ALL	全ての端末を復旧する
SEND	送信用端末を復旧する
RECV	受信用端末を復旧する
NO	復旧を行わない

省略した場合は NO が指定される。

LOGSYSTEM 項でパラメータ RECOVERY を省略した場合は DEFAULT 項で指定した値が設定される。

復旧を試みる回数、間隔は TPBASE の端末定義 AUTCNT, AUTTIME に従って行われる。

ACCESSPOINT 項で送受信端末(送受信を同じ端末で行う)し、RECOVERY に SEND, RECV が指定された場合、RECOVERY に ALL が指定されたとみなす。

MAXCONNECT

都度接続で通信を行う場合に、アクセスポイント毎の同時最大接続数を指定する。(10 進表記の数字：0～65535、最大 1 個、省略可)

0 を指定した場合は接続数の制限は行わず、OS で設定されたソケット数の上限まで接続を行う。

省略した場合は 0 が指定される。

LOGSYSTEM 項、ACCESSPOINT 項で MAXCONNECT を省略した場合は、DEFAULT 項で指定した値が設定される。

2. 15. 3 LOGSYSTEM 項

形式

%LOGSYSTEM	
LSNAME	= 論理システム名
LSID	= 論理システム ID
HOSTTYPE	= ホスト種別
[PROTOCOL	= プロトコル名]
[LSNR_INIT	= リスナ初期化出口]
[LSNR_TERM	= リスナ終了出口]
[LSNR_IT_LIB	= ライブラリ名]
[NOTIFY_CO	= 接続切断同期通知 CO 名]
[NOTIFY_TXID	= 接続切断同期通知 TXID]
[RECOVERY	= { ALL SEND RECV NO }]
[MAXCONNECT	= 同時最大接続数]
;	

説明

論理システムに関する情報を定義する。

パラメータの説明

LSNAME

論理システム名を定義する。(英数字：1～15 文字、最大 1 個、必須)
SYSMAP 節内でユニークな名前とする。

LSID

論理システム ID を定義する。(数字：1～255、最大 1 個、必須)
SYSMAP 節内でユニークな番号とする。

HOSTTYPE

ホストの種別を指定する。(00～FF までの 16 進表記で指定する、必須)

パラメータ	説明
01	DIOSA/XTP が実装されたホスト
00, 02～40	予約
41～FF	その他のシステム(接続する他システム)

PROTOCOL

論理システムと通信する際のプロトコル名を指定する。(英数字：1 から 31 文字、最大 1 個)
指定したプロトコル名は PROTOCOL 項パラメータ NAME で定義されていること。
LOGSYSTEM 項でパラメータ PROTOCOL を省略した場合、DEFAULT 項で指定した値が設定される。
DEFAULT 項、LOGSYSTEM 項、ACCESSPOINT 項のいずれかで指定すること。

LSNR_INIT

TPBASE のリスナ起動時に呼び出されるリスナ初期化出口を指定する。(英数字:1～30 文字、最大 1 個、省略可)
LOGSYSTEM 項で LSNR_INIT を省略した場合、DEFAULT 項で指定された値が使用される。
LOGSYSTEM 項、DEFAULT 項の両方で省略された場合、リスナ初期化出口は呼び出されない。

LSNR_TERM

TPBASE のリスナを停止時に呼び出されるリスナ終了出口を指定する。(英数字:1～30 文字、最大 1 個、省略可)

LOGSYSTEM 項で LSNR_TERM を省略した場合、DEFAULT 項で指定された値が使用される。
LOGSYSTEM 項、DEFAULT 項の両方で省略された場合、リスナ終了出口は呼び出されない。

LSNR_IT_LIB

リスナ初期化出口、リスナ終了出口を含むライブラリ名を指定する。(英数字:1～255 文字、最大 1 個、省略可)
LOGSYSTEM 項で LSNR_IT_LIB を省略した場合、DEFAULT 項で指定された値が使用される。
LSNR_INIT, LSNR_TERM を指定した場合、LOGSYSTEM 項または DEFAULT 項のいずれかで必ず指定すること。
ライブラリ名が'/' から始まる場合は指定されたライブラリをロードする。'/' から始まらない場合は環境変数 LD_LIBRARY_PATH に従いライブラリをロードする。

NOTIFY_CO

論理システムとの接続・切断イベントが発生した際に呼び出す CO 名を指定する。(英数字：1～30 文字、最大 1 個、省略可)
LOGSYSTEM 項で NOTIFY_CO を省略した場合、DEFAULT 項で指定された値が使用される。
LOGSYSTEM 項、DEFAULT 項の両方で省略された場合、接続切断同期 CO は呼び出されない。

NOTIFY_TXID

論理システムとの接続・切断イベントが発生した際に呼び出す CO の TXID を指定する。(英数字：1～6 文字、最大 1 個、省略可)
LOGSYSTEM 項で NOTIFY_TXID を省略した場合、DEFAULT 項で指定された値が使用される。
NOTIFY_CO を指定した場合は、LOGSYSTEM 項、DEFAULT 項のいずれかで必ず指定すること

RECOVERY

アクセスポイントとの接続が障害により切れた場合に、復旧する対象を指定する。(最大 1 個、省略可)

パラメータ	説明
ALL	全ての端末を復旧する
SEND	送信用端末を復旧する
RECV	受信用端末を復旧する
NO	復旧を行わない

省略した場合は DEFAULT 項で指定した値が設定される。
ACCESSPOINT 項パラメータ RECOVERY を省略した場合は LOGSYSTEM 項の値が設定される。
復旧を試みる回数、間隔は TPBASE の端末定義 AUTCNT, AUTTIME に従って行われる。

MAXCONNECT

都度接続で通信を行う場合に、アクセスポイント毎の同時最大接続数を指定する。(10 進表記の数字:0～65535、最大 1 個、省略可)
0 を指定した場合は接続数の制限は行わず、OS で設定されたソケット数の上限まで接続を行う。
省略した場合は DEFAULT 項で指定した値が設定される。

2. 15. 4 ROUTE 項

形式

```
%ROUTE
    IPADDR      = IP アドレス
    [ PORT_CDD  = ポート番号 ]
    [ PORT_DLT  = ポート番号 ]
;
```

説明

DIOSA/XTP の制御プロセスが論理システムとの通信に必要な設定を定義する。

パラメータの説明

IPADDR

IP アドレスを定義する。(IPv4 ドット付き十進表記もしくは 1～256 文字までのホスト名、最大 1 個、必須)

PORT_CDD

コマンド配信機能が使用するポート番号を定義する。(10 進表記の数字：1025～65535 もしくは 1～31 文字までのサービス名、省略可)

省略した場合は SYSMAP-DEFAULT 項に定義された値を設定する。

なお、SYSMAP-DEFAULT 項が省略されていた場合は、コマンド配信機能は使用できない。

PORT_DLT

ディレード転送機能が通信する際に使用するポート番号を指定する。(10 進表記の数字：1025～65535 もしくは 1～31 文字までのサービス名、省略可)

省略した場合は SYSMAP-DEFAULT 項に定義された値を設定する。

なお、SYSMAP-DEFAULT 項が省略されていた場合は、ディレード転送機能は使用できない。

2. 15. 5 ACCESSPOINT 項

形式

```
%ACCESSPOINT
    NAME          = アクセスポイント名
    [ PROTOCOL    = プロトコル名 ]
    [ TERM        = 送受信用端末名 } ]...
    [ SEND_TERM   = 送信用端末名 } ]...
    [ RECV_TERM   = 受信用端末名 } ]...
    [ RECOVERY    = { ALL | SEND | RECV | NO } ]
    [ MAXCONNECT  = 同時最大接続数 ]
    [ %LISTENER ; ]...
;
```

説明

業務プロセスが論理システムとの通信に必要な設定を定義する。

パラメータの説明

NAME

アクセスポイント名を指定する。(英数字：1～15 文字、最大 1 個、必須)

PROTOCOL

アクセスポイントとの通信で使用するプロトコルを指定する。(英数字：1～31 文字、最大 1 個、省略可)
省略した場合は LOGSYSTEM 項 PROTOCOL で指定されたプロトコルを使用する。
DEFAULT 項、LOGSYSTEM 項、ACCESSPOINT 項のいずれかで必ず指定する。

TERM

アクセスポイントとの送受信で使用する端末名を指定する。(英数字：1～31 文字、最大 32 個、省略可)

SEND_TERM

アクセスポイントへ送信する際の端末名を指定する。(英数字：1～31 文字、最大 32 個、省略可)

RECV_TERM

アクセスポイントから受信する際の端末名を指定する。(英数字：1～31 文字、最大 32 個、省略可)

RECOVERY

アクセスポイントとの接続が障害により切れた場合に、自動復旧する対象を指定する。(最大 1 個、省略可)

パラメータ	説明
ALL	全ての端末を復旧する
SEND	送信用端末を復旧する
RECV	受信用端末を復旧する
NO	復旧を行わない

省略した場合は LOGSYSTEM 項で指定した値が設定される。

復旧を試みる回数、間隔は TPBASE の端末定義 AUTCNT, AUTTIME に従って行われる。

都度接続の場合には自動復旧は行わない。

MAXCONNECT

都度接続で通信を行う場合に、アクセスポイント毎の同時最大接続数を指定する。(10 進表記の数字：0～65535、最大 1 個、省略可)

0 を指定した場合は接続数の制限は行わず、OS で設定されたソケット数の上限まで接続を行う。

省略した場合は LOGSYSTEM 項で指定した値が設定される。

プロトコルが都度接続の場合に有効となる。都度接続以外のプロトコルでは無視される。

注意事項

- パラメータ TERM、SEND_TERM、RECV_TERM、LISTENER 項は以下のように設定する。
 - 1 つの端末を送信、受信で使用する場合はパラメータ TERM に端末名を指定する。
 - 送信、受信で異なる端末を使用する場合は、送信用の端末をパラメータ SEND_TERM に、受信用の端末を RECV_TERM にそれぞれ指定する。送信のみの場合は SEND_TERM、受信のみの場合は RECV_TERM を設定する。
 - 都度接続による通信を行う場合は LISTENER 項を指定する。

上記 3 つのパターンの内、1 つを選択して設定する。例えば 1 つの ACCESSPOINT 項で送受信用の端末と都度接続の LISTENER 設定は行えない。

2. 15. 6 LISTENER 項

形式

%LISTENER		
NAME	=	リスナ名
IPADDR	=	IP アドレス
PORT	=	ポート番号
;		

説明

アクセスポイントと都度接続で送受信を行うための情報を定義する。

パラメータの説明

NAME

リスナ名を指定する。DIOSA/XTP を使用するシステムの場合は TPBASE の環境定義で指定したリスナの名称(LSNQNAME)を指定する。(英数字：1～27 文字、最大 1 個、必須)

IPADDR

アクセスポイントへ接続する際の IP アドレスを指定する。(IPv4 ドット付き十進表記もしくは 1～256 文字までのホスト名、最大 1 個、必須)

PORT

アクセスポイントへ接続する際のポート番号を指定する。(数値：1～65535 もしくは 1～31 文字までのサービス名、最大 1 個、必須)

2. 15. 7 **PROTOCOL 項**

形式

%PROTOCOL	
NAME	= プロトコル名
CONN_TIMING	= { FULLTIME ONETIME }
HEADERLEN	= 電文ヘッダ長
LSNR_MAIN	= リスナ電文送受信時出口
LSNR_M_LIB	= ライブラリ名
;	

説明

パラメータの説明

NAME

プロトコルを識別する名前を設定する。(英数字：1～31 字、最大 1 個、必須)
SYSMAP 節内で一意の名前を設定する。

CONN_TIMING

通信に使用するパスの接続タイミングを指定する。(最大 1 個、必須)

パラメータ	説明
FULLTIME	常時接続。システム起動時などに接続する。
ONETIME	都度接続。通信を行うごとに接続・切断する。

HEADERLEN

プロトコルで使用する電文形式のヘッダ長を指定する。(数値：1～4096、最大 1 個、必須)

LSNR_MAIN

TPBASE の通信リスナまたは都度接続の送信デーモンが電文を送受信する前に呼び出されるリスナ電文送受信時出口名を指定する。(英数字：1～30 文字、最大 1 個、必須)

LSNR_M_LIB

リスナ電文送受信時出口が含まれるライブラリ名を指定する。(英数字:1～255 文字、最大 1 個、必須)
TPBASE の通信リスナでは、ライブラリ名が’/’ から始まる場合は指定されたライブラリをロードする。’/’ から始まらない場合は環境変数 LD_LIBRARY_PATH に従いライブラリをロードする。
都度接続機能の送信デーモンではアプリケーション動的置換機能を用いてライブラリをロードする。

2. 16 TMCENV (タイマ制御機能)

2. 16. 1 TMCENV 節

形式

```
$TMCENV
    [%TIMERSET
        パラメータ記述
    ;]
;
```

説明

タイマ制御機能の SG タイマ登録コマンドで登録するためのタイマ要求を定義する。(論理ノード単位、省略可)
省略した場合、SG タイマ登録コマンドを実行してもタイマ要求は登録されない。

項の説明

TIMERSET 項

SG タイマ登録コマンドで登録するタイマ要求を定義する。(最大 2048 個、省略可)

2. 16. 2 TIMERSET 項

形式

%TIMERSET		
TIMERID	=	タイマ ID
, TYPE	=	{INTER IMME CLOCK}
[, HOUR	=	時間]
[, MINUTE	=	分]
[, SECOND	=	秒]
[, COUNT	=	通知回数]
[, SENDTYPE	=	{ <u>CO</u> CMD}]
[, CONAME	=	CO 名
, TXID	=	トランザクション ID]
, TEXT	=	"メッセージ"
;		

説明

SG タイマ登録コマンドで登録するタイマ要求を定義する。

パラメータの説明

TIMERID

登録するタイマ ID を指定する。(英数字：1～16 文字、必須)

TYPE

タイマの時刻形式を指定する。(必須)

パラメータ	説明
INTER	インターバル指定 (メッセージ通知時間で指定した時間間隔毎にタイマ通知を行う。)
IMME	即時指定 (タイマ登録時に初回のタイマ通知を行う。2 回目以降はインターバル指定と同じ。)
CLOCK	時刻指定 (メッセージ通知時間で指定した時刻にタイマ通知を毎日行う。)

HOUR

タイマ要求のメッセージ通知時間間隔(時間単位部)を指定する。(0～23、省略可)
省略時は 0 となる。

MINUTE

タイマ要求のメッセージ通知時間間隔(分単位部)を指定する。(0～59、省略可)
省略時は 0 となる。

SECOND

タイマ要求のメッセージ通知時間間隔(秒単位部)を指定する。(0～59、省略可)
省略時は 0 となる。

COUNT

通知回数を指定する。(0～999、省略可)
0 を指定した場合は、無限回を意味する。
省略時は 1 となる。

SENDTYPE

タイマの通知先を指定する。(省略可)
省略した時は C0 とする。

パラメータ	説明
C0	C0 タイマ登録する
CMD	コマンドタイマ登録する

CONAME

宛先の C0 名を指定する。(英数字：1～30 文字)
C0 タイマの時は省略不可である。
コマンドタイマの時は指定不可である。

TXID

トランザクション ID を指定する。(英数字：1～6 文字)
C0 タイマの時は省略不可である。
コマンドタイマの時は指定不可である。

TEXT

C0 タイマの場合、C0 に通知するメッセージを指定する。
コマンドタイマの場合、コマンドイメージを指定する。
どちらの場合もダブルクォーテーションで囲って指定すること。(任意文字列：1～200 バイト、必須)

注意事項

- 同一タイマ ID のタイマが登録されている場合、上書き登録を行う。
- TYPE が INTER、または IMME の場合、HOUR, MINUTE, SECOND 全てが 0 となる指定はできない。
- コマンドタイマの場合、実行対象コマンドの終了ステータスが、126, 127 となる場合、コマンド実行エラーとして扱う。

DIOSA/XTP V3.1
環境定義リファレンス

2023 年 6 月 2 版

日本電気株式会社
東京都港区芝五丁目 7 番 1 号
TEL (03) 3454-1111 (大代表)

©NEC Corporation 2023

日本電気株式会社の許可なく複製・改変などを行うことはできません。

本書の内容に関しては将来予告なしに変更することがあります。